

---

# IS <インフィニット・ストラトス> シグマ

川部 賀津樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> シグマ

### 【Nコード】

N2214S

### 【作者名】

川部 賀津樹

### 【あらすじ】

学校をサボろうとした時崖から落ちてしまった。

そこには遺跡があり主人公加津佐が中に入った。

その時黒い霧に包まれ、起きた時そこは違う世界だった。

## 平行世界（前書き）

どうだったか感想をください。

## 平行世界

<加津佐>

「世界に……が迫って……る」  
誰の声？

「い……で」

え……

光に包まれ目が覚めた。

何だ今の夢？

今何時？

……げっ遅刻！

ヤバイ

今日も面白い事が有りますように

僕は急いで着替えて二階から飛んだ。

ふゝ今日は良い着地

考えている場合じゃない。

全速力で学校に向かって走った。

何で誰も起こしてくれないんだ？

それは簡単僕1人暮らし

くそ……何であいつ等起こしに来ないんだ!?

近道するか

山の道を上に上がり見えた。

だが キーンコンーカンーコンー

あ……チャイム成った。

よし、サボろう

諦めて帰ろうとした時 バリ!

何!?

「うわぁあああああ  
崖から落ちた。」

目が覚めた時僕の目の前には洞窟があった。

「誰かー！ー！ー！」

これじゃ上まで上がるのは無理だな

携帯は？

携帯を見たが件がいか

は~~~~

ため息をつき洞窟の中に入った。

その時、「何だ!？」

黒い霧が出て来た。

体が黒い霧に包まれた。

「今度は何だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!?!?!?」

<束&千冬>

「何だろうね?あれ」

「どうした束」

「何か黒い霧が出て来て人が落ちて来たよ。ちーちゃん」

「何を言っている?」

私は東のモニターを見た。

まさか!?

本当に人が落ちて来たらしい。

「急ぐぞ東」

「分かったよ~~~~~」

私達は、落ちて来た人の所に向かった。

何故コイツISのコアを持っているんだ!?

「東これはISのコアか?」

「うん、そうだね。何で持って入るんだろうね。ちーちゃん?」  
何故貴様は楽しそうなんだ?

「取りあはず運ぶぞ」

「そうだね。」

落ちて来た奴を東の研究所に連れて行った。

「う……此処わ?」

「起きたか」

僕が起きると目の前に知らない人が入た。

誰だろう?綺麗な人だな

「貴方は誰ですか？」

「すまない。私の名前は織斑 千冬」

「僕の名前は奇跡 加津佐です。」

「加津佐かよろしく。」

「よろしくお願ひします。」

礼儀正しいなこの人

僕より年上だなきつと

でも、何処なんだ個々々？

「加津佐付いて来い。」

「はい。」

部屋を出て違う部屋に向かった。

研究所かな個々々？

「あのお織斑さん」

「何だ？」

「何処に向かつて入るんですか？」

「直ぐわかる後私の事はこれから千冬と呼べ」

「はい。」

でも何で？

その事を考えて入ると

ドアの前に着いた。

「私だ。」

千冬さんがそう言うとドアが開いた。

「ちーちゃん暇だったよ〜〜〜〜」

誰かが千冬さんに飛びつこうとした。

僕は目の前で凄いテクニクテクを見た。

アイアンクローと結う凄い技

「いい加減にしろ！」

もしかして千冬さんて怖いのかな？

「あ・・・起きたの〜〜起きたの」

「東、加津佐が話せないだろ」

「そうだね。」

何て明るい人だ。

「僕の名前は奇跡 加津佐です。」

「私が天才の束さんだよ。」

天才の束さん？

「それじゃまず質問だ？」

「はい。」

「何処から此処に来た。」

何処から？



.....

確か学校の近くの山で帰ろうとした時崖から落ちて遺跡の中に入った時黒い霧に体が包まれたんだよな  
信じてもらえるかな？

「遺跡の中に入った時黒い霧に体包まれて気が付いたら此処にいました。」

「本当だな」

「はい。」

嘘は着いていないな

「分かった。信じよう。」

「次の筆問だ。」

「はい。」

「何故ISのコアを持っていた。」

IS？

何だそれ？

「ISって何ですか？」

「加津佐お前ISを知らないのか？」

「はい。知りません。」

「ねね。ちーちゃんもしかして.....なのかな？」

「分からない。それはまた後だ。」

「東お前が言っ入る事が正しいか試してくる。」

「そうだね。」

千冬さんが東さんと何かを話している。

何だろう？

「加津佐こつちに来てくれ」

「はい。」

また千冬さんに連れて行かれた。

今度は何処なんだろう？

そしてまた違う部屋に入った

今度は部屋の中に何かがある。

「加津佐これがISだ。」

これがIS

ロボット？

「触れてみる」

「はい。」

近くに行きISに触れた。

するとISが光った。

何!?

加津佐に反応しているのか？

「東多分お前の言っている事は正しいのかも知れない。」

「凄いね。まさか反応するなんてね〜〜」

「加津佐乗ってみるか？」

「乗れるんですか？」

「ああ。」

これに乗れるだ。凄いなISSって

僕はISSに乗った。

え・・・動いた。

浮いてる凄い！！

その後ISSの説明に使い方、武器の出し方色々教えてもらった。  
此の世界の事、どうやら個々は僕の世界と違うらしい。

そして僕は5日後束さんの研究所を出て僕は千冬さんと一緒に日本に帰った。

最後に束さんが言っていた事が気になるな

えくと「ISS完成したら送るからね~~~~~かづくんー」  
って言ってたな。

僕のISSな訳が無いか

「千冬さん僕家とか持って入ません。」

「そんな事は気にするな。」

「はい。」

でも、お金も無いし

僕生きていけるのかな？

空港に着いて車でISS学園と結ぶ所に行くらしい。

楽しみだな~~~~

「加津佐お前は転校扱いだ。」

「はい。でも、何故ですか？」

「違う世界から来たって言うって誰が信じる。」

「そうですね。ありがとうございます。」

「あのお資料を呼んだ限りではISは女子しか動かせないと書いて有ったんですけど」

「気にするな。後ISを動かせる男子はもう1人入るぞ」

「本当ですか!？」

「ああ。」

良かった〜

IS学園で男子1人は嫌だからな  
でも、誰だろう？

IS学園に到着

.....

広い僕の学校の何倍広いんだ。

そして車を止めIS学園に入った。

「加津佐お前のクラスは1-1だ。後学園では織斑先生だ。」

「はい。」

千冬さんって先生だったんだ。

< 1 - 1 >

「今日は皆さんに転校生を紹介します。入って来てください。」

僕は扉を開け中に入った。

「自己紹介をお願いします。」

「僕の名前は加津佐です。よろしくお願いします。」  
.....  
何か不味かったのかな？

「キャー——————男子」

「しかも天然系よ……」  
え・・僕天然なの？

どっちかと結うと運動系何ですけど

「生まれて良かった—————」

千冬さんが「静かにしろ……！」と言つと皆は静まった。  
凄いな〜千冬さん

「加津佐お前の席は織斑の後ろだ。」

「はい。」

僕は自分の席に歩いていると

この人かな男子でISを動かしたって結う人

席に着き一時間目が始まった。

キンコーカーカーコー

やっと一時間目が終わった——

しかし授業レベル高かった。

僕がそんな事考えていると

「俺織斑　一夏よろしく。一夏って呼んでくれ」

この人が男子で唯一ESを動かせる人かな

「セシリア・オルコットですわ。セシリアとお呼びください。」

「篠ノ之箒だ。箒で構わない」

僕この学園で上手く遣って行けそうだよ。じーちゃん

平行世界（後書き）

次回 僕のIS

僕のIS(前書き)

感想待っています。



## 僕のIS

「加津佐くん君の部屋は此処です。」

授業が終わり山田先生に僕の部屋の案内をしてもらっていた。

「はい。」

「それではこれで」

「有難う御座いました。」

山田先生は多分天然だな

鍵で部屋を開けるとそこには

1人部屋だー

広い、ベットが2つ有る何で？パソコンだ最高だ。

じーちゃん僕生まれて良かった。

すると

コンコン

「はい。どちら様ですか？」

「俺一夏だ。」

「入って良いよ。」

「おう。邪魔するぜ」

「加津佐飯食いに行こうぜ。」  
「飯食堂？」

「ここって食堂だよね一夏」

「ああ。」

「行こう。」

何だ加津佐いきなり元気に成った。  
まあいいか

食堂に行く途中

「一夏私も同席させて貰う。」

「ああ。」

「一夏さん私もですわ」

「ああ。」

左右にセシリアさんと箒さんが入た。

一夏頑張れ

僕は一夏の10メートル後ろを歩いた。

これは、目の通信

「加津佐助けてくれ・・・」

僕も一夏に返した。

「無理です。」

「何だよ。」

初めっから喋ってくれ一夏

そうして食堂に着いた。

すげーーーーーでけーーーーー広ーーーーい

しかもメニューが沢山ある

「加津佐此处に座ろうぜ」

「おう。」

一夏の左右にセシリアさんと篝さんが座った。  
僕は向かいの席に座った。

「加津佐何でそんな所に座ってたんだ。」

個々は目の暗号通信で

「気にするな。関わりと後が怖い」

「一夏も返してきた。」

「何が怖いのか？」

「分からないのか一夏？」

「席を達一夏が座っている席に座る。」

「無論一夏から5メートル離れた場所に座っている。」

「加津佐って千冬姉の事知ってるのか？」

「うん。」

「何で？」

「平行世界から来た事は、言っではならないと言っただけだね。千冬さん」

「迷ってたらいつの間に崖から落ちて僕を助けてくれたのが千冬さんと束さん何だ。」

「千冬さんと束さん……!!」

「束さん……!!」

「加津佐今束と言っただけで入らなかったか？」

「そうだけど。どうかしたの篝さん」

「あ……そいやー束さんって篝さんのお姉さんだったっけ  
そいやこれも喋っては行けなかった。」

「加津佐お前一体・・・」

「さっさと飯を食べて寝ろ!!」

千冬さんがそう言うのと皆急いで食べて何処かに行った。

「加津佐急げ」

何か分からないけど急ごう

かつ丼を1分で食べて食堂を後にした。

部屋に戻る時も大変だった。

左右にセシリアさんと篝さんが入た。

やはり一夏お前は、女運が良いんだな

皆と別れ部屋に戻ってシャワーを浴びて寝た。

朝に成り僕はランニングに出た。

それにしても広いなーーー

「加津佐」

我らが教師織斑先生だ。

「おはようございます。」

「ランニングか？」

「はい。運動しないと体がなまるんで」

「無理だけはするなよ。」

「はい。」

もう少し走って部屋に戻ろう。

ランニングを終わり部屋に戻った。

ふ〜〜疲れた〜〜

シャワーを浴びて制服に着替えて部屋を出た。

一夏がちょうど出て来た。

「おはよう。加津佐」  
「一夏」

「おはよう。一夏」  
「僕」

「おはよう。加津佐」  
「箒」

何て事でしょう。

一夏の部屋から箒さんが出て来たでは有りませんか？

そいや・・・一夏の部屋の表札に箒って書いて有ったな

「おはよう。箒さん」

学園に向かった。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦をにしてもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる後で加津佐は私にに着いて来い。」  
四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。僕は今日もこうして織斑先生の授業を真面目に受けていた。  
じゃないと大変な眼に会うからね。

でも何で僕だけ？

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」  
せかされて、意識を集中させる

ISは一度フィッティングしたらずっと操縦者の体のアクセサリーの形状で持機している。セシリアは左耳のイヤークラス。

俺は右腕のガントレット。・・・いや、普通はアクセサリーらしいんだが俺のは完全に防具だよな。なんでだろうか？

「集中しろ」

いかん。次は叩かれる。

俺は右腕を突き出し、ガントレットを左腕で掴む。色々試して、このポーズが一番集中できるーというより、ISの展開されるのをイメージができる。

「来い、百式」

そう心でつぶやく。刹那、右手首から全身に

。

約0.7秒の展開時間。俺の体から光の粒子が解放されるように溢れて、再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。ふわりと体が軽くなる。各種センサーが意識に接続され、世界の解像度が上がる。一度瞬きをすると、俺の体はIS「百式」を装備した状態で地面から十数センチ浮遊していた。

同じくセシリアもIS「ブルー・ティアーズ」を装備して浮かんでいる。俺が対戦で壊したビットは、もう完全に修復が終わっていた。「よし、飛べ」

言われて、セシリアの行動は早かった。急上昇し、遙か頭上で止まっていた。

俺も後に続くが、その上昇速度はセシリアより遅いものだった。

「何を遣やっている。百式の方がスペックは上だぞ」

通信回線からさっそくおしかりの言葉を受ける。

「一夏さんよろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。その時は2人きりでー」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」  
通信回線から怒鳴り声が響く

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地

表から十センチだ。後山田先生頼みます。」

「はい。」

「加津佐来い！」

「はい。」

僕は織斑先生と何処かに行く。  
どこに行くんだろう？  
歩いた。

何でピット？

「加津佐お前のISが届いて入るぞ」

「本当ですか。」

加津佐そんなに嬉しいのか？

「取りあいず装着してみる。」

「はい。」

動かし方が頭に流れこんでくる。  
分かる。このIS僕の体見たい。

「そいつの名前はエプシロンだ。装着したら一夏達の所に行け。」

「はい。」

浮上してピットに着いた。

「いきます。」

速度を出しバレルロールしながら皆の所に行く。

「何だ!？」

皆の視線がピットから出て来た僕のISに目を向ける。  
急上昇して一夏の所へ

「一夏」

「その機体加津佐のか？」

「うん。」

加津佐も専用機持ちだったんだ。

「それより一夏早く降りないと」

「ああ。」

一夏急降下をした。

下でギョーンツーーーーズドオオンツ!!!

地上には着いた。ただしこれは専用用語で墜落らしい。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴をあけてど  
うする」

「・・・すいません。」

ISのシールドバリアーのおかげで百式には汚れ一つない。

「それじゃオルコット、加津佐、模擬戦をしてもらう。」

「はい。」

「え・・・加津佐さんですか？」

「ああ。そつだ」

「初心者相手にですか？」



「大丈夫だ。今のお前は絶対に負ける。」

この言葉にセシリアは

「分かりました。」

セシリアもISを展開させ再び上昇をしてきた。

「加津佐さん全力でいきますわよ。」

・・・

「うん。お手柔らかに」

「では始め!!」

キュインツ！耳をつんざくような音。それと同時に閃光飛んできた。僕はそれをかわす。

「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テ  
イアーズの奏でるワルツで！」

射撃、射撃射撃まさにビームの雨

でも僕は武器から接近ブレード「極光」をだした。

「それで何が出来ますの？」

「色々だね」

セシリアが再び「スターライトmk？」からビームが飛んできた。

「しつこいよ。」

僕はそのビームを斬る

「え・・・」

セシリア強いな

接近する。

次々とビームが飛んでくる。  
だが全て斬っておとした。

「これで!!」

「掛りましたわね。」

何!?

するとセシリアの後ろからビットが飛んできた。

嘘だろ

一発の弾丸が僕の横をとおる

「危な!」

あのビームをかわしたの!?

下で見ていた織斑先生が言う。

そろそろだな

シューー、モニターにフォーマットとフィッティング終了と出ていた。

これが束さんと千冬さんが言って入った第一移行

「第これってデジャブ?」

「しらない。」

「貴方もしかして今まで第一移行で戦ってましたの!?!」

「そう見たいんだね。本気で行くよ。」

後ろに着いていた僕のビットを展開

「それってビットでしたの!?!」



「ああ。そうだな」

そして再び左右に箒さんとセシリアが入た。  
頑張れ一夏

これは目の暗号通信

「頼む助けてくれ」

一夏僕

「ごめん食堂行かなくちゃ」

走って食堂にむかった。

後ろで

「加津佐ーーーーー」

と叫んだ声が聞えた。

今日のメニューはラーメンとチャーハン

「よく。食うな加津佐」

僕が着い5分後一夏達がやってきた。

「普通だ。」

マジかお前の胃袋おかしいだろ

「加津佐これから俺達とISの訓練しねーか？」

「何で？」

「いや加津佐経験者だからさIS教えてもらおうかと」

「別にいいよ。」

「それじゃ明日俺と一緒に来てくれ」

夜飯を食べ終わり部屋に戻った。

そう個の隣では一夏が篝さんと暮らしているのだ。  
たまに一夏成敗とか聞える。

今日は静かだな

今日も面白い事沢山有ったよ。じーちゃん

明日も何か面白い事有りそうだ。

じーちゃんと語りながら眠った。

そのよるIS学園の正面ゲート

「ふうん、ここがそうなんだ……」

僕のIS(後書き)

次回 転校生は一夏のセカンド幼馴染

転校生は一夏のセカンド幼馴染前篇（前書き）

まずは前編を見てください

## 転校生は一夏のセカンド幼馴染前篇

次の日の夕方

「だから……でだな……」

一夏はセシリアさんと篤さんに指導をしてもらっていた。

何の説明をしているか僕には分からない。

おっと一夏から目の通信だ。

「頼む……何とかしてくれ」

「って言っても僕が何か言っても聞きそうにないし

どうしよう？」

そのころ

「ええとそれじゃ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、  
凰 鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識に届かない。少女一鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったですって。やっぱり織斑先生の弟さんただけはあるわね」

噂好きは、女性の性。その体現のような事務員の姿を冷ややかに見ながら、鈴音は質問を続ける。

「二組の代表って、もう決まってるんですか？」

「決まっているわよ。」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の態度にすこしおかしいところを感じたのか、事務員はすこし



戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかなと思って。代表、あたしに譲ってっー」  
にっこりした笑顔には、ばっちりと血の気マークがついていた。

<  
>

「とうわけです！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

ばん、ばんぱん。クラッカーが鳴り響く。

今は一夏がクラス代表になった祝いをしているところ

ちなみに今は食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組メンバーは全員そろっていた。

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっていた。

「……………」

めでたくない。ちつともめでたくないぞ。なんだこのパーティーは  
ちらりと壁を見ると、そこにはデカデカと「織斑一夏クラス代表パ  
ーティ」と書いてある紙がかけてある。そうかクラス代表の一夏の  
パーティーか。……………はあ  
「いやーこれでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー同じクラスになれて、しかも男子が2人が  
内のクラスだしね。」

「ほんとほんと、」

え……………僕の事も話してる

そして「人気者だな一夏」「人気者だね一夏」

僕と篤さんの言葉重なった。

「本当にそう思うか？」

「ふん」「思うよ。」

篤は鼻を鳴らしてお茶を飲む。

一夏の目の通信だ。

「なんでこいつは機嫌が悪いんだ？」

「……一夏は何も気づいてない。」

「僕も返した。」

「わからん。」

「はいはい、新聞部です。話題の新生と転校生の特別インタビューをしました〜！」

「オーと一同盛り上がる。オーじゃねえよ。オーじゃ。」

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

「一夏は受け取っていた。」

その名前を見る。画数の多い漢字だ。書く本人は大変に違いない。

「ではではばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずっと俺に向け、無邪気な子供のように瞳を輝かせている。

「え……と」

なんとというか、俺はととても乗り気じゃないんだが、期待を裏切るわけにもいかない。どうせ俺は弱い日本人ですよ。俺は。

「まあ、なんとというか、がんばります。」

「一夏コメントがさびしい。」

何か嫌な予感がする逃げよう。

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

「なんだそりゃ。えらい前時代的な台詞だな。」

「自分不器用ですから」

「一夏乗りに合わせるタイプなんだ〜」

「うわ、前時代的！」

「なんだと、日本国の名優をブジョクする気が。」

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」  
「よくねえよ。」

「続けて加津佐くんコメントちょうだい。」

え・・・僕？

乗りに合わせた方がいいのかな？

「皆と仲良くしていきたいです。」

「キヤーーーーー加津佐くん~~~~私を貰ってーーーー」

「私に優しくしてーーーー」

「加津佐くんは優しいね。」

大変な事を言ってしまったらしい。

「ああ、セシリアちゃんコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言いつつ嬉しそうだなセシリアさん。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したか」というと、それはつまりー」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ・・・?」

ポツと赤くなるセシリア。きつと怒りが心顔なんだろう。よし、ここは援護射撃だ。

一夏の目の通信

〔加津佐援護頼む〕

はあ〜

〜わかった。〜

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そうだよ。」

僕の援護終了。

「そ、そうですね！何をもって馬鹿としているのかしら!？」

え、あれ？なんでセシリアが俺に怒るの？ていうか睨むな、怖い  
加津佐に聞いてみるか

小声で

「なんでセシリアは俺に怒るのそして睨むの？」

はあー夏は乙女心を知らないらしい

「しらん。自分で考えろ」

「大体あなたはー」

「はいはい、とりあはず三人並んでね。写真とるから」

「えっ」

意外そうなセシリアの声。

「注目の専用機持ちだからね。スリーショット貰うよ。あ。握手し  
てるといいかもね。」

「そうですね・・・。そう、ですわね」

「それじゃ僕は写るのやめるよ。」

加津佐逃げるきか？

「なんで？」

「握手をするなら2人でしょ普通」

「ああ。そうですね。」

よし。出しつ成功

「じゃ後で写真撮らせてね。」  
しまった。

何故かモジモジとし始めたセシリアは、ちらちらと一夏を見ている。  
なんだろうとか、この「チャンス到来、ただし安く見られないように  
気をつけなくては」的な雰囲気。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そらやもちろん。」

え・・・もしかして僕も？

「でしたら今すぐに着替えてー」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

「先輩は俺とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持って行く。強引な先輩だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？なんだよ？」

「べ、別に何でもありませんわ」

「こつちをじろじろ見てくるので何か用でもあったのかと思ったが違つたらしい。紛らわしいやつだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なんだよ、箒」

「何でもない」

「こつちをじろじろ以下同文。」

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・・・・・・2？」

「違うよ。一夏74・375だ。」

「なんだそりゃ。でも、よく加津佐出来たな」

「パシャとシャッターが切られる。・・・・・・・・つて、おい。」

「なんで全員入っているんだ？」

「恐るべき行動力をもって、一組全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの周りに集結していた。あ、箒までいる。こいつらは一体何がしたいんだろうか。」

「あなたたちえつ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラス思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「皆凄いなー動きが凄く早かった。感心する僕  
う、ぐ・・・・・・・・」

「織斑一夏クラス代表パーティー」は10時過ぎまで続いた。

僕と一夏と篤さんで部屋に戻っていた。

「じゃまた明日一夏」

「おう。またな」

一夏と別れて自分の部屋へ

疲れた〜女子のエネルギーは凄いな〜

<一夏&篤>

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

「どこがだよ。疲れただけで、楽しいものか。お前は逆の立場なら嬉しいのかよ」

「む……。ああ、そうだな。楽しいかもしれないな」

……

「あつそう。じゃ俺寝るわ」

「な、なに？まだ十時半ではないか」

「疲れたんだよ。そういう時は寝るに限る。」

そう言つて毛布に潜り込むと突然枕が飛んできた。

「ぶべつ。何しやがる!？」

<加津佐の部屋>

今日も一夏と篤さん賑やかだな〜

じいちゃん今日も楽しかった。明日も面白い事ないかな

そして眠りについた。

<>

「織斑くん、加津佐くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝一夏と席に着いた時クラスメイトに話しかけられた。転入から1

週間、女子との会話も少しは慣れて来た。

転校生？一夏と僕は同時に首を振る。

「転校生？こんな時期に？」

今はまだ四月だ。なんで入学じゃなくて、転入なんだろう。そー言えは加津佐も転入だったな

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふうん」

代表候補と言えは

転校生は一夏のセカンド幼馴染前篇（後書き）

文字の量が凄いので先にこちらを見てください。

次回 転校生は一夏のセカンド幼馴染後編



## 転校生は一夏のセカンド幼馴染後編

「あら、わたくしの存在を……」

セシリアの話しを無視して一夏達の方を向く

「なんで加津佐さん！無視……」

「このクラスに転入してくるわけではないだろう？騒ぐほどでもないまい」

良い所に箒さん来てくれた。

あれ、さっき自分の席へ窓側の最前列へ行つたはずの箒さんが、気がつけば側にいた。さすがに箒も女子、噂に興味はあるのだろうか。

「どんなやつだろうな」

代表候補生っていうからには強いんだろう。それにセシリアみたいなやつなんだろうか。気位高いやつだと正直疲れる。

まあ、他のクラスだから関係ないか。

「む……気になるのか一夏」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

加津佐に聞かれたことに素直に答えたら、なぜか箒の機嫌が悪くなつた。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手なら……」

「いい。加津佐に頼むから」

え、僕？しかもセシリアが僕を睨んでるよー。

「なっ！」

本格的なES学習が始まる前の、スタート時点での実力をはかるら

しい。

やる気を出させるために、一位のクラスには優勝賞品として学食デザート半年フリーパスが配られる。なるほど、女子が燃えるわけだ。「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そつだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せだよー」

「僕も幸せ」

お前もか！？

一夏の周りにひとりふたりと集まってきて、あっという間に女子で埋め尽くされていた。

一夏は今日も女運はサイコーのようです。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

一夏期待されてるな！

「その情報古いよ。」

ん？教室の入り口からふと声が聞こえた。なんかすげえ聞いたことのあるような声だが……。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは

「鈴……？お前、鈴か？」

僕も目線を入り口に向けた。

「そつよ。中国代表候補生、凰 鈴音。今日は宣戦布告をしに来たつてわけ」

小さなあの人

「何格好付けてんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

おおやつと普通に喋った。なんださっきの気取った喋り方は、あれって一夏知り合いなのかな？ 後で紹介してもらおう。

「おい」

「なによ！？」

バシンツ！ 聞き返した鈴に激烈な出席簿アタックが入った。鬼教官登場である。

「もうSHRの時間だ。教室にもどれ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・」

さすがごとドアどく鈴。その態度は100%千冬姉にビビってる。

こいつ、昔から千冬姉苦手だよな。なんか知らんが。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

なんで俺が逃げるんだよ。

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

二組に向かつてダツシュしていった。

その後「一夏今のは誰だ？」

「一夏さん！？ あの子とはどういう関係でー」

バシンバシンバシンバシン

来たー！ 織斑先生の出席簿アタック

「席に付け馬鹿ども」

<  
>

昼休み

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

一夏大変だな

「なんでだよ・・・」

食堂に向かった。

< 食堂 >

到着した。

そこには腕を組んで立っている少女がいた。

「待っていたわよ、一夏」

「まあ、とりあはずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に通  
行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかっているわよ」

本当に一夏って女運凄いな！

ちなみにその手にはお盆を持っていて、ラーメンがのびていた。

「のびるぞ」

「わ、わかっているわよ！大体、アンタを待ってたんでしょ！  
なんで早く来ないのよ！」

なんで早く来ないと行けないんだ！

とりあはず食券をおばちゃんに渡す。

一夏は鈴さんって人と話している。

僕は・・・「のほほさん隣空いてる？」

「う、うん空いてるよ。」

「座ってもいい？」

「いいよ」

僕が何故一夏の隣に座らないか。それは、一夏の近くに鈴さんって  
人が入るから

< 一夏&鈴 >

「質問ばかりしないでよ。アンタこそ、なにIS使ったのよ。二  
ユー！見た時びっくりしたじゃない。」

セシリアさんと篤さんが動き出した。

「一夏そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！ 一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたらしいの！？」

なんでそうなるんだ？

「ぶっ」

加津佐お前今笑ったな。覚えてる

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

「加津佐……」

ん……誰だ俺以外に加津佐っているのか？

あれ……確か男でISを動かせるってニュース一夏だけだったはずなのに男がもう1人入る。〔鈴〕

目の通信で

〔何のようだ？僕を巻き込むな〕

加津佐……

〔いいからこい〕

はあ僕はため息をつきながら一夏達の所に行く。

「一夏、誰なのこの人」

「ああ。コイツは……」

「僕は奇跡 加津佐です。加津佐でいい。」

「私、凰 鈴音。鈴で構わないわ」

これで一夏達の話も終わり。

夕方

<第三アリーナ>で訓練ちゆう。

「一夏無駄な動きが有りすぎ」

「くっ！」

「一夏さんもっと早く」

「一夏剣義でカバーしろ」

「それじゃあ、一夏全力でいくよ。」

僕はビットで一夏を迎撃に当たった。それに続いてセシリアさんもビットで迎撃に当たった。篤さんは接近で一夏をたたいた。

もの見事に一夏のシールドエネルギーはゼロ

「今日はここまでにしとく？」

「今日はここまでですわ」

「そうだな」

「ああ。サンキュウ加津佐」

「じゃ僕先に上がるな」

「おう。俺もうちょっと休んでからにする。」

僕は疲れたので更衣室に向かった。

そこにはそう鈴さんが立っていた。

「あれ・・・鈴さんここでなにしてるの？」

「べ、別に！」

ああ。一夏を待っていたんだね。

「一夏なら後ちよつとしたら来るよ。」

顔を赤くして鈴さんと言う

「う……ん。」

やっぱりか

とりあらず自分の部屋に戻った。

<加津佐の部屋>

あれ……何か荷物が届いてる？

鈴様あて――――

――――！！！！

まさか！？僕は表札を見直しに出たら

嘘だろ――――！！！！！！！！！！！！！！

そのころ

<更衣室>

「一夏、飲み物はスポーツドリンクで良いよね。」

「ああ。サンキュウ鈴」

「ねえ、一夏」

「何だ？」

「私がいなくてさびしかった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃあ、なくってさあ」

「ここにこ。ここにこしている鈴は、いつになく上機嫌で話を続ける。うーん、昔なにか訳のわからない映画のチケットを掴まされたときに似たような顔をしてたな。」

「はっ!?!? ということは何か、また俺に何か売りつける気だな? なんと恐ろしい。」

危うく術中にはまるところだったぜ。

「鈴」

「ん? なになに」

「何も買わないぞ」

あれ? 違うのか?

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていていいぞ」

「おお、そりゃありがたい」

「では、また後でな。一夏」

「また後で」をやけに強調された気がするが、たぶん気のせいだろう。う。」

「……一夏、どういうこと?」

「ん? いやいつもはシャワーは筈が先なんだが、今日は汗だくだから順番を変わってくれって頼んで」

「じゃ、じゃ、シャワー!?!? い、一夏アンタあの子とどういう関係なのよ!?!?」

「どづつて……前に言っただろ。幼なじみだよ」

「お、お、幼なじみとシャワーの順番と何の関係があるのよ!?!?」  
あ。そっか。言っただけだったか。

「俺、今筈と同じ部屋なんだよ。」



「・・・・・・・・・・は？」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋の用意ができなかったんだ。だから、今は普通にふたり部屋で」

あれ・・そいや加津佐ってなんでひとり部屋なんだ？

それだったら俺が加津佐の部屋に行けば良いのに。それが、加津佐が俺の部屋に来れば良い。なんで？

「そ、それって浸食を共にしているってこと！？」

「まあ、そうなるか。」

<加津佐>

「織斑先生」

「誰だ？」

「加津佐です。」

「はいれ」

「はい。」

「先生なんで僕と鈴さんが同じ部屋何ですか？」

「すまないが。1週間我慢してくれ」

「はい。」

先生何か企んでないか？

まあいいか

僕は自分の部屋にもどった。

< 一夏&篝の部屋 >

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふぎけるなっ！ なぜ私のようなことをしなくてはならない!？」

「やばい、このふたりは相性最悪だ。そこにガチャ

「一夏~~~~」

その声は加津佐。良い所に来てくれた。ボタン

「っておい!」

すこしドアが開き目の通信

「無理」

何だそれーーーそして加津佐は自分の部屋に戻った。

「鈴」

「うん。」

「それ、荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはポストンバッグひとつあればどこにでも行けるからね」

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふぎけるなっ！ 出て行け！ ここは私の部屋だ!」

「「一夏の部屋」でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」  
そう言って同意を求めようと俺を見る。ていつか、睨む。  
「俺に振るなよ……………」

<加津佐の部屋>

嫌な空気だったな。危ない入ったら確実に巻き込まれていた。  
でも、部屋が鈴さんと同じって、きつとこれから大変だろうな  
なるようになるか

そして一夏の部屋から凄いい音が聞えた。

99%一夏が殴られた音

<一夏の部屋>

「最っつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風  
上にも置けないヤツ！犬にかまれて死ぬ！」

そこから鈴の行動は早かった。ボタン

「…………まずい怒らせちゃった」

完全に俺が悪い。

「一夏」

「お、おうなんだ筈」

「馬に蹴られて死ぬ」

何故か筈にも怒られた。

<加津佐の部屋>

ガチャ ボタン

うわぁ……………」

「なんで入るの？」

鈴さんは僕に言う

「ここ、僕の部屋でもある。」

驚いた顔鈴さんは表札を見に外に出た。

あ・・戻ってきた。

「そ、そう。これからよろしく。」

「う・・ん。鈴さんはベットどっち使うの？」

「遅の方がいいわ」

「分かった。」

「それじゃあ僕寝るね。」

「うん。」

まさか加津佐と同じ部屋になるなんて、出来れば一夏とがよかったな。

翌日、僕は何時も道理に朝ランニングをしに外に出た。

そこには一枚の紙が大きく張り出された紙があった

表題は「クラス対抗戦」

転校生は一夏のセカンド幼馴染後編（後書き）

次回 決戦！ クラス対抗戦

## 決戦！クラス対抗戦（前書き）

感想をお願いします。

## 決戦！クラス対抗戦

五月

あれから数週間たった今も、鈴の機嫌は直らない。

<食堂>

「おは……よう一夏」

「加津佐向こうで食べましょ」

加津佐の奴大丈夫か？

俺は鈴に連れて行かれ違うテーブルで食べた。

そう何故俺の言葉使いが変わったかそれは数週間前のことである。

「加津佐って、なんで皆を呼ぶ時はさんづけなのに一夏の時だけ一夏なの？」

そう言っただけなのは、僕のルームメイトの鈴さん

「それは、男同士だから」

「駄目じゃ無い。これから僕ではなく。俺だ。」

え……僕無理

「はい言っただけ！」

鈴さんが腕を叩いて、仕方なく言った。

「俺……もう無理です。鈴さん」

そう何故か分からないが鈴さんの頭に怒りマーク付いていた。これは怖い

「鈴でしょ……」

「はい。」

これがほぼ毎日続いて言葉使いが変わった。

鈴がご飯を食べ終わり。学園に向かった。

1人取り残された俺は、一夏の所に行った。

「一夏、助けて」

「すまん。俺今嫌われてるから」

誰か俺持たない。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用も設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

「そつなのか一夏」

「ああ。」

「じゃあ一夏、俺が全力で訓練してやる。」

加津佐と戦うと必ず負ける。だが

「おう。掛ってこい！」

放課後、かすかに空が橙色に染まるのを眺めながら、今日も特訓のため第三アリーナに向かう。

メンツはいつもの通り俺、セシリア、箒、加津佐。クラスの女子はぼちぼちテンションも落ち着いたようで、最近は質問攻撃は少なくなってきた。



「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそー」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。」

「第一、一夏のISには射撃武器がないら、俺とセシリアが勝って当然」

まあ、俺は千冬さんにみっちり五日間しごかれたからな  
そのおかげで俺は強くなれた。千冬さんには感謝の気持ちでいっばいだ。

「それを言うなら……」

「一夏あつちで模擬戦しよう。」

「ああ。そつだな」

「私の話を無視するな!!!」  
怖い

「待っていたわよ。一夏&加津佐」  
なんで俺も？ 一夏、だけにしてほしい。

「貴様、どうやってここにー」

「ここは関係しゃ以外立ち入り禁止ですわよ。」

「あたしは関係者よ。一夏と加津佐の関連の関係者。だから問題なしね」

そりゃまあそうだが、なんか違うんじゃないか？なあ、箒

だからなんで俺も？誰か教えて

「ほほう、どっという関係かじっくり聞かせてもらおう。」

「そうですね。」

「夏って本当にもてるな〜〜〜凄い

「で、一夏、反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らあたしを怒らせて申し訳なかったな〜とか、仲直りしたいな〜とか、あるでしょうか！」

「ここは一夏に任せて、今日は大人しく帰ろう。一夏頑張って

考えながら帰ろうとしたとき「加津佐模擬戦」

おい。誰だ俺を呼んだのは……………一夏貴様

「お前だけずるいぞ帰らさねえ。」

目の通信始まり

「大人しく帰らせろ」

「駄目だ。」

「何故、一夏に関わると死にかける。じゃあ」

「おい。また」

「一夏謝りなさい。」

「だから、なんでだよ！約束覚えていただろうが！」  
とうとう一夏も切れた。

「じゃあごうしましょう！ 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方に何でも一つ言う事を聞かせられるってことでいいわね!？」  
大胆だな鈴。一夏はどう出る？

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらおうからな！」  
なんか鈴、言いにくそうだな。きっと大事な事なんだろう。一夏はヤッパリ鈍感だ

「せ、説明は、その……」

「なんだ、やめるならためてもいいぞ？」

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！」馬鹿はア  
ンタよ！

むかつ！。

「うるさい、貧乳」

あー一夏、言うてはならない言葉を言った。

「あ。やばい。」

ドガアアンツー！

いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋全体がかすかに揺れた。見る

と鈴の右腕はその指先から片までがIS装甲化していた。

「い、言ったわね。言っではならないことを、言ったわね！」

これは、まずい、本気で怒っている。

「い、いや、今は俺が悪かった。すまん」

「今の「は」！？今の「も」よ！いつだってあんたが悪いのよ！」  
鈴そのままどこかに行った。

「あーあー夏完全に手加減なしでくるぞ。」

「手加減なんかはじめっからいらぬ。」

「死ぬぞ」

「え……………」

話した後今日も一夏は俺にボコボコにされた。

「ハアハア加津佐お前強すぎ」

「一夏が下手なだけ」

でも加津佐の戦いかたどっかで見た事あるような気が…………

「じゃ一夏俺帰るな」

「おう。」

「一夏、私たちも部屋に戻るぞ」

「おう。」

「それでは一夏さん」

皆自分の部屋に戻っていった。

< 加津佐の部屋 >

「ただいま〜」

ドアを開けた瞬間枕が飛んできた。  
うわぁ危な。ありゃー鈴ヤツパリ

「鈴」

「加津佐・・・」

泣いてる。貧乳って言われたからかな

俺は鈴の側に行き

「泣いちゃいけない。鈴には似合わない。」

すると

「泣いていたんじゃない。目にごみが入ったのよ。」

元気になった。よかった。今日もISの調整しよ。

俺は毎晩自分のISの調整をしていた。東さんから貰った資料をもとに調整をしている。

現在の時刻深夜1時を回ったところ

「完成かな」

「ん〜〜加津佐？」

「鈴起こした？」

「何してるの？」

寝ぼけてる？

「ISの調整」

「そ………う。おや………すみ」

「うん。」

zzz

眠った。

でもこのISの能力の所の????って何だろう？

まあ。いいか

<>

試合当日

噂の新生同士の戦いとあって、アリーナ全客満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。

ふと、そんなことを気にしている場合じゃない。〜

俺の視線の先では、鈴とそのIS「甲龍」が試合開始の時を静かに待っている。

今は一夏のピットに入る。最終チェック中。

「それでは両者、指定の位置まで移動してください。」

アナウンスが流れると一夏と鈴は、空中に向かう合図。その距離は5メートル。俺と鈴は開放回線で言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを上げてあげるわよ。」

鈴、凄く自信ありそうだな〜一夏ガンバ

「雀の涙くらいだろう。そんなのいらねえよ。全力で来い」

これは、強がりでも何でも無い。セシリア戦でもそうだったが、俺は真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌いだ。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば本体にダメージを与えられる。」

「殺さない程度にいたぶることは可能である」

という現実は、変わりようがない。そして代表候補生クラスはそれがおそろく可能なんだろう。

「それでは両者、試合を開始してください」

ピーーと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。

ガギインッ！！

瞬時に展開した「雪片式型が物理的な衝撃ではじき返される。加津佐から教えてもらった。アクセルを使い一気に鈴に接近する。

「ふうん、衝撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

<一夏のピット>

「織斑くん凄く上達してますね。」

「そうだな、山田先生。」

俺は一夏の試合を見ているとウインッ！！

腕についていたエプシロンが揺れる。一体何が！？

もしかして……俺は一夏ピットを抜け出し、外にでてIS

を展開させた。

これは俺が新しく昨日入れたセンサー。でも、まさか!? ISを展開し

俺は上昇した。「その生徒何をしている?」

無視して空高く飛んだ。

そこには「何だ・・・あれ?」俺の目の前にはISが浮いていた。

「誰だ!?!」

向こうは俺の呼びかけを無視して攻撃をしてきた。

これはビーム? くそっ情報が少なすぎる。

だが俺は接近ブレード「極光」を出して接近するがビームの連射。

しかもそのビームの威力が半波じゃ無い。

後すこしで第三アリーナに・・・くっ!

次のビーム方向は、第三アリーナに向けて発射された。だが「極光

」で受け止めようとしたが威力が強すぎる。

そのままビームとともに第三アリーナに落ちた。

<第三アリーナ>

ズドオオオオッ!!!

「!?!」

鈴に刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナの全体に走った。鈴の衝撃砲 ではない。

「な、なんだ?何が起こって・・・」

状況が分からず混乱する俺に、鈴からプライベート・チャンネルが飛んできた。

「一夏、試合は中止よ!直ぐにピットに戻って!」

何をいきなり言いだすのか。そう思った瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。



「なっ」  
アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

つまり、ピンチというやつだ。

「お前はどつするんだよ!?!?!?!?!?!」

<加津佐>

くそっ!! 第三アリーナは入られた。まあ俺も入れたからいいかビームが一夏をロックしている。

再び俺は「極光」をだし接近「うりゃあああ」今度はビームを斬れた。

「あれは加津佐!!」

煙の中から出て来たのは

「加津佐お前何してんだよ!?!」

「すまん。守りきれなかった。」

<一夏のピット>

「織斑先生煙のなかから加津佐くんが出てきました。」

「何!?!」

モニターをみると確かに加津佐がいた。何故だ加津佐は確か外に出たはず……まさか先に敵に気づき行動した。

<第三アリーナ>

「一夏達はさがれ」

「なんで？」

「お前らシールドエネルギーないだろ。」

確かにでも「駄目だ。ここにいる皆を非難させるまでは」

煙から不明ISが出て来た。

姿からして異形だった。深い黒色をしたそのISは手非常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首という物がない。なにより特異なのが、その「全身装甲」だった。

「お前は何者だよ」

「……………」

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから逃げてください。！！……」

「一夏達は行け。お前らの出力じゃあ死ぬぞ」

「お前……………」

ビームが飛んできた。

俺は「極光」で受け止める。「いい加減にしろ……………！！ビームはセシリアだけで十分だ……………！！！」

加津佐が飛び出した。

加津佐の奴「先生たちが来るまで俺達で食い止めます」

「織斑くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしもの事があったら」

言葉はそこまでしか聞き取れなかった。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

煙から加津佐が吹っ飛んできた。壁にぶつかり「ガハア！」

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

<  
>

「もしもし！？　織斑くん聞いています！？　鳳さんも！聞いてます！？」

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！　何をのんきなことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。」

「……………あの、先生。それ塩ですけど……………」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンをおさめた。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく「塩」って書いてありますけど……」

「……」

「あつ！ やつぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを」

「……」

嫌な予感。

「あ、あのですねっ」

「山田先生コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

ずずいっと押しつけられる「コーヒー」の激塩。真耶は涙目でそれを受け取った。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」  
「悪魔がいた。」

「先生！わたくしにIS使用許可を！直ぐに出撃しますわ！」

「そうしたいところだが、                  これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定・・・？しかも、扉がすべて口ツクされて                  あのISの仕業ですの！？」

「そうようだ。」

<一夏&鈴>

「くっ・・・！！」

「一撃必殺の間合い。けれど、俺の斬撃はするりとかわされてしまう。これで合計四度目のチャンス逃した事になる。」

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃をしている。

「参ったな」

シールドエネルギーが残り残量が六〇を切っていた。バリアー無効化攻撃をだせるのは、よくてあと一回だろう。

「一夏っ！」

「お、おっっ！」

<加津佐夢の中>

「ここ……は俺死んだのか？」

「貴方は死んではいない。貴方は約束を守ってここにきてくれた。」

「じゃあ君が俺を呼んだの？」

「そう。貴方は何のために力を使いますか？」

何のためにか……決まっている。

「皆を守りたい。」

「貴方に力を授けます。」

「世界を守って」

光に包まれ起きた。そのとき俺のISのエプシロンが光始めた。

こ、これは、第二移行……アルファ

システムで新しく出てる。ここは?????だったところTORAI  
ARUシステム？

<ピット>

「織斑先生」

「何だ？」

「加津佐くんのISの形が変わっています。」

「何!？」

<加津佐>

目の前で一夏が箒を庇っていた。

「あ……このヤロオー……TORAIARU起動!!!」  
加津佐が言葉を言うと加津佐のISエプシロンがさらに光始めた。

敵が加津佐にビームを撃ってきた。だがそこには加津佐の姿はなかった。

「いい加減に 落ちろ……!!!」

早い!!! 目で追い切れない。

加津佐の接近武器の「極光」が不明ISを切り裂く

「うわあああああ!!!」

ドンドン斬られていく。「ビット展開、極光BMモード!」  
されに接近武器の「極光」にビットが合体している。

加津佐がそれを敵に向けて「消えろ……!!!」

構えて出て来たのは、剣?ビーム?

ド……!!!その後、ドカー……!!!

不明IS撃墜

「一夏大丈夫か?」

「ああ。よかった……」

バタ。

「「加津佐……!!!」」

加津佐は気絶した。

「う……?」

全身に痛み呼び起され、俺は目を覚ました。

隣には一夏ベットにいた。一夏も怪我をしづらい。

「気がついたかふたりとも」

シャツとカーテンが引かれる。確認する前に行動。ああ、絶対に千冬姉じゃん

きつと織斑先生だな、僕は人の気配が分かる。これも千冬さんに教えてもらった。

「体に致命傷、数日は地獄だろうが、まあ我慢しろ」

「「はぁ・・・」」

それほど俺は「加津佐」は怪我をしていないので大丈夫

「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、ISSの絶対防御をカットしたな？ よく死ななかつたものだ」

「一夏、そんな事していたのか？俺がもつと早く起きて入れば

「加津佐、お前に聞きたい事がある。」

「はい。」

「お前は、先に奴に築いていたのか？」

「はい。」

「どうやって？」

「センサーです。」

「だが通常のセンサーでは、とらえられない。」

「自分のセンサーは、違います。」

「そうかそれだけだ。」



「はい。」

千冬姉と加津佐何の話をしてんだ？

そこにコンコン

そこには鈴、箒、セシリアが立っていた。

「あ……俺もう部屋に戻るな一夏」

逃げる気が貴様

「一夏大丈夫か？」

「一夏、大丈夫？むちゃしすぎなのよ」

「一夏さん大丈夫ですか？」

加津佐分かっていたな

「大丈夫だ。」

少し眠ろうとすると

「ぱっ……！！？ フンこれなら品のない方は困りますわ」

「気取ってるばっかのやつよりマシよ」

「なんですってー」

「五月蠅いぞ。一夏が眠れないだろ」

ありがとう。箒

「ああ、まったく……早く部屋に帰って休みたい……。  
ていうか風呂に入りたい……」

そのまま眠りに落ちた。

<  
>

「あのISの解析結果ができました。」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは 無人機です」

「どのような方法で動いていたかは不明です。加津佐くんの最後の攻撃でほとんどが消えていました。」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした。」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこかで確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ばう。今はまだ な」

「後加津佐くんのISの名前が変わっていました。」

「何？」

モニター画面を見ると「アルファ」

< 加津佐と鈴の部屋 >

疲れた〜でもあの少女誰だったんだろう？

「加津佐起きてる？」

ドアを開け帰って来たのは鈴だ。

「おかえり、鈴」

「それは、こっちの台詞よ」

「心配させないでよね」

「じゅめん。」

「ならいいわ、寝なさいよ。怪我してるんでしょ」

大丈夫何もしなくても寝れる。

「おやすみ鈴」

ZZZZ

加津佐……………

<  
>

「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」

このぼやけた声は山田先生だ。がちやりとドアを開けて本人が入ってくる。

ほら見る。やつぱりな。

「どうかしたんですか、先生」

「あ、はい、お引越しです」

「はい？」

引越し？山田先生が？この部屋ふたり部屋なのに？

「先生主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ。すみせんっ  
いじめるな。」

「えっとお引っ越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整が付いたので、今日から同居しなくてすみますよ」

同居しなくて住みます　ほう、山田先生もなかなかやる。

「一夏っ」

「お、おうっ」

またバレた。なんでだろうね。なんでだろうな。

「えっと、それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃい  
ましよう」

「ま、ま、待ってください。それは今すぐでないといけませんか？  
箒の口から意外な言葉がでる。」

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活を  
するというのは問題がありますし、篠ノ之さんもくつろげないで  
しょう？」

「い、いや、私は」

まごついた言葉を返しながら、箒は俺の方を見る。　ああ、そう  
か。そういうことが。

「そんなに気を遣うなって。俺のことなら心配するなよ。箒がいな  
くてもちやんと起きれるし歯も磨くぞ」

「　　！！」

カチン！・・・あれ、おかしいな。変な音が聞えたぞ。まるで  
誰かがキレたかのような音だったが・・・

「先生、今すぐ部屋を移動します！」

「は、はい！じゃ始めましょうっ」

いきなり箒にせかされて、また山田先生がびっくと身を震わせる。

「俺も手伝おうか？？」

「いらん！」

わあ、すっごく怒ってる。ここはおとなしく黙っておこう。

「先生」

「何です織斑くん？」

「箒が移ったという事は、加津佐がここにくるんですか？」

「いえ・・・」

その言葉だけのこして箒を部屋に案内しに行った。

え・・・

「まあ、寝るか考えても仕方ないし」

シャワーを浴び、歯を磨き

「寝よう」

コンコン。

ノックが響く。うーん、もう布団に入ってしまったんだが・・・。  
ドンドン

うおっ、拳の音だ。俺は布団から飛び出てドアに向かった。

「はい、どちらさま」

「・・・」

むすつとして立っていたのは、つい先別室に移動した箒だった。

「なんだ？忘れものか？」

「……………」

突然

「来月の学年個別トーナメントだが

六月末に行うらしいそれは、クラス対抗戦とは違い完全に自主参加の個人戦らしい。」

「わ、私が優勝したら」

頬を赤くそめ、箒は言葉を続ける。

「っ、付き合ってもらっ」

ぴしっ指を差された。

「……………はい？」

誰に向けているのかは、知らないが。

**決戦！クラス対抗戦（後書き）**

一巻終了です。次回から二巻です。

次回はボーイ・ミーツ・ボーイ

## ボーイ・ミーツ・ボーイ

六月頭、日曜日

俺はIS学園の外　　というか、五反田の家にいた。

「で？」

「で？って何がだよ？」

うぬ、格ゲー対戦中にいきなり会話フリだな。って、うわ。いきなり奥義を使いやがった！ええい、こしゃくな！

「だから女の園の話だよ。いい思いしてんだろっ？」

してねえっつの。何回説明するば納得するんだ、こいつは。

<加津佐&鈴の部屋>

「ん~~~~あ~~~~」

隣を見ると鈴がいた。なんでいるの？

「やっと起きたの加津佐」

「うん。おはよう」

おかしいな〜今日は休みだから鈴は一夏を追いかけてどっかに行く  
と思っていたのに

まあいいや。歯を磨き、顔を洗い、朝飯あるわけないか。  
俺は自分のパソコンの電源を付けISの調整をおこなう。



「加津佐って、いつも何してるの？ ISの調整ばかりして  
言えない。どうせ信じない。俺は口止めを喰らっているから  
俺がこの世界の人間じゃ無いって事は誰にも言ってはいいい。

「こんど個人で出れる学年個別トーナメントに出ようかなって」

「そう。」

「うん。鈴は？」

「私も出るわよ。」

俺に指をさしながら言った。  
流石ですね。

「それじゃあ俺ISの調整するから」

「……………」

ん？

「今日はなにもやる事がないから手伝ってあげてもいいよ。」

鈴ってこんなキャラだったな。選択しを間違えれば…………死だ。

「鈴は自分のISの調整しなよ」

「……………いつ」

いつ？

「いつ、一緒にしようって言ってあげてるの！」

顔を赤くしながら鈴は俺に言う。鈴なんかイメージが変わった気がする。

鈴は一夏を思い続けている。手助けもしてあげるか

「うん。わかった。アルファ「IS」のシールドエネルギーを見て

て

「うん。」

「……なにこれ？」

加津佐のIS「アルファ」のシールドエネルギーが5500。ありえない!?

加津佐貴方は一体何者なの？

<一夏&五反田の家>

「お兄！ さつきからお昼出来たって言ってるじゃん！ さつさと食べに」

どかんとドアを蹴り開けて入ってきたのは弾の妹、五反田蘭。歳は一個下で今は中三。

有名私立の女子校に通っている優等生。うん、兄とは違うのだよ兄とは。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いつ、一夏……さん!？」

やはり女子というのは自分の家だともラフな格好なのか。

しかし最近暑くなったせいか、やたらと胸元が開いた服を着ている女子の多いこと多いこと。しかも俺以外に男子はいないせいか……

・いやいやまでまで加津佐が転校してきたか

取りあはずだ。ほとんどの女子がノーブラで過ごしている。俺も加津佐も健全な高校一男子。はっきりと言って目のやり場に困るし、ふと視線に気づいた女子が胸を隠すと気まずい。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？ IS学園に通っていると聞きましたけど……」

「ああ、うん。今日はちよと外出。家の様子見に来たついでに寄っ

てみた」

「そ、そうですね」

「しかし蘭て昔からそうだけど、なんで俺相手だと妙にたどたどしいというか、敬語なんだろうな。不思議だ。」

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。……」  
ギンツ！蘭の視線一閃。

「おお、弾がダメージを食らったマ オのように小さく成っていく。相変わらずわかりやすい戦力図で何よりだ。」

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いや言ってなかったか？ そうか、そおりや悪かった。ハハハ……」

「……」

ギロリ、死に体にナイフを突き立てるが如くの視線を再度弾に送りつけ、蘭はそそくさと部屋を出て行く。

「あ、あの、よかつたら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただきよ。ありがとう」

「い、いえ……」  
ぱたん。ドアが閉じた。

< 加津佐 & 鈴の部屋 >

「加津佐」

「なに鈴」

「そろそろお昼でしょ。」  
時計を見た。ほんとだもう昼だ。今までISの調整をしていた。

「お昼どうしよう？」  
俺が悩んでいると

「これ」

突き出されたものは、タツパ？  
何だろうと中身をみると酢豚だ。

「食べていいの？」

「いいから食べなさいよ！」  
上から目線で言ってきた。

「いただきます。」

見た目よし、問題は味だな……パク……美味しい

「美味しい」

「ほんと！よかった〜」

鈴凄く喜んでいるな、じゃあ俺も料理作るか

「鈴」

「なに加津佐？」

「少し待ってて」

「うん。」

なんだろう？

加津佐は部屋を出て行った。

<一夏&弾の店>

「なに？なんか問題があるの？あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」

「聞いたが一夏。今の優しいさに溢れた言葉。泣けてきちまっぜ」接客は蘭だった。涙をぬぐう弾にハンカチの持ち合わせがない俺はきつと甲斐性無しなんだろう。

「別に三人で食べばいいだろ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろっぜ」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい……」

こうしてテーブルに俺、弾、蘭という並びで座る。……ん？あれ？

「蘭さあ」

「は、はひっ？」

「着替えたの？どっか出かける予定？」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

さっきまでのラフな姿の微塵も残っていない。髪もしゅるりとおろしたロングストレートがきれいになキューティクルを放っている。

服装は六月と言ったこともあつてか半袖のワンピース。

「ああ！」

ひらめいた、俺。電球が頭の上で回ったぜ。

「デート？」

ダンッ！

「違いますっ！」

うわぁ、テーブルを叩いて完全に否定

「い、ごめん」

「あ、いえ……。と、とにかく、違います」

「違うつつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだが。何せお前そんなに気合いの入れたおしゃれするのは数カ月一回

「バシッ！」

瞬撃のアイアンクロー。それも口封じというやつだろか。

「・・・・・・・・！！」

「ハコクコクコク」

< 加津佐 & 鈴部屋 >

加津佐が出て行って10分けいか、・・・遅い

コンコン

誰か来た!

「は〜い誰」

「開けて鈴」

加津佐?

ドアを開けそこに入たのは加津佐であった。何かお皿を持ってる。

「ごめん作るのに時間掛った。」

作る?なにを

加津佐は私にお皿を渡した。

「中華まん?」

「そう。食べてみて」

「いただきます」

モグモグ・美味しい。なにこれ!凄く美味しい

「美味しいじゃない」

「ちよつと中華に興味あつて勉強してたら中華まん作れた。」

加津佐、もしかして料理上手?

「ねえ、加津佐って料理出来るの?」

「うん。まあね」

「ふ〜ん、ま、いいや」

何だそれ

<一夏&弾&蘭>

「……………。決めました」

はい、何でしょう。

「私、来年IS学園を受験します」  
「がたたっ！」

「一夏直ぐに彼女作れ。誰でもいいから彼女を作れ。な、な」

なんでだよ

「お兄」

あれ蘭の目線が……………弾が震えてる。寒いのか？  
そして俺も気になって蘭の方を見る。

一瞬、一瞬であったが、確かにその瞳の奥に修羅を見た。

「余計ナコトスルナ」

<加津佐>

「ISの訓練でもするかな」

俺は立ち部屋を出て第三アリーナへ

歩いていると

「織斑先生？」

「誰だ……………なんだ加津佐か、なんのようだ？」



「いえ、第三アリーナで訓練しようかなって」

今加津佐に言うべきか

「加津佐お前に任務だ。」

任務？

「なんですそれ？」

「隕石が日本上空にきている。それを明日の朝破壊してほしい。」  
隕石を破壊それならできるな

「了解」

千冬さんと別れた時

「後」

「はい」

「訓練もほどほどに、な」

「はい。」

それを言っただけ俺の前からいなくなった。

## ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

すいません。だいぶ省略してしまいました。  
明日には更新します。次回を「

ルームメイトはフロンティアの子(前書き)

遅れてすみません



「嘘だろ……」

宇宙から降ってきた隕石の中からISが現れた。

「でも、あれは」

そうISでもない。いえば生命体と言うやつだな

そんな事を考えていると向こうからビームが飛んできた。

シュ　　ンッ！　　なんだこの音

ビームを斬り落とした。しかもビームまでISなのか……？

だが目標は破壊する。加速をして、接近

「これで！」

かわされた。そんなTORAIRUを使っているアルファの攻撃をかわした！？

なんだろう。攻撃が目当てじゃ無い。殺気が感じられない  
もしかして……これが地球が危ないと関係があるのか？　試し  
てみるか

俺は接近ブレード「極光」をしまった。

「お前はなにしに地球に来た。」

この言葉を言うと生命体が俺のIS「アルファ」に取りついてきた。  
なんだ……「うわぁ」頭が痛い。目の前が真っ白になる。

「……わ、どこだ？」

あれは生命体……少女の姿になった。

「君は!？」

そう俺は知っている。俺に力をくれた人物だから

「何故君がここに」

「時間がもうないの、地球に悪い者が来ます。」  
悪い者？

「なんだそれは」

「いずれ分かります。私達は、整備が目的ではありません。地球の  
人との対話がしたいだけです。」

そうか、だから

「じゃあ、その悪い者ってなんなんだ？」

「私の星を破壊した者です」  
星を破壊？

「だから私達は、平和に暮せる土地が欲しいのです。だから話し合  
いをしたい」

そうか、話したくても言葉が通じない。だから相手に取り付いて話  
し合いを

「じゃあ、この地球で一番偉い人の所に行けばいいじゃないか、何  
故にかいない」

「生き残りは、私だけです」  
聞いてはならない事を聞いたらしい。

「ごめん。俺うとくて」

「私は貴方のことは小さい頃から知っている。」  
「なんで？」

「お願いこの地球を守って」

「約束だから俺は守るよ。全て」

「ありがとう。後貴方に力を」

俺の目に手を当て何かをして消えた。

「まって……」

あれ……ここは、って落ちてる

!!!!!!

織斑先生に話すか？ ダメだ信じない。俺一人でやるしかない

確か今日は第二グラウンドで二組と合同でISの模擬戦だったよなこ  
のまま降りて第二グラウンドにここ。ただいま凄い速度で落下中

そのころ一夏達は

<IS学園>

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬姉が山田先生にバトンタッチする。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「え……………」

「「「ええええっ！？」「」」

いきなりの転 。でも、加津佐もそうだったな……………そいや加津佐は！？？ まさかの寝坊

へていうか、なんでうちのクラス……………？ 普通分散させるもんじゃないのか？」

そんな至極まっとうなことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

そりゃそうだ。

だって、そのうちのひとりが 男子だったんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不



慣れないことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」「転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

「お、男……?」

誰がそうつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち振る舞いと中世的にそった顔立ち。

「きゃ……」

「はい?」

「きゃああああ」

ソニックウェーブというやつだろうか。

「男子! 三人目の男子!」

三人目どういうこと、確か日本にいる男でISを使えるのは織斑一夏だけのはず……

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれて良かった~~~~」

元気だね、うちのクラスの女子は一同は。ちなみに加津佐はまだ来ていない。死んだなアイツ

隣のクラス及び他の学年からまだ誰も覗きに来ないのはHR中だからだろう。教員の皆さん、お仕事お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

めんどくさそうに千冬姉がぼやく。仕事がというより、こつこつ十代女子の反応が鬱陶しいんだろう。

「みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

「.....」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生　ラウラに、ク  
ラス一同がぼかんとする。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。

「千冬姉、俺にどこで何をしているか教えてくれてもいいよなあ」  
「なんというか、落ち着かないじゃないか。いや別に寂しいとかではなくて。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイト達の沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な言葉だった。

「こらこら、先生をいじめるんじゃない。泣きそうな顔をしているじゃないか。まったく。」

「！ 貴様が」

「うん？ なんだ？ つかつかとこっちにやってくるぞ。」

「バシンッ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「う？」

いきなり殴られた。それも無駄のない平手打ち。　　は？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやがる！」

「ふん・・・・・・・・」

来たとき同様すたすと俺の前から立ち去っていくラウラ。空いている席に座ると腕を組んで目を閉じた。

うわあ、無視された。無視されたぜ？　何コイツ？　コミュニケシオン文化のない星か来た異星人とかじゃないのか？

それともドイツじゃ初対面の相手を友情の意味で殴ったりするのか？　絶対住みたくねえな。

「あー・・・・・・・・ゴホンゴホン！　ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でISの模擬戦戦闘を行う。解散！」

結局加津佐の奴来てない。加津佐、死んだな。千冬姉のHRをサボるなんて凄い度胸あるな

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」  
おっとそうだった。やっぱりそうなるよな。

「君が織斑君？ 初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから説明すると同時に行動に移す。俺はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。」

「とりあいず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだ？ さっきまでとは違って妙に落ち着かなさそうだな。

「トイレか？」

「トイレ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

とりあいず階段を下って一階へ速度を落とすわけにはいかないのだ。なぜなら

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

そう、HRが終わったのだ。早速各学年各クラスから情報先取のために先兵が駆けだしてきている。

波にのまれたら最後、質問攻めのおかげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っているのだ。絶対にそうなるわけにはいかん。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

こついつとき加津佐がいてくれたら、加津佐を置いて逃げれるのに

<加津佐>

現在落下中

プンプン

「ん、誰だです？」

「私だ」

その声は織斑先生

「なんです？」

「目標は破壊できたか？」

「はい」

「そうか、わかった。すまなかつたな」

「いえ、」

「今日は授業に出なくてもいいぞ」

「でます」

「そうか、それでは第二グラウンドで」

「了解」

ふう〜それにしても何んか速度が上がってる気がする。  
気のせいか ただいまの落下速度50キロです。

<一夏&シャルル>

よし、到着！

「うわ！ 時間ヤバイな！ すぐに着替えちまおうぜ」  
時計を見るとかなりギリギリだった。というかあのISスーツ、す  
っげえ着づらいんだよ。

とにかく俺は急いでいあるので、言いながら制服のボタンを一気に外  
す。それをベンチに投げて一呼吸でTシャツも脱ぎ捨てた。

「わあっ!?!」

「?」

なんだなんだ？

「荷物でも忘れたのか？ って、なんで着替えないんだ？ 早く着  
替えないと遅れるぞ。  
シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間に  
うるさい人で」

「う、うんっ？ き、着替えるよ？ でも、その、あっち向いてて・・・ね？」

「??? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが・・・って、シャルルはジロジロ見ているな」

「み、見てない！ 別に見てないよ」

両手を突き出し、慌てて顔を横に向けるシャルル。なんでこいつこんな反応するんだ？

不思議な奴だあ。

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならないというか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

しかし俺は背中に紅蓮の炎を背負った鬼教師・織斑千冬先生に必要なのはシャレを聞いてくれる心の持ち主だと思うか？

つまらないジヨークでも「ハハハ、こやつめ！」くらいで許し合う仲にならないもんかね。・・・ならんか。つつかそんな千冬姉は変だろっ。

「・・・」

なんだろうっ、視線を感じるのだが。

「シャルル？」

「な、何かな!？」

気になって視線を向けると、シャルルはこっちにちょっと向けてい



た顔を慌てて壁の方にやって、ISスーツのジッパーをあげた。

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に……って一夏まだ着てないの？」

あ、そうだった！ 急げ

<加津佐>

皆さま今速度は80キロです。凄く早い

どうやって止めよう？ でも、激突したら織斑先生に怒られる。

本当の急降下と急停止だな。お……見えた。えーと……真ん中落ちたらシヤレにならない

あれ……山田先生？ 今高額モニターで山田先生がISに乗っているのだ。

でも、あ、落ちた。

<一夏>

キィィン……。

ん？ 何この音？ 空気を裂く音にすごくよく似合ってるんだが、まさか

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

え？ なに、俺？ って、うわ！？

ドカーン！

声の方を向くが時すでに遅し。俺は数メートル吹っ飛ばされた後ゴロゴロと地面にを転がった。

「ふう………。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事」  
「むにゅ。」

「う？」

なんだろう、この手のひらに感じる感触は。地面ってこんなに柔らかかったっけ？  
ここだけプリンとか？

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

プリンが喋った！  
って、待てい。そんな訳あるか。

おそろおそろ俺は自分の手の先に視線をやる。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！ 場所だけじゃなくてですね！ 私と織斑君は仮にも教師と生徒ですね！ ……ああでも、このまま行けば織斑先生が姉さんってことで、それはとても魅力的な」

山田先生。山田先生だった。山田先生プリンだった。プリンはプリンでもムチプリンである。ってオッサンか俺は……。

< 加津佐 >

一夏、すげー 山田先生を押し倒してる。うお、一夏の顔の近くを  
ビームが飛んだ。

セシリアである。一夏、死亡フラグ

こんどは鈴の武器がーあ、山田先生が撃って止めた。凄い山  
田先生。ピピピ

「え、誰かにロックされとる。ビームか！」

後ろを向き接近ブレード「極光」をだす。シュイン！

変な音と共にビームが発射される。「それくらい！」ビームを斬っ  
た。

「誰だ！」

「.....」

生体反応なし無人機・・・違うあれは！？ 生命体、名前はフリア、  
俺が付けた名前だ。

もう来たのか？ へあれは「誰だ？」俺の中から声が聞える。知  
ってる声だ。

へ加津佐、あれを倒して「その声は、さっきの少女

「どうして君が俺の中に入るんだ？」　「私は貴方と一つになったの」  
「…………オ　ファック、じゃない。」

「どうでもいい。あれは、君が言っていた。敵？」　「あの人の部下です。もしかして私を追ってきたの？」

「部下、でも倒していいの？」　「はい」

「わかった。それじゃあ、やりますか」

接近した。ガキイン！　ガキイン！　ガキイン！  
斬りあうが敵に攻撃が当たらない。

「強いぞ、コイツ」

TORAIARUは使えない。隕石を壊すので使ってしまった。チヤージまで、後5分

どうする？

ビットを展開

「当たれ　…………！」

ビットが加速して動く。ピュン！　ピュン！  
かわされた。凄く強い。多分俺の倍以上の強さだ。

「なに！？」

敵がもう目の前にいた。バンッ！

思いっきり蹴られて落下していく

「くそー！ー！！！」

ド  
ン！

「ガハツ！ ゲホゲホ」

第二アリーナに激突

「加津佐、お前どうして上から！？」

「皆、頭を下げる！！！！！」

加津佐何言って入るだ？

同時に上を皆が見た。

「キャ  
」

くそっ！皆を守るには、「ビット！ビームシールドモード展開！」

加津佐が何かを言うと加津佐のビットから大きい楯が出た。

「なんだこれ？」

「一夏、鈴、セシリア、皆を避難させる」

「「「加津佐」」」

「早く!!!」

「わかった」

俺達はクラスの皆を非難誘導を始めた。

「織斑先生、聞えますか？」

「加津佐か？」

「はい。」

「なんだあれは？」

「どうする？言うか……ダメです」

「そうだよな。みんなを巻き込めない。」

「わかりません。」

加津佐、貴様私に嘘を付くとは良い度胸だ。

「みんなの避難は……終わったみたいだな」

「ビット通常モード」

「ビームが飛んできた。「邪魔だ。」

「バッン！ ビームを再び斬った」

「一夏、あれ誰なの？」

「シャルル、あれは俺のだちの加津佐だ。」

まさか、織斑一夏以外に男でISを動かせる人がいたなんて

俺は上に上昇しようとするがビームの雨だ。  
どこかで同じような事あるぞ。俺

左を見るとまだ避難してない生徒がいた。

「その少女早く非難しろ！」

その少女は、俺の言葉を無視してISを展開させていた。

専用機持ち？

少女が上昇して敵に近づいている。

「ダメだ。早く非難しろ！」

「加津佐」

「一夏、お前あの子知っているか」

「あいつはラウラ・ボーデビッツって言うっていた」

あいつがラウラ………加津佐、あの子を戦わせてはダメ」

「何故？」

加津佐、誰と話しているんだ？

「彼女の機体にはヴァルキリ システムと言って使ってはいけないシステムがあるの」

まさか！あの機体に……

「一夏」

「なんだ？」

「避難しろ」

「俺も戦う」

「ダメだ！」

え………なんで

「何故だ？加津佐」

話しても無駄か

「鈴、聞えるか」

「今から

を気絶させるから運んでくれ」



「ちょっと……」  
ブチ

鈴との通信を切断する。

「一夏」

「なんだ？」

俺の方に向いた瞬間に一夏を気絶させた。

「加津佐……な……で」

すまない

上昇をする。ラウラを止めなければ

<ラウラ>

「貴様の攻撃など 当たるものか!!」

この私の結界の前では、全て無力だ。

追いついた。

TORAIARUチャージ終了。

よし、行ける。



疲・・・れ・・・た

くそ 体が動かない。

目を閉じ落下

「加津佐!!!」

<保険室>

「こ・・・こ・・・は」

ゆっくりと目を開けた。どこだ？ ああ、保健室か

コンコン

千冬さんだな

「加津佐、起きているか」

「はい」

「失礼する。さて2、3質問するがいいか」

「はい」

「あれはなんだ？」

「隕石から出てきました。」

「だがお前は、破壊したと言っていただろう。」

「煙の中から出てきました。」

「わかった。最後だ。お前はなに者だ？」

「俺は奇跡 加津佐です」

「わかった。部屋に戻って休め」

「はい」

なんとかごまかせたな、  
「加津佐、本当になににも変わってないのね」  
まさか・・・気のせいだ。

自分の部屋に戻った。

「ただいま」

「加津佐！大丈夫なの？」

「落ち着いて鈴、大丈夫だから」

「わかった」

無言が10分続いた。

「加津佐、休みなさいよ」

「そうする。おやすみ鈴」

「おやすみ加津佐」

加津佐、なんで一夏を気絶させたのって聞けない。

じーちゃん俺、変わったよ。

<一夏&シャルル>

なんで加津佐俺を気絶させた？明日聞いてみるか

「一夏？」

「シャルル」

「どうしたの悩んだ顔して」

「いや、なんでもない」

「早く寝ないとだめだよ」

「まじ、寝るよ」

「おやすみ、一夏」

「おやすみ」

ルームメイトはブロンドの子（後書き）

疲れた。頑張った。

これからの展開に期待してください。

僕、頑張ります。

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ前編」(前書き)

考えるのに時間がかかりました



第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイツチ前編」

朝目が覚めた俺は部屋を出てランニングをしに外にでた。

「ハアハア」

これで10週目

「責様！」

声のする方向に顔を向けるとそこにはラウラがいた。

「なに？」

もしかして昨日の俺がラウラに蹴りを入れた事怒っているのかな？

「今から私と戦え！」

ん………戦え？ なんで？

「戦う理由がない」

「私にはある！」

そんな事言われても困るな

「フン」

ラウラは俺の前から居なくなった。

なにしに来たの？

夕方

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 加津佐」

なんで俺に振る

シャルルが転校してきてから五日が経って、今日は土曜日だ。IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっている。

まあ、部屋にいと鈴がいるからな。だから一夏の訓練の手伝いをしている。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったね？」

「うっ……、確かに。「瞬時加速」も読まれてたしな」

「一夏」

「なんだ加津佐？」

「ISを見せてくれないか？」

「いいぜ」

「一夏が百式を展開しそれを俺は見た。」

「……………」

「どづした？」

「一夏、お前OSとか確認しているか？」

「いいや、めんどくさいからしてない」

え、加津佐、此の人のIS調整してあげたら」

「そつだな」

また、加津佐は誰かと話している。まだ加津佐に聞いて無かった。

「加津佐」

「なんだ？」

「昨日のことなんだけど」

昨日……あ！

「俺をなんで気絶させた？」

加津佐くん、なんかつらい表情してる

「すまん」

「どうして謝るんだよ？」

「気絶させた理由は……！ 一夏にビームが飛んできたからつ  
いやっちまった」

「ああ、そういうことが」

本当は、お前を戦いに巻き込みたくないだけ。

「加津佐、貴方は優しすぎる」そうかもな

「一夏の機体は接近オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握してないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬間加速って直線的だから反応できなくても」

「どこに来るかわ予測で攻撃できる。だろシャルル」

加津佐、僕が言うとしてた事全部言った

「直線的か……うーん」

「じゃあ、一夏、これから俺がやるから見てる」

「おう。で、何するんだ？」

「瞬間加速方向転換だ」

「そんな事できるのか？」

「物理的には無理だよ。加津佐」

「まあ、見てる」

来いハアルファヰISを展開し身にまとう

そして、瞬間加速

「一夏、お前こついう使い方もあるぞ」

壁にぶつかる前に地面に接近ブレードを突き立てて、それをてこの原理を応用して曲がった。

「そんなやり方ありか？」

「ありだろう」

普通出来る訳が無い。瞬間加速の中で接近ブレードだし地面に突き立てるなんて、加津佐、君は一体何者？

「あ、でも、瞬間加速はあんまり無理に変えない方がいいよ。」

「空気の威力で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折する。」

「……なるほど」

俺はシャルルと加津佐の言葉をしっかりと聞きながら、話のたびにうなずく。

なにせシャルルと加津佐の説明はわかりやすい。非常にわかりやすいのだ。

『こう、ずばーっとやってるから、がきんっ！ どかんっ！ とう感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ なんでわかきのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾け、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

俺に今まで教えてくれたコーチたちのありがたい言葉がこれだ。

色んな意味で行き詰まっていたへそして息詰まっていた俺の前に現れた救いの主ことシャルル・デュノアと奇跡……まてよ加津佐から何も教えてもらってない。

その感動はともではないが言葉では言い表せない。男同士気を使わなくて最高だ。

へI Sのスーツの露出が大きすぎるんだよ……

本番の戦いならよもかく、訓練はあくまで訓練。正直、色々なところに目が行ってしまって、やりずらくてしょうがない。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理論整然とした説明の何が不満だというのかしら」

あー……。俺の専用コーチ×3が後ろでぶつくさ言ってる。さつきも行ったように土曜日の午後はアリーナが全開放されているので、ここ第三アリーナでも多くの生徒が訓練に励んでいる。

しかし、学園で三名のしかない男子が両方にいるせいか、第三アリーナは使用希望者が続出。

「一夏の「百式」って後付武装がないだよな」

おっと、シャルル先生のお言葉だ。心して聞こう。

「ああ。何回か調べてもらったけど、バススロットが空いていないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……。えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様の特殊才能だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然に発生する能力のこと」

こういう説明がすらすら出てくるあたり、シャルルがいかに優秀かがよくわかる。

「でも普通は第二形態から発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるよう

にしたのが第三世代型IS

オルコットさんのブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほど。それで、百式の唯一仕様ってやっぱり「零落白夜」あのか？」

エネルギーの性質のものであればそれが何であれ無効化・消滅させるのが百式最大の攻撃能力、それが「零落白夜」。

しかしその発動には、自身のシールドエネルギー、つまり自分のライフを削るという呪われた武器仕様であり、文字通りのも諸刃の刃なのだ。

「百式は第一形態なのにワンオフ・アビリティがあるっていうだけでもものすごい異常事態だよ。

しかも、その能力って織斑先生の 初代「ブリュンヒルデ」が使っていたISと同じだよね？」

「加津佐、生命体が地球に迫ってる。」

「本当か？」

「間違えない。今日の夜中来る！」

「わかった。」

加津佐、また一人で喋っている。

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」



「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわつきはじめて、俺はちょうど一マガジン分十六発撃ち切ったところで注目的に視線を移した

「……………」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデビツヒだった

「おい」

ISの開放回線で声が飛んでくる。初対面があれだったのだから、その声は忘れもしない。ラウラ本人の声だ。

「……………なんだよ」

「夏の奴なんか在ったのか？」  
「貴方も人の事言えない」

「……………言わないでくれ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話しが早い。私と戦え」

これって、デジャブ？  
「あれは、加津佐がラウラ・ボーデビツヒを蹴ったのが悪い」

だから、言わないでくれ

いきなり何を言っているのか、コイツは。戦うの大好きっ子か？

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

一夏と千冬さんに昔何か在ったのか？　　「第二回 I S 大会の決勝戦で織斑　千冬は、決勝戦を辞退した」

なんで千冬さんが？　　「織斑　一夏は、その、決勝戦のその日に誘拐されたと記録してある」

ていうか、なんでお前そんな事わかるんだ？　　「こちらの地球では、ハッキングというやつです」

おい、止める。俺が捕まる　　「それは、こまるので止めます」

「貴様がいなければ教官は………だから、私は貴様の存在を認めない」

………ということらし。千冬姉の教え子ということ以上に、その強さに惚れ込んでいるのだろう。

「また今度な」

「ふん。ならば　　戦わざるを得ないようにしてやる！」

言うが早いが、ラウラはその漆黒の I S を戦闘状態へとシフトさせる。刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「！」

ゴガキンッ！

横合いから割り込んできた加津佐がビットをシールド状態で俺の前に展開していた。

「なに！？」

加津佐のIS初めて見た。

「俺の友達に手を出すな」

「貴様……」

互いに涼しい顔をした睨み合いが続く。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師だろう。

「……ふん。今日は引こう」

ラウラはあっさりとISを解除してアリーナのゲートへと去っていく。

その向こうではおそらく教師が怒り心頭で待っていることだろうが、あのラウラの性格からして無視してしまうのだろう。

「一夏、大丈夫か？」

「あ、ああ。助かった」

つい数秒前までラウラと対峙していた鋭い眼差しはもうない。いつものように普通の加津佐に戻っていた。

「今日は、もうあがるうつか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリナの閉館時間だしね」

「おう。そうだな。あ、銃サンキュウ。色々と参考になった」

「それなら良かった」

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「とというかどうしてシャルルは俺達と着替えたがらないんだ？」

「一夏、質問を質問で返すのはよくない気がする。」

「……どうして……その、は、恥ずかしいから……」

おかしなことを言っやつだなあ。

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えつと、えーと……」

なにか適当ないいわけを探しているな。

「なあ、シャル」

ぐいつ。

「はいはい、アンタはさっさと着替えに行きなさい。引き際を知らないやつは友達をなくすわよ」

首根っこを掴まれた。ぐえ、いきなり苦しい。鈴、やめて。やめて。鈴。

「夏がしにそうだ。ハ加津佐、楽しんでない？」

そんな事ない

「こ、コホン！……どうしても誰かと着替えたいのでしたら、そうですね。」

気が進みませんが仕方ありません。わ、わたくしが一緒に着替えて差し上げて

「こっちも着替えに行くぞ。セシリア、早く来い」

「ほ、篝さん！ 首根っこを掴むのはやめ　　わ、わかりました！　すぐ行きましよう！  
ええ、ちゃんと女子更衣室で着替えますから〜！」

反論しようとするセシリアにそれを許さず首をぐいと引っ張る篝。  
セシリア可哀そうに、それにしても一夏もてるな〜  
「加津佐はもてないのですか？」

「ああ」

また加津佐誰かと喋ってる。

「鈴」

「なによ？」

「暴力反対」

「がんっ！」

「暴力っていうのはこういうのを言うのよ」

ひでえ、いきなり顔を殴ってきやがった。大体、反対って言ったのに。

「まだしてないのに反対とか言うからよ、バカ」

ともあれ、これ以上殴られるのも本意ではないし、アリーナの閉館時間も近い。さっさと着替えに行こう。

「じゃあ先に行っているぞ」

「あ、うん」

そつだ！ 俺も鈴に言わないと

「鈴、今日は先にシャワー使わせてくれ」

「別に今日だけはいいわよ。ありがたく思いなさい」

そつですか。

俺と加津佐はそれぞれシャルルと鈴にそれだけ言って、ゲートへ向かう。最近急加速・急停止も慣れたもので、ISの操縦においては多少なりとも身についてきた。

「しかしまあ、贅沢っちゃあ贅沢だよな俺等」

「なんでだよ？」

「このロッカーの数見てみるよ」

がらーんとした更衣室。ロッカーの数は五十ちよつとあり、突然室内もそれに見合って広く作られている。

俺と加津佐は百式とアルファを持機状態のガントレットとプレスレツドに変換すると、ISスーツを脱いだ。

「はー、風呂に入れてえ……」

スーツが吸収してくれるとはいえ汗をかいていたのには変わりない。

なので心身ともにさっぱりしたいのが本音だ。

噂によると男子が三名になったことで山田先生が大浴場のタイムテーブルを組み直してくれるらしい。ありがとうございます。

「よし着替え終わり」

「俺も」

一夏と俺は同時に着替えを終えた。

男の身支度なんて簡単なものだ。考え事が一つ終わる前に済んでしまっ  
まう。

「あのー、織斑さんとデユノアさんと加津佐くんいますかー？」

「はい？ えーと、加津佐と一夏だけです。」

ドア越しに呼んでいる声が聞える。声の主はどうやら山田先生のようにうだ。噂をすればなんとやら、計ったかのようなタイミングである。

「入っても」大丈夫ですかー！？ まだ着替え中だったりしますかー？  
？」

なんで山田先生は語尾を入れるのだろうか？

「大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシユツとドアが開いて山田先生が入ってくる。



「デュノア君は一緒ではないんですか？ 今日織斑君と加津佐君で実習しているって聞いてましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんが、どうかしました？ 大事な話なら呼んでいただけますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、織斑君か加津佐君が伝えておいてください。」

ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別になると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用ができます」

「本当ですか！」

「一夏、嬉しそう。ハ加津佐は嬉しくないの？」

別にシャワーだけでも十分。ハ加津佐って変わった？」

さあ

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

それはそうかもしれないが、なんにしても今の俺は感謝の気持ちでいっぱいなのだ。より強くお礼を言いたくてついつい熱が入ってしまった。

そろそろ、戻るか。

「一夏、じゃあ俺戻るから、大浴場の事を教えてやってくれ」

「お、おう」

俺は、部屋に戻りISの調整を始めた。

「TORAIARUシステムか……一か八かの賭けだからな。」

「加津佐、今、一夏の部屋から女の人の声がした」

「は？ どうせ鈴かセシリアか箒の誰かだろう」

「違う。あのシャルルって子が女の子らしいの」

「……まじで！」

「マジで、フランスにハッキングした」

「だからハッキングするな！」

「ごめん。」

「いいよ。それで分かったことは？」

「シャルル・デュノアは女、本名シャルロット・デュノア」

「何故男で？」

「お父さんの命令。織斑 一夏のデータを取る為」

「シャルルも大変な眼に合ってたんだな」

休みとってフランスに行くか。加津佐、貴方ヤツパリ変わった

<一夏&シャルルの部屋>

「ああ、ちょうどよかった。これ、替えの」

「い、い、いち……か……?」

「へ……?」

シャワールームから出て来たのは見たことのない『女子』だった。

**第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ前編」(後書き)**

次回 一夏の目の前にいた女子は一体誰だ？

そして加津佐が戦う敵フリーア(宇宙生命体)とは

次回 第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ後編」

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ中編」(前書き)

すいません。文字の量が半端じゃないので後編は次です。  
見てください

### 第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ中編」

「え、えつとだな、えーと……」

目の前の裸の女子はどこかで見たことある気がするんだが、混乱していることもあって思考がまとまらない。ええと、ブロンドの……  
・・・ブロンド　　？

「きゃあっ!？」

ガチャ!はつと我に返った女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

「……………えーと……………」

「……………」

ドアの向こうから声がない。

<加津佐と鈴の部屋>

「今、一夏、どんな状況だろうな」

「加津佐、楽しんでない？」

「そんなことはない。と思う。」

「ISの調整終わり。今日の前の見たいな奴が現れたら守るのがキツイ」

「加津佐、ISのビットシステムこっちに転送して」

「なんで」

「私が動かせば、より早く動けるでしょ」

「そうだな、お前本当に俺と一つになったのか？」

「なったよ。多分今日の戦いで加津佐は大きく変わる」

「そうか、でも、お前との約束は守るよ」

「ありがとう」

「後一夏の部屋のモニターをこっちに見せてくれないか」

「モニターなんかあったの？」

「うん。俺が付けた」

加津佐悪い「分かった」

<一夏&シャルル>

「あー、その」

「お茶でも飲むか？」

「う、うん。もらおうかな……」

お互い、何かしらの飲み物があつた方が話しやすいと思つたのだらう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お茶ができるまでの時間がまた沈黙の再来だつた。しかしまあ、仕方がないといえば仕方がないので、俺はともかく早く茶葉が広がるのを願つてやまなかつた。

「もう大丈夫だろ。ほい」

「あ、ありがとう きゃっ」

<加津佐>

「あ、あいつ等緊張しているな」

しかも一夏、湯飲みを溢した。ヤバイ、笑いがでそう。その時

ガチャ！

ヤバイ鈴が帰つてきた。

「フリア、今すぐにモニターを切れ早く」

{了解}



「ただいま加津佐」

「お帰り鈴」

加津佐、今誰かと話してなかった？

「加津佐、何してたの？」

「ISの調整」

「また、やって入たんだ」

「うん。まーね」

「それじゃあ、夜ご飯まだでしょ」

「うん」

「じゃあ、一緒に……行かない」

「別にいいよ。鈴お嬢様」

此の時の鈴の反応が面白い

「だ、誰がお嬢様よ！」

まあも一回やってみたらこつこついう感じで面白い。

☆加津佐、一夏達のお話終わりみたいよ☆

くそ見たかった。

「行こうか鈴」

「う、うん」

ガチャ

ドアを開けて一夏の部屋の方を見たらセシリアがいた。

「セシリア、何してんだ？」

「か、加津佐さん、鈴さんまで入たのですか？」

「うん」

鈴と俺は同時に頷く。

「じゃあ、私達食堂向かうら。じゃあね」

これは面白い事になりそうだ！

「またな、セシリア。後頑張れ」

「か、加津佐さん、何を！？」

セシリアと別れ、俺と鈴は一緒に食堂に向かった。

<一夏&シャルル>

コンコン

「!?!?」

「一夏さん、いらっしやいます? 夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか?」

いきなりのノックと呼び声に俺とシャルルはふたり揃って身をすくませる。

「一夏さん? 入りますわよ?」

まずい。まずいまずい。それはとてもまずい。今のシャルルの姿を見たらどんなに鈍いやつでも女だとわかってしまっだろう。

「どっしょどっしょ?」

「ど、とりあいず隠れる」

ぼそぼそと小声でやりとりをする。お互いにかなり接近していたが、もうそんなことを気にしている場合ではない。

「わ、わかったよ。とりあいず身を潜めて」

「だあつ! なんでクローゼットなんだよつ。ベットベット! 布団の中で大丈夫だ!」

「あ、ああつ、そつか！」

ばたばたとあわただしく動く俺&シャルル。  
開く音が響いた。

ガチャ。ドアが

「よ、よおセシリア！ なんだ？ どうした？」

「……何をしていますの？」

絵的にはベットに飛び込んだシャルルに上から布団をかける形で俺が乗っかっている。

「い、いや、シャルルがなんだか風邪っぽいっていうから、布団をかけてやってたんだ。それだけだぞ、ははは……」

「……日本では病人の上に覆い被さる治療法でもあるのかしら」

いや、ないだろ。世界中のどこにも。というかあつてたまるか。

「と、とにかく、あれだ。シャルルは具合が悪いからしばらく寝るって。夕食はいらぬみたいだし、仕方ないから俺一人で行こうって話をしてたんだ」

「そ、そうそう」

布団のなかからくぐもったシャルルの声が聞える。ああ、もうちょっと調子が悪そうな声をだしてくれ！

「し、しほっしほっ」

うわああ、なんとわざとらしさ。さすがにこれは無理があるか・・・

あ、あら、そうですね？ では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、一緒にしましょう。」

加津佐さんが言っていたのは、このことだったのですのね。

「じほじほつ。そ、それじゃあぐゅっくり」

「お、おう」

「デュノアさん、お大事に。さあ一夏さん、参りましょう」

するつと腕を取られた。さすがイギリス人、日本人が不得手とする行為にも躊躇がないらしい。

<加津佐&鈴>

俺達は食堂に向かっている。

「あれ、筈じゃん。こんなとこで何してんの？」

鈴は言う

「一夏・・・食事に、誘いに・・・行くのかと」

一夏、お前ほんと女運最高だな

「じゃあ、早く行った方がいいよ。セシリアも来てたし」

「加津佐、貴方最低です」

「楽しければそれでいいの」

「なに!？」

「箒は走って一夏の部屋に向かっていた。」

「再び食堂に向かい始めた。」

<セシリア&一夏>

「部屋を出て廊下へ。食堂に向かうために階段を降りると、そこで呼び声と出会った。……箒だ。」

「あら、箒さん。これからわたくしたち一緒に夕食ですの」

「加津佐が言っていた事は本当だったか。一夏め何故腕を」

「それと腕を組むのとどう関係がある!？」

「あら、男性がレディーをエスコートするのは当然のことです」

「そうだったのか。俺はてっきりエスコートされているものだとばかり。……ああ、箒がこつちを睨んでいる。なんで俺のせいなんだらうね。」

「一夏っ、お前もお前だ! 私が食堂で待っていたというのに、ど」

ういうことだ!？」

「どういっても何も……」

他にする事があつたんだから仕方ないだろう。

「ともかく、わたくしたちはこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待て！ それなら私も同席しよう。ちょうどこれから夕食だったのにな」

おかしくない？

<加津佐&鈴>

「それにしても加津佐、良く食べるわね」

「育ち盛りだから」

「加津佐って好きな人とかいるの？」

「ゴホッ、急にどうしたの鈴？」

鈴の口からまさか、好きな人いるのって言葉が聞けるなんて

「いいから！ いるのいないの？」

「うん」

今、考えてみればそんな事考えてなかったな

「いないね」

「そう・・・」

鈴なんか嬉しそうじゃないか？　「多分、加津佐、貴方に恋をして  
いるの」

気のせいだろ

「ご飯を食べていると一夏達がやってきた。」

うわぁ　一夏の左右のにセシリアと箒、一夏、頑張れ

「加津佐、そこ空いてるか？」

「別に良いけど」

「サンキュウ」

「それじゃあ、俺と鈴は飯食べ終わったから戻るは」

「頼む、少しの間だけいてくれ」

「どうするかな？」

「加津佐、行くわよ」

「そついう事だからじゃあ」



加津佐、倍に返してやる。

<加津佐&鈴の部屋>

「じゃあ、俺、寝るわ」

「加津佐」

「なに？鈴」

「わたし・・・わたし」

「わたし、加津佐の事が好きなのよ！」

寝る前に水を飲もうとした時

「え」

まさかの鈴から告白された。俺は人間でも宇宙人でも無い。だから、記憶を操作できれば、加津佐、貴方は人の記憶いじれるわよ」

本当に？　　うん。私と一つになったことで能力を手に入れた筈だから」

どうやって使うんだ？　　相手の頭に触れて消したい記憶を言えば消える」

俺に一番関わった鈴が危険だから。これが一番だ

「嬉しよ。鈴、俺も鈴の事好きだ」

俺は鈴の傍に行き抱きしめる。

「鈴」

「なに？加津佐」

「ごめん」

「なんで謝るのよ！？」

「これからは、あかの他人だ」

「え……」

加津佐、何を言っているの？

「俺、鈴と居て楽しかったよ」

「うん」

「だからこそ、さようなら」

鈴の頭に手を乗せて俺に関する記憶を全て念じた

鈴が頭を抱えてる

「加津佐、なにしたの？」

加津佐の記憶が消えている。嘘、イヤだ。イヤだ。

「加津佐、もしかして、きゃあ」

鈴は叫んだ。

「止めて、止めて加津佐!？」

「ごめん。俺は鈴達を戦いに巻き込みたくない。だからこそ俺の事全て忘れさせる」

「いや……だ。加……佐」

鈴は倒れた。さようなら鈴。俺は何故だか分からないけど涙が出て来た。

「なんで……これで……よかった筈なのに」

涙が出るんだ。くそっ! 俺はこれで良かったのか? 〔加津佐〕

鈴が目を覚ました。

「アンタ誰?」

「俺の名前はルームメイトの奇跡 加津佐です」

「そうなの?」

「うん」

「これからよろしく。鈴さん」

「ふん。まあよろしく」

鈴の記憶は、俺の以外の奴の記憶を残して、俺との記憶を全て消した

「生命体を全て消しこの世界を平和にする。絶対に」

ハ加津佐、そろそろ」

「ああ」

部屋を出て外へ

<一夏&シャルル>

「え、えっと、ね。その……一夏が食べさせて」

モジモジとして言いくそうにしているなあ　と思ったら、予想外の言葉が出てきて一瞬俺は惚けてしまう。

「あ、甘えてもいいって言ったから……」

「そ、そうだな。男に二言はない。よし、じゃあそうしよう」

此の時俺は、加津佐がどんな苦しい思いをしているのかわらなかつた。

<加津佐>

「来い、アルファ!!」

ISを展開し上昇を始める時

「その生徒ISをしまえ」

織斑先生である。でも俺は無視して上昇を続けた。

加津佐、何故止まらない。ピピピ。

「織斑か」

「はい」

「今すぐ外に來い」

「え？」

何言ってるんだ。千冬姉

「分かった」

俺は外にダツシュで向かった。

「どうしたんだ千冬姉？」

「学校では織斑先生だ。今からお前に任務を与える」

「任務？」

「そつだ。今上昇したISを調査をしろ」

「誰なんだ？」

「加津佐だ」

「え……」

加津佐が……あり得ない

取りあはず百式を展開して上昇をした

<加津佐>

「あれか」

「はい。あれです」

全て俺が倒す。接近ブレード「極光」をだし接近

「うわぁ　　！！」

ガキッン！　お前らが地球に来なければ良いのに

「なんでお前らは来るんだ！！！！」

ビットを射出して

「当たれ　　！！！！！！」

全て生命体に命中。これで

<一夏>

あれは加津佐？　後、誰だあれ？

俺の目の前には、ISなのにISじゃない。

「織斑どうした？」

千冬姉からの通信だ。

「不明ISと加津佐が交戦中」

「なに！？」

また加津佐は先に敵に築き動いた……なら何故私に報告しない？

「そのまま、監視を続ける」

<加津佐>

「TORAIARU起動」

俺のISがさらに光だす。ビットを極光に合体させ

「俺の目の前から消えてなくなれ

！！！！！！！！

！！！！！！

ドーン！！！！！！！！

ボカ

ン！！

「はあはあ

下にドンドン急降下する。

<一夏>

「織斑先生敵ISが完全に消滅しました」

「・・・・・・・・」

加津佐、あれは加津佐だよな。目の色が違う。

<加津佐>

へ加津佐、織斑 一夏に見られたわ

「なに!？」

「どっちにしても織斑先生に何か言われるからいいよ。別に」

下に着くと、織斑先生が銃を持っていた。

「加津佐、今すぐISを解除しろ」

「織斑ご苦労だった。部屋に戻って良いぞ」

「おう」

言われたとつりにISを解除した。

「ついて来い」

「はい」

エレベータで何処かに降りた。

部屋の中に入ると山田先生がいた



<地下>

「加津佐、お前に質問だ」

「はい」

「不明ISはの一体正体なんなんだ？」

「宇宙生命体です」

「そんなのあり得ません」

山田先生は言う

「別に信じてもらわなくて構いません」

「分かった。次だ。お前は人間か？」

「多分人間です」

「そうか」

加津佐はまだ何か隠しているな

「加津佐、ISをデータを見せろ」

「どつぞ」

俺はISのUSBメモリを渡した

「そこに俺が今まで戦ってきた奴のデータが入ってます」

「戻って良いぞ」

「はい」

俺は自分の部屋に戻った。

「山田先生データを」

「は、はい」

モニターに出た今までのISのデータ

「なんですこれ!？」

私の目の前にあるISのデータは、全てがおかしかった。

「加津佐が言って入ったことは本当かもしれない」

「そうですね。今から各国に連絡しましょう」

「ダメだ」

「何故です?織斑先生」

「そんな事してみるIS学園を加津佐に潰されるぞ」

「え……」

「なんで加津佐がこのデータを見せたか、私達を信用しているからだ」

「で、でも」

「此の事は私達だけの秘密だ。いいな山田先生」

「はい」

加津佐、今までこんな奴を相手に戦ってきたのか！？

<加津佐>

「いいの、データを見せて」

「信用できる人だから」

{そう}

「俺、寝るな。後、今回のISのデータの整理頼む」

{うん。}

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ中編」(後書き)

次回 後編

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ後編」(前書き)

疲れた。見てください

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ後編」

朝

俺は、いつもどおりにランニングをしている。

「はあはあ」

まだ後10周しなくちゃいけない。

「加津佐」

「はあはあ」

まだまだ、もっとトレーニングしないと

「加津佐！」

肩に手を置かれ振り向くと

「織斑……先生、おはようございます」

「今日も朝からトレーニングか？」

「はい」

「前にも言ったが無理はするなよ」

「はい」

加津佐の目の色が変わっていた。一体加津佐に何があった？

<加津佐&鈴の部屋>

部屋にもどりシャワーを浴びる

「だれ・・・」

「ごめん。おこした？」

「なんだ加津佐か」

「もう。朝ですよ。鈴さん」

「早く、朝飯取らないと織斑先生に怒られるよ」

これを言うと鈴は立って顔を洗い、歯を磨き、出て行った。

「完全に消えているようだな」

「加津佐、整理終わった」

「サンキュウ」

「うん」

俺は制服を着て学園に向かった。向かう途中、あれって織斑先生？

「教官、我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほづ」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにあたる人間はいません」

「なぜだ？」

「危険に疎く、ISをファクションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど」

「っ………！」

凄みのある織斑先生の声。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

ラウラの声が震えているのがわかる。恐怖、なのだろう。圧倒的な力の前に感じる恐怖。

俺も初めの頃、千冬さんに訓練してもらったとき、凄く恐怖を感じた。

「さて、授業が始まるんな。さっさと教室に戻れよ」

「………」



ぱつと声色を戻した千冬さんがせかして、ラウラは黙したまま早足で去っていった。

……あ、ヤバイ！ 気配が消せ切れてない

「その男子。盗み聞きか？ 異常性癖は感心しないぞ」

「すみません。織斑先生」

「なんだ加津佐か」

ん？ いつもと感じが違う

「織斑先生、昨日のデータどうでしたか？」

「うむ、加津佐」

やはり何かがおかしい。

「はい」

「あまり無理はするな。後授業が始まるぞ」

「はい」

<  
>

「あ  
」

ふたりそろって間の抜けた声を出してしまう。時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

ふたりの間に見えない火花が散る。どうやらどちらも狙っているのは優勝のようらしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくってのも悪くはないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優秀であるか、この場ではつきりとさせましょうではありませんか」

ふたちともメインウエポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では」

と、いきなり超音速の砲弾が飛来する。

「！？」

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者

「ラウラ・ボーデビッツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情は欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「……どういうつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルーティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなり挑発的な物言いに、鈴とセシリアの両方が口元を引きつらせる。

「何？ やるの？ わざわざドイツくんだからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぶりね。」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？ 犬だってワンと言いますのに」

「はっ……ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ

何かが切れる音がして、鈴とセシリアは装備の最終安全装置を外す。

そしてラウラは

「とつと来い」

「「上等」」

<加津佐&一夏&シャルル>

「一夏」

「どうした加津佐？」

「今日の放課後話したい事がある」

もしかして昨日のISの話しか？

「僕も同席させていいかな？」

このふたり何か隠しごとしてる。

一夏の生命体の記憶を消さなければ。一夏が俺の戦いに巻き込まれる。

「いいよ。別に」

「一夏、加津佐、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと」

「第三アリーナだ。一夏」

「「「わあ」「」」

廊下で加津佐とシャルルと並んで歩いていただけだが、そこにいきなり予想外の声が飛び込んできて俺たちは揃って声を上げた。

その一緒ぶりが気になったのか、いつの間にか横に並んで四人目と箒は眉をひそめる。

「……そんなに驚くほどのことが。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「ごめん」　「加津佐、第三アリーナでセシリアと鈴が戦っている」

マジか！？　確かラウラの機体にはヴァルキリ　システムがあった。急がないと　「間違えない。」

わかった。

俺は走りだした。

「おい、加津佐？……」

「行っちゃったね」

取り残された俺とシャルルは箒に何の用か聞く。

「そんなことより、そんなに慌ててどうした？」

「ともかく、だ。第三アリーナに向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

それは非常に助かる。なんだかんだでISの実力は実稼働時間正比例するのだから、わずかな時間でも実戦同様の訓練を行えるのはありがたい。

<>

「今、どういう状況だフリーア!？」　　「鈴とセシリアが模擬戦を行っている」

そんなことが

取りあはず第三アリーナへ向かう

< 鈴&セシリア&ラウラ >

「くらえっ!!」

ジャカツ! と鈴のIS『甲龍』の両肩が開く。そこに搭載されている衝撃砲『龍砲』の最大出力攻撃である。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前でな」

衝撃砲不可視の弾丸がラウラを目指す　　が、その攻撃はいくら持っても届くことは無かった。

「くっ！ まさかこうまでは相性が悪いだなんて」

<加津佐>

現在第三アリーナのピットに到着

「加津佐急いで、中で大変な事になってる」

「なんで？ まいいや」

「わかった」

俺はISを展開しピットを出た。

そこには、シャルルが捕まって入た。一夏は接近して零落白夜をラウラに振りおろそうとしていたので

俺は思わず

「TORAIARU起動」

TORAIARUを起動してしまい俺は一夏の振りおろす零落白夜を極光で受け止めた。

後ろでは、織斑先生がラウラの振りおろす剣を刀で受け止めていた。

「加津佐」

「織斑先生」

その影は、予想外の人物だった。しかもその姿は普段と同じスーツ姿で、ISどころかISのスーツを装着していない。

加津佐はTORAIARUを使ってる。

「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙確しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へ変換され、弾けて消えた。

「織斑、シャルルお前たちもそれでいいな？」

「はい」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する」

パンツ！ と千冬姉が強よく手を叩く。それはまるで銃声のように響いた。

「加津佐、敵がきた」



こんな時に！ 仕方ないこのまま上昇をするしかないか

「加津佐、何処に行く気だ!？」

加津佐の奴まさか！

「すみません」

途中で遮断バリアーを壊して外に出た。上昇を続けていると通信が入ってきた

「加津佐か」

「織斑先生、すみません」

「そんな事はどうでもいい。敵か？」

「はい」

「加津佐、あれ」

今までの生命体ISじゃない!? どうなってるんだ

生命体ISから攻撃してきた。シュン。これはレーザー!?

もしかして、俺たちを観察していたのか? 「急いで破壊を」

「了解」

だがTORAIRUは使えない。今さっき一夏を止めるので使ってしまった

もう一発のレーザーが飛んできた。

「邪魔だ！」

極光でレーザーを斬り払いする。　　「加津佐、ビット」

そうか！　頼むフリア　　「わかりました」

俺はビットのシステムを全てフリアに預けた。

ビットで生命体ISを攻撃しているがそれを簡単にかわされた。それにビットを全て壊された。

「くっ！」　　「ごめん。加津佐」

そしてレーザーが連射された。レーザーを連続で斬るが何発かは、当たってしまった。

「加津佐……………」

俺のシールドエネルギーが残り400になった。

「それがビームだったら、もう終わってるって、そう言いたいのかよお前は！！」

俺の中で何かが壊れた。　　「加津佐が目覚めた」

「うおおおおお」

瞬間加速を連続でして相手を攪乱させ、そして

「落ちろ!!!」

極光を振りおろし破壊

「はあはあ」

「加津佐」

「織斑先生、目標破壊確認」

「そうか早く戻ってこい」

「了解」

「加津佐、残りのシールドエネルギー30だけど飛べるの?」

ん……? 今シールドエネルギーが30って聞いた。画面を見ると……よしここはISを解除

俺はISを解除し空を飛ぶ言葉を叫んだ。

「アイ・キャン・フラ

イ!!!」

とか言いつつも落ちてます。

「加津佐、どこでISを展開するの?」

現在考え中………！ 第三アリーナの遮断バリアすれすれで展開しよう。

ある意味プロがする事をいまからする。

すげー速度、ISを展開している時はこんなの普通なのに

ハ見えたヾ

正面第三アリーナ遮断バリアー確認

よし。来い『アルファ』ISを再び装着しギリギリ止まった。

「危な！」ハ加津佐凄いいヾ

取りあはず地面に着陸

ハ加津佐、鈴とセシリアが医務室にいますヾ

「そうか、ありがとう」

走って医務室に向かった。

<医務室>

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていたら勝っていましたわ」

感謝するかと思えばこれである。まあ、別に感謝されたくて助けに入った訳でもないから、いいんだけどな。どっちかいうと俺自身がムカついて乱入した訳だし。

「お前らなあ………。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

ガラガラ

そこから来たのは、加津佐である。

「よう加津佐、終わったのか？」

「ああ」

なんの話しをしてるの？

「大丈夫だった？ セシリア、鈴さん」

鈴さん？ 今加津佐が鈴の事を鈴さんと呼んだ。

「こんなの怪我のうちに入らな いたた？ たっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味 つう  
っ！」

……。バカなんだろうか

「バカってなによバカって！ バカ！」

「一夏さんのほうこそ大バカですわ！」

「夏めちやくちや言われてるな。今日は戦った生命体の調査終了」

「ありがと、もう休んでいいぞ。今日は疲れたから眠るね」

「冗談で言ったんだけどまさか、本当に寝るとは。生命体も疲れてるのか？」

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしんだよ」

「ん？」

「まあ、そのとうりだなシャルル・・・いやシャルロット」

「シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入る時何かを言っていたようだが、よく聞き取れなかった。」

「ななな何を言っているのか、全っ然っわかんないわね！ここにこれだからヨーロッパ人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！・・・」

「そうなんだ」

「ポンと手を叩く加津佐」

「「「違い・・・」」」

セシリアと鈴が何かを言うおうとしたが舌をかんだ。バカだ

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあはず飲んで落ち着いて、ね？」

「不本意ですがいただきますしょうっ！」

鈴のセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取って、ペ  
ットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す。こらこら、冷た  
いものを一気に飲むと体に悪いんだぞ。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休  
んだら」

ドドドドドドドッ………！

「な、なんだ？ 何の音だ？」

「加津佐、今すぐに保健室から逃げた方がいいよ」

「なんで？ 理由は直ぐにわかるから隠れるか逃げるかしないと大  
変だよ」

「じゃあ、あそこしかないな。隠れるには」

「加津佐、お前………」

「加津佐さんなにを！？」

「少しの間我慢して、お願い」

「わかりましたわ」

俺はセシリアのベットに隠れた。

ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ぶ。．．．いや、本気で吹き飛んだ

「織斑君！」

「デュノア君！」

入ってきた　　なんて生やさしいものではない。文字通り雪崩れ込んできたのは数十名の女子生徒だった。

ひだから、隠れて良かったでしょあ。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな．．．ちょ、ちょっと落ち着いて」

「『『『これ!』』』」

状況が飲み込めない俺達に、バン！と女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知分がかかれた申込書だった。

「な、なにになに．．．?」

「『『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的に模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。』

なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」



「ああ、そこまでいいから！ とにかくっ！」

そしてまた伸びてくる手。ひいつ。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デユノア君！」

フリーア、お前が言っていた事ってこれか？ ふっん

隠れてないと危ないな。もうちょっと我慢してセシリア

「え、えっと……」

そう、シャルルは実は女子なのだから、誰かと組むのは非常にまずい。

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

しーん……。いきなりの沈黙に俺は気持ちが悪くし後ずさる。うっ、やっぱりまずかったか？

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん。まだ加津佐君がいる！ 探せ！！」

「こんどは俺かよ！」

女子達は加津佐を探しに何処かに行った。まあここに入るけど

「ふう、ありがとセシリ」

何故？ セシリアは顔を赤くしている？  
「加津佐、貴方結構鈍感ね」

え、なにが？ わからん

加津佐、お前そんなところに隠れていたのか！？

「あ、あの、一夏」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

安堵のため息をついた一夏にシャルルが声をかけようとして、それを上回る勢いで鈴とセシリアがベットから飛び出してきた。

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

俺を諦めかねない勢いである。こら、けが人は安静にしない。

「ダメですよ」

おわっ！？ いきなり声をかけられてびっくりしたのは俺だけではなかったらしい。

「おふたりのISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルCを超えています。当分の間は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。」

ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

そんな説得でこの燃え上がる代表候補生×2が納得するのだろうか。というが無理な気がするんだが……。

「うっ、ぐっ……！ わ、わかりました……。」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……。」

あれ？ すごいあっさりと引き下がった。……なんで？

「わかってくれて先生嬉しいです。ISに無理をさせるとそのツケは自分で支払うようになりますからね。」

「はい……。」

「わかってますわ……。」

俺は保健室から出ようとした時

「加津佐君、織斑先生が呼んでいます」

「はい。今から行きます」

「じゃあ、私もついて行きますね」

山田先生までついてくるか、山田先生なら大丈夫だな

「はい」

また、加津佐千冬姉に呼ばれてる。加津佐、お前は一体何者？

俺と山田先生は一緒に地下へ

<地下>

「加津佐、来たか」

「はい」

「それでは、今日の報告を聞きたいのだが」

俺は、USBメモリをだしモニターをだす。

「今日戦った相手のISは今までのと違いました」

「どこの」

どんどんISになって来ている事を織斑先生に言った。

「加津佐、お前のISを調べたいのだが？」

「別に構いませんよ」

IS『アルファ』を出し先生達に見せる。

カタカタと山田先生がアルファを調べている。

「え　　！！？」

「どうした？」

「どうしたんですか山田先生？」

「加津佐君のISのシールドエネルギーが7000あります」

「なに！？」

織斑先生もびつくりしてモニターを見る。

「加津佐、これはお前がしたのか？」

「はい」

他のシステムも全て見た。

「織斑先生、このTORAIARUシステムってなんですか？」

「それは、機動力、加速、威力を高めてくれます。」

そうか、だからあの時も

「後、この????も所解析できますか？ 俺も何のシステムだか分からないんですけど」

「やってみます」

また山田先生がキーボードを打ち始めた。だが

「すみません。出来ませんでした」

やっぱり解析不可能か

「加津佐、今日はもう帰って休め」

「はい」

俺は自分の部屋に戻った。

もしかしたら、あれを使う時が来るかもしれんな

<一夏&シャルル>

「ズルいよねえ、一夏は」

今もこうして目と鼻の先にいるというのに、ただただ眠っているだけ目覚めもしない。

まるで『眠れる森の美女』だ、なんと思つと、シャルルは急におかしくなった。

(ふふっ。さすがに役を間違えているよ)

コンコン

誰だろうこんな時間に？ 僕は扉をあけると加津佐が立っていた

「一夏、いるか？」

「寝てるよ」

「そっか」

そっちの方がこっちには都合がいい

「少し上がらせてくれないか？」

「別にいいけど」

俺は直ぐに一夏の傍に行き頭に手を置いた

「何してるの？」

「今から一夏に落書きをするんだ」

生命体の事は全部忘れてもう。マインドハック  
ハ加津佐、やはり  
貴方は優しすぎるよ

「シャルル」

「どっしたの？」

どうする今言うか？ いずれシャルルも自分で決めるし

「いや、なんでもない」

「うん」

「じゃあ、また明日」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

加津佐、一体何をしに来たんだろう？ まいいや

それからしてシャルルは一夏を見つめて、さつとそのホッペにキスをした。

「おやすみ、一夏」

<加津佐>

ガチャ

「ただいまー」

つて、鈴は寝ているかドアを叩いてベットに行くと



「おかえり」

なんと鈴が起きてる。

「どうしたの？」

「加津佐これなに？」

携帯を見せて来た。あ！それは俺と鈴のツーショットの写真が合った。

「もしかして加津佐と私知り合いなの」

「いや、それは……」

言い訳を何か考えないと……！！

「それは、一夏を鈴さんに振り向かせるために俺が作った写真なんだ」

「な、何を言っているのよ！」

「今すぐ消すから携帯かして」

鈴から携帯を渡され、写真を一枚の頃ず消した。

「じゃあ、俺寝るから」

「うん」

じーちゃん、俺、どうすればいいんだろう。教えてじーちゃん

寝る時、何故だか知らないけど涙が出た。

第三話 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ後編」 (後書き)

次回 第四話 ファインド・アウト・マイ・マインド

ストーリーを大幅に飛ばしてしまいました。結構疲れた。  
次回も見てください。

ファインド・アウド・マイ・マインド前編(前書き)

少しストーリーを書くのが長くなるので先にこちらを見てください。

加津佐&葵VSシャーリー&クリスの戦闘です

## ファインド・アウド・マイ・マインド前編

六月も最終週に入り、IS学園は月曜日から学年別トーナメント―色にと変わる。

朝、いつもどおりにランニングをしにでよつと手をドアのノブにかけた時

「加津佐、どこに行くの？」

鈴が起きて来た。今、俺が一番会いたくて会いたくない人

「朝のランニングにでるんだ」

「ふ〜ん、そうなんだ」

「うん。それじゃあ鈴さん」

「ちょっと待った！」

急に呼び止められた。

「なに？」

「加津佐、私の事は鈴と呼びなさい」

「なんで？」

「わ、わたしが加津佐って呼んで、加津佐がわたしのこと鈴さんって呼ぶのよ！　なんかおかしいでしょ。だから鈴でいいわ」

「わかった。じゃあ」

また、鈴って呼べるんだ俺。ハ加津佐、近づきすぎはダメ  
わかってる。ドアを閉めてランニングに出た。

それから30分後部屋に戻り、一夏達とアリーナに向かう

<アリーナの中>

「しかし、すごいなこりゃ」

今、敵に来られたらシャレにならない。ハ大丈夫。ヾ

そうか

「三年にはスカウト、二年には一年間の結果を確認にそれぞれ人が  
来ているからね。」

一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント  
上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

一夏、一余お前も入ってたぞ。

「それより、俺と組む人は……」

「そいやー加津佐って結局誰と組むの？」

シャルル、俺に聞かれても困るよ。

「分からん。それより準備しようぜ」

<ISSのスーツの着替え室>

「一夏はボーデビッツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「一夏、感情的になるなよ。絶対に」

「（加津佐、貴方の体は、もう普通の人間とは違う領域にあるのよ）」

「ん？ 何か言ったか？ （何も）」

「変なの」

「ああ、わかってる」

ペアを組むと決まってからこっち、同室であることも手伝って、俺とシャルルはかなり親しくなった。

大体一夏はシャルルの気持分かってんのかな？ （多分、わかって

ない」

「一夏、それあんまり面白くないよ」

「うっ……。そ、そうか」

この、シャルルはお笑いに辛口評論家なのだ。

「さて、俺の準備はできたぞ」

「こっちも終わった」

「僕は大丈夫だよ」

俺達はISスーツに着替えは済んでいる。俺はIS装着前の最終チェック。シャルルは相変わらずの男性用スーツ

ISのチェック終わってるか？　「ハッチリ！」

よし、これで戦える。俺は織斑先生に対戦中は、TORAIARUを使うと言われた。そりゃ当然だな

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

俺、誰と組むんだろう？

「一年の部、Aブロック一回戦一組なんて運がいいよな」

「え、どうして？」



「何故だ？」

「持ち時間に色々考えなくても済むだろ。」

「そういうことが」

「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒す事になるから、ちよっと考えがマイナスに入っていたかも」

なんともシャルルらしい考え方だ。この一見正反対の俺たちだからこそ、馬が合うのかもしれない。

「あ、対戦表が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わった。俺もそれまでの思考は一旦停止して、そこに表示される文字を食い入れるように見つめた。

「え？」「」

どうしたんだ？俺もモニターを見ると、対戦相手の文字を見てびっくりした。一回戦一夏の相手は、ラウラと筈だった。

俺も……葵？俺と組む相手の名前は葵って人らしい。

<  
>

「……………」

「……………」

「よかったな一夏、お前の願いが叶ったみたいだぞ。じゃ俺一回戦行くから」

「おう」

「頑張つてね」

ふたりのそばから離れ俺と組む相手の所に向かった。

確かここだよな。

「ここに葵さんって人いる？」

「あ、私だけど、貴方が加津佐くん？」

「加津佐でいいよ」

「私も葵でいいよ」

この人と話していると辺りからいいな〜とか変わって欲しいって言う声が聞えてきた。

「ISの特性を教えてください？」

「ほとんど接近です」

接近か……この人の実力も見たいし。先に特攻させてみよう

「分かった。俺が後ろで援護するから前よろしくね」

「はい」

そして、俺の一回戦が始まった。一回戦の相手の名前は確か・・・  
シャーリーさんとクリスさんか、どんな人たちだろう？

俺と葵は、ISを展開してピットを出た。葵はそのまま出て行った。  
もしかして、俺がいつも言ってる言葉って無意味？ ふいふと思う  
よ

まいいや

「奇跡 加津佐、アルファ行きます！」

バレルロールをしながらピットを出てアリーナへ

観客の皆が驚いていた。多分俺がここに入るからだと思うな。

何故なら男でISを動かせるのは、織斑 一夏しか皆は知らない。  
俺の事は公表していないのだ。

ブザー鳴り響くと同時に『試合開始！』

クリスさんが動いてきた。射撃タイプ。ライフルか・・・葵、上手  
くやってるかな

俺はビットをシールドモードにして防ぎながら葵の戦いを見た。

ガキンッ！ ガキンッ！ ガキンッ！ 凄いなあの動き へ加津佐、

前に集中接近してきてる」

こっちもそろそろ行くか、接近ブレード極光を出し接近

「なに！？ 接近！？」

ビット使っているからてつきり射撃かと思っていたのに

ダンドンダンッ！ ヤッパリ射撃だと近くに行きにくい。ビット、  
回して」

練習にもなるしいいかな。再びビットをフリアに預けた。

「嘘！？ ビットを動かしながら、接近ってそんなの無理な筈なの  
に！？」

ライフルの弾を全て切り落とし、接近して

「楽しかったよ。ありがとう」

連続で斬り、シールドエネルギーをゼロにした。葵、大丈夫かな？  
上を見ると……シールドエネルギーゼロ

「え」

「ごめん。負けた」

「貴方が加津佐くんね。ここで終わりにしましょ」

「ですね」

この人のISS・・・ライフルと刀!? そんなのアリかよ? ムア  
リ

ビット、頼んだム了解

再び接近して、極光を振り降ろす。だが ガキンツ!

ライフルで受け止めた! そうか、ライフルは、ほとんど使わない  
んでガードに使ってるんだ。

ガキイイイン! 強いこの人! ム加津佐

フリーア、手を出さないでくれ、真面目に戦いたいム分かった

よし、行くぞ! 瞬間加速をして接近、

「残念はずれ」

シャーリーさんが刀を振り下ろした

「そんな!?!」

俺はビットを分身代わりにして、後ろに回り極光を振り下ろした。  
シャーリーさんのシールドエネルギーゼロ。

ブザーが鳴り響く『勝者、加津佐&葵ペアの勝ち』

「加津佐って強いね」

「弱いよ。俺の目標は。織斑 千冬さんだから」

「そうなんだ。」

「そうだ」

俺はシャーリーさんとクリスさんの傍に行き

「いい勝負だった。ありがとう」

「いいよーでも加津佐くんって強いね」

「だから、弱いです。後、俺の事は加津佐でいいですよ」

「「わかりました」」

ふたりと握手をして、アリーナを出た。

<  
>

「加津佐、お疲れ」

「おっ」

「加津佐、凄いよーあんな避け方するなんて」

シャルル、あれはね咄嗟に思いついたんです。『作戦じゃないの?』

うん。ほんとーか八かだった。

「今度は一夏達の番だな。頑張れよ」

「うん」

「おう。任せとけ」

心配だ。一夏って、感情的になりやすいから、ひそれなら、加津佐も  
でしよひ

「ごもつとまで」

ファインド・アウド・マイ・マインド前編（後書き）

次回ファインド・アウド・マイ・マインド後編

今回は、ラウラ&箒VS一夏&シャルルです。見てください

これから、サブタイトルが変わるのでよろしくお願いします。

感想お願いします



フアィンド・アウド・マイ・マィンド後編 (前書き)

見てください。疲れた。

## ファインド・アウド・マイ・マインド後編

<  
>

「一回戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃああなたによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一 開始。

「叩きのめす」

俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

試合開始と同時に瞬間加速を行う。この一手に目が入れば戦況はこちらの有利に大きく傾く。

「おおおっ!」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。

来る。

俺はラウラと直接戦った鈴とセシリアの意見を聞いていたときのことを思い浮かべた。

『AIC? なんだそれ?』

『シユバルツエア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力』

『ふうん』

『ちなみに一夏さん、PICはご存知ですよね?』

『……知らん』

『あ、あのね……。基本でしょうが、基本! 全てのISはこのパッシブ・いなシャル・キャンセラーによって浮遊、加速、停止のをしてんの!』

『おお、どこかで聞いたことがあると思ったらそれか』

『あんだねえ……』

『はいはい、漫才はそこまでにして、対策を考えますわよ……。正直、わたくしも実物を見るのは初めてでしたが、あそこまでの完成度を誇っているとは思ってもみませんでした』

『あー、それはあたしも同意見。あそこまで衝撃砲と相性が悪いとはね……』

『一夏、対策方法なら、一番分かりやすいものがあるぞ』

『加津佐、それなんだ?』

みんなが加津佐に同時に聞いた

『まずは一夏が接近する』

『それじゃあ、先に一夏が潰されちゃうよ』

『さて、ここからだ。シャルルは射撃タイプだから、一夏が停止している間に後ろからラウラを撃つんだ！』

『でも、ラウラのペア はどうするんだ？』

『先にシャルルに敲かせて、一夏はそれまで動き回る』

『それしか、ないね』

同時に言う。俺このとき少し傷ついた。だっそうだろ

結局、慣性停止能力を破る方法は、加津佐が言ったこれしかなかった。

「くっ………!!」

「後ろの奴が先に我のパートナーを潰し後でこちらに来るか、そしてお前は戦制攻撃か。わかりやすいな」

「………そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ああ、わかりたくないが、想像はつく。ガキンッ！ と巨大なりボ

ルバーの回転音が轟き、百式のハイパーセンサーが警告を発する。

『敵ISの大型レール砲の安全装置解除を確認、初弾装填　　警告！  
警告！　　警告！』

慌てるなよ。何も一体一つて訳じゃないんだ。　　？

「させないよ」

シャルルが俺の頭の上を飛び越え現れる。同時にアサルトカノン《ガラム》による爆破弾の射撃を浴びせた。

「ちっ………！」

肩のカノンを射撃ですらされ、俺へ向けて放った砲弾を空を切る。さらにたたみかけてくるシャルルの攻撃に、ラウラは急後退をして間合いを取った。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へと移り、左手にアサルトライフルを呼びだす。光の糸が虚空で集まり、一秒とからず銃を形成した。

これこそがシャルルの得意とする技能『高速切替』である。事前呼び出しを必要としない、戦闘を平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。

それはシャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそ光る。

「私を忘れてもらっては困る」

ラウラへの追撃を守るように打鉄を纏った箒が現れる。

< 加津佐 >

一夏、強くなったな。箒の奴も上手くガードに回ったな。

大丈夫だな、VTシステムは、  
「そうね」

「生命体は大丈夫か？」

「反応がないので大丈夫だと思う」

「そうか」

モニターを見直す。

< 一夏 & シャルル視点 >

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないとな！」

ラウラのAICから開放された俺はすぐさまシャルルの背中へと瞬間加速。ぶつかる瞬間、くるとシャルルが宙返りをしてお互いの場所を入れ替えた。

このコンビネーションは特訓の賜物だと言える。

ガキンッ!

俺と箒、互いの接近ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。

俺は箒の刀を何回となく打ち合いながら、スラスター出力を上げた。

「くっ! このっ……!」

押され続けたことに焦れた箒が大きく刀を頭上に振りかぶる。

「ここだ!

「シャルル!」

「うん!」

ギイインッ! 左手を構え、真横にした《雪片弐型》で俺は箒の  
撃を止める。

「!?!」

ふつと突然目の前の箒が消える。ショットガンの連射はむなしく空  
を切った。      なんだ? なにが起きたんだ?

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードの  
つが箒のもとへと伸びていて、アリーナ端まで箒を投げ飛ばすラウ  
ラ。

どうやらさっきの緊急回避はこのワイヤーブレードによる牽引だったらしい。

「なっ、何をする！」

しかし、味方を助けたとはほど遠いラウラの行動は、本当にただ邪魔だからどかしたというだけだったようだ。

「数の差では私が有利だな」

「たかが二倍じゃねえか！」

そう言ってみたものの、このラウラ・ボーデビッツヒの实力は確かに化け物じみている。

今現在こうして俺と接近戦を繰り広げながら、同時にワイヤーブレードを操作してシャルルを牽制、俺から引き相手をしてる。

さすがに六つ同時には操っていないものの、上手く順番に射出と回収を行って連射による多角攻撃を繰り広げていた。

『シャルル、無事か？』

『一夏こそ。すぐにサポートに入るからね』

『いや、いい。このまま例の作戦で行こう』

『………わかった』



<加津佐視点>

「そろそろ、あの作戦に移るころかな。」

「あの作戦って？」

「まあ、見てればわかるよ。」

モニターを見ると……誰かがハッキングしてる。

俺は、ピットのモニタールームのキーボードをかたかたと打つ

「なにをしているの？」

「逆ハッキング。フリーア頼む。」

「はいはい。」

「これでどうぞだー！」

『あははは、かづくん成長したね〜〜〜』

この声とその顔は……東さんか。

「東さん、一体何をしてるんですか？」

『いつくんの試合見たくてさ〜あ〜』

それだけなら見に来てください。心の中で言う。

「それだけですか、用は？」

『え〜とね、箒ちゃんの専用機が完成しそうだからついでに連絡をね。ちーちゃんいないの？』

「はい」

箒の専用機できるんだ。どんなのだろう？

『これは、箒ちゃんにはないしよね。後かづくん、宇宙から何か降って来てそれを落としてるよね〜なんで？』

口に手を当てながら言う束さん。

何故束さんがそれを知っている？ …… 思いつく点は、ハツキングだな

「隕石がよく振ってくるんです」

『そうなんだ〜』

「それじゃ、切りますね」

『まっ……』

「なんで、通信切ったの？」

「監視室で織斑先生が見てる。」

ああ。

「そつだ！ シャルルのお父さんが来てるから」

アリーナと特別観客席に向かい

「貴方がデュノア社長ですね」

「そつだが君は加津佐くんではないか」

「話がしたいのですが」

「いいだろう」

俺はシャルルに関する事を全て話し、第三世代型ISの設計図を渡した、

「シャルルにもう命令はしないでください」

「何故そこまであれにこだわる」

「あれ、じゃない。シャルルは人間だ。もし向き合えないのならシャルルとの縁を切ってください」

「わかった。そのかわりこれのデータは貰う」

シャルルはこんな父親に育てられたなんて、

「いいでしょう。これで話は終わりです」

< 東視点 >

「もう、かづくつたら」

「東さま、どうかなされました？」

「やー、クーちゃん、なにもないよ」

耳を動かしながら東さまは言う。

「かづくん、私に隠し事はできないよ」

モニターを見ながら言った。そのモニターには、今まで加津佐が戦ったデータがでていた。かづくんの本当の専用機が完成に近付いているのにもう。

< 一夏視点 >

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ……!? バカにするな!」

ラウラの射程内から抜け出したシャルルはすぐさま箒へと間合いを

詰める。

ガギインツ！ 箒の刀を、シャルルは瞬時に呼び出した接近ブレード《ブレット・スライサー》で受け止める。

そしてそのまま左手の《レイン・オブ・サタデイ》が火を噴いた。

「くっ……！！」

射撃の印象が強いシャルルだが、とにかくにも能力の最大特徴は『器用さ』なのである。

格闘も人並み以上にこなす上、そこへあの『高速切替』。近くに行けば接近射撃、間合いを取れば射撃一筋。

「先に片方を潰す戦法か。無意味だな」

ラウラははなから箒を数にいれてないのだろう。けれど、俺たちにとっては意味がある。

とにかく、俺の役目はシャルルが箒を撃破するまでの間、ラウラの攻撃を一人で耐え凌ぐことだ。

両手のプラズマ手刀＋ワイヤーブレードの波状攻撃。これらを捌ききるのは容易いことではない。

けれど、少しでも油断すれば撃破される。

「貴様の武器はそのブレードのみ。接近戦でなければダメージを与えられないからな」

それもある。だが、それ以上に離ればあの大型カノンの的だ。しかしワイヤーブレードがある以上、一度距離を取られるとそれを取り戻すのにまた時間とエネルギーが奪われる。

(とにかく、意地でも食らいつく！)

俺は《雪片式型》を右に任せて、左手はラウラのプラズマ手刀その自体を払うのに使っていた。両足はワイヤーブレード蹴るのにフル稼働だ。

「うおおおっ！」

ギンツ！ ガインツ！ ガツ！ ガギンツ！

ゼロ距離の高速格闘戦。いつかは途切れてしまうのであろう集中力を、シャルルを信じて必死に繋ぎ止める。

「……そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除する。

まずい！

刹那、ピシッ！ と凍り付いたかのように俺の体が止まった。ラウラは両手を交差して突き出し、その手のひらを俺に向けている。

(くそっ！ AICか！)

「では 消える」

六つのワイヤーブレードが一斉に射出、俺へと突き進んでくる。

「くそおおっ！」

呼びもむなしく、ワイヤーブレードに全身が切り刻まれる。IS装

甲の三分の一を持って行かれた。その上、シールドエネルギーも一  
気に半分近くが失われた。  
さらにラウラの攻撃はそれだけでは終わらず、俺の右手をワイヤー  
ブレード二本がかりで拘束、ねじ切るように回転を加えながら、地  
面へと俺を叩き付けた。

「がはっ！」

相殺しきれなかった衝撃が背中から突き抜け、呼吸が一瞬詰まる。

すぐに体勢を立て直さなくては！

そう思った俺が目にしたのは、ラウラの大型レールカノンが照準を  
合わせ終えたところだった。

「とどめだ」

ドンッ

！

やけにゆっくりと見える。砲口から瞬間的にあふれ出た炎を纏い、  
それを突き破りながら進んでくる砲弾。しかもそれは対ISAーマ  
ー用特殊徹甲弾だ。

当たり所が悪ければ一発で勝負がつくほどのシロモノ。それが今ま  
さに俺目指して突き進んでくる。

（回避は間に合わない！それなら……斬る！）

やれるかどうかではない。やらなければ終わりなのだ。俺は右手に  
力を込めて振り上げ

「!?!」

がくん、と右手の動きが止まる。

(さっきのワイヤーブレードがまだ残っていたのか!)

一本だけだったが、それが百式の俺の手に絡みついてすぐには取れ  
そうもない。

ああ、ちくしょう!

「お待たせ!」

ガギンツ! と重い音を響かせてシャルルがの盾が砲弾を防ぐ。そ  
してすぐさまワイヤーブレードを切断、俺の腕を引いてその場から  
離れる。

直後、俺がいた場所は砲弾の雨で吹き飛んだ。

「シャルル……助かったぜ。ありがとうよ」

「どういたしまして」

「箒は?」

「お休み中」

そう言っついつと視線を向けるシャルルの方を向くと、アリーナ  
の端ではシールドエネルギー残り残量0、IS各部損傷の箒が膝を  
ついていた。



「さすがだな」

「その言葉はこの試合に勝ってから、ね」

両手に持っていたアサルトライフルを捨てて、シャルルは新たな武装を呼び出す。ショットガンとマシンガンがそれぞれ形を成した。

「ここからが本番だね」

「ああ。見せてやることにしようぜ、俺たちのコンビネーションをな」

<モニター監視室>

ん・・・加津佐か、誰と話しているんだ？ 後で聞いてみるか

「ふあー、すごいですねえ。2週間ちよつとの訓練であそこまで連携が取れるなんて」

教師が入ることを許されている監視室で、モニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は感心したようにつぶやく。

「やっぱり織斑君って凄いです。才能ありますよね」

「ふん。あれではデュノアが合わせているから成り立つんだ。あい

「自身は大して役に立っていない」

身内にはあいかわらず辛口評価しかしない千冬に、真耶はやや苦笑気味に言う。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。」

「まあ……そうかもしれない」

ぶすつとした感じで告げる千冬だったが、真耶はそれが照れ隠しなんだと最近わかったので、別段気にはしない。  
「それどころか『やっぱり弟さん想いだなあ』としみじみ思う。」

「それにしても学年別トーナメントのいきなり形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

先月の事件      黒い全身装甲IS……加津佐のおかげで助かった。

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実戦的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったのだろう」

「でも一年生は入学してまだ三カ月ですよ？戦争がおこるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要ない気がします……」

真耶お前の言う事ももっともだが、これまでの間、加津佐が戦っていたおかげで平和であるんだ。

「そこで先月の事件がでてくるのさ。特に今年の新入生には第三世代型兵器のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対者が現れたら、何を心配すべきだ？」

「あ！　つまり、自衛のため、ですね」

「そつだ。操縦者はもちろん、第三世代型兵器を積んだISも守らなくてはいけない。しかし教師の数にも有限である以上、それらは自分で守るしかない。そのための実戦経験なのさ」

「はあ、なるほどなるほど」

真耶は、疑問氷解とばかりにうなずく。

<加津佐視点>

今はピットでカタカタとキーボードを打っている。俺の知らない事が多すぎる。

世界各国のデータを収集中。

一夏、大丈夫かなハ大丈夫

その自信はどこから？　ハ予測です

予測かい！　はあハこいつはあんまり当てにならない

でも、もし宇宙生命体と他の誰かが戦ったら……ないない。

そんなこと絶対にさせない。

よし、データ収集完了。

モニターを見直した時、

「・・・あれは!？」  
「加津佐急いでVTシステムが起動してる」  
「なんで！」

「くっ・・・!!」

ピットルームを出て、発進準備をする。

「加津佐、発進OK」

「奇跡 加津佐、アルファいきます」

< 夏視点 >

「ぐっぐっ・・・!!」

パイルバンカ を叩きこむシャルル。ラウラのシールドエネルギーはごっそり持って行かれた。

(こんな・・・こんなところで負けるのか、私は)・・・!!

確か相手の力量を見誤った。それに間違えようのないミスだ。しか

し、それでも

(私は負けられない！ 負けるわけにはいかない……！)

最初につけられた記号は 遺伝子強化試験体C・〇〇三七。

暗い。暗い闇の中に私はいた。

そして教官との思いでを思い出す。

「どうしてそこまで強いのですか？ どうすれば強くなれますか？」

その時 ああ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどういつものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいのさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるなら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。

あいつに

優しい笑み、どこか気恥かしそうな表情、それ

(それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに)

だから 許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてします弟、それは認められない。認めるわけにはいかない。

だから

(敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると!)

ならば こんなところで負けるわけにはいかない。あの男を、あれは、まだ動いているのだ。

動かなくなるまで、完璧に壊さなくてはならない。そうだ。そのためには

(力が欲しい)

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。

そしてそいつは言った。

「願うか……? 汝、自ら変革を望むか……? より強い力を欲するか……?」

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など空っぽの私など、何から何までくれてやる!

だから、力を……最強の力を、唯一無二の絶対的な力を

私によこせ！

D a m a g e L e v e l . . . . . D

M i n d C o n d i t i o n . . . . . U p l i f t

C e r t i f i c a t i o n . . . . . C l e a r .

o t .  
《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 . . . . . b o

<  
>

「あああああつ！！！！！！」

突然、ラウラの身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシユバルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、シャルルの体を吹き飛ばす。

「一夏、今すぐシャルルとここを離れる！」

いきなり声をする方向を向くと加津佐がISを装着して来ていた。

「ぐっ！ 一体何が……。 !?」

「なっ」

くそ間に合わなかった。

通信回線から誰かが俺を呼んでいた。

「織斑先生」

「一体何が起きている!?!」

「VTシステムしってますか?」

「ああ、そのシステムを危険だからISに組み込む事を禁じられていた物だろ」

「そのシステムがラウラのISに入ってるんです」

「なに!?!」

「すみません。話しはここまでです。今すぐ皆を安全な場所に避難させてください。」

「夏もシャルルも目を疑った。その視線の先では、ラウラが……  
・そのISが変形していた。」

「なんだよ、あれは……加津佐、お前何か知ってるのか!?!」

「今さがれ!」

俺の目を……嘘だろ。

ラウラのISの変形後の手に持っている武器は……



「『《雪片》……!」

俺と一夏の言葉が重なった。

千冬姉のかつて振るった刀。それに酷似していた。似ているというレベルではない、まるで複製だ。

俺は無意識のうちに《雪片式型》を握りしめ、構えた。

ヤバイ。一夏の奴

「!」

刹那、黒いISが俺の懐に飛び込んでくる。

「ぐうっ!」

構えた《雪片式型》が弾かれる。そして敵はそのまま上段の構えへと移る。これは　　まずい!

「!」

一夏を一直線に落とすように鋭い斬撃が一夏に襲いかかる。刀で受けることはできない、それはもう間に合わない。

「……がどうした……」

けれど今の一夏には　　どうでもいい

「それがどうしたああっ！」

激しい怒りに突き動かされて、俺は握りしめた拳を武器に黒いISへと駆けていく。

許さねえ。許さねえ。許さねえっ！

「うおおおおっ！」

拳が黒ISに触れる直前で、俺の体がぐんと逆方向へ引つ張られる。俺を引き戻したのは、ISを装着している。加津佐と筈だった。

「一夏、落ち着け！」

「馬鹿者！ 何をしている！ 死ぬ気か！？」

「離せ！ あいつ、ふざけやがって！ ぶっ飛ばしてやる！」

あの剣義は、俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だった。初めて見たときのことを今でも正確に思い出せる。

『いいか、一夏。刀は振るものだ。振られるようでは、剣術とは言わない』

『重いだろう。それが、人の命を絶つ武器の、重さだ』

『この重さを振ること。それがどういう意味を持つのか、考える。それが強さということだ』

そう言った千冬姉は厳しく、けれどどこか優しげな眼差しをしていた。

「どけよ、箒！加津佐！ 邪魔するならお前らも」

「っ！ いい加減にしろ！」

バシーン！ と頬を思いつきりひっぱたかれた、俺は飛びだそうとしていた体勢も災いして横に向きに転ぶ。

「なんだというのだ！ わかるように説明しろ！」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

「一夏、お前いつもいつも千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、わけわかんねえ力に振り回されているラウラの気にいらねえ。ISとラウラ、どっちとも一発ぶんっ叩いてやらないと気がすまねえ」

力は強さは、攻撃力じゃない。そんなもの強さとは言わない。ただの暴力だ。

「とにかく、俺はあいつをぶん殴る。そのためにはまず正気に戻してからだ」

「理由はわかったが、今のお前に何が出来る。百式のエネルギーも残ってない状態で、どう戦う？」

「ぐっ！」

加津佐の意見ももつともだ。あの黒いISもさほどエネルギーは残っていないだろう。一撃でも叩き込めれば・・

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止！ 状況レベルDと確定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況はすぐに解決する。」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「そうだ」

確かに筈は正しい。理論整然としている。けれど、俺は――拒否する。

多分、あれは織斑先生以外止められないな。後は一夏にかけてみるか

「違うぜ筈。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか

大体、ここで引いちゃったならそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない。」

「ええい、馬鹿者が！ ならばどうするっていうのだ！ エネルギーはどのみち」

「無いなら他から持ってくればいい。だろシャルル」

「シャルル……?」

加津佐、もしかして僕のISの事全部しってるの?

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う。」

「本当か! だったら頼む! 早速やってくれ!」

俺のISでも出来るんだけどね。{酷いです。}

言うな

「けど!」

ぴしっとシャルルが俺に指を指して言う。

「けど、約束して。絶対に負けないって!」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通ってね」

「あ、俺も見たい」

「加津佐! うっ……! い、いいぜ? なにせ負けないからな」

一夏、負ける ! {加津佐、本当に酷い}

「じゃあ、始めるよ。……リヴァイブのコア・バイパス開放。エネルギー流出を許可。」

一夏、百式のモードを一つに制限して。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

リヴァイブから伸びたケーブルはガントレット状態の百式に繋がれ、そこにエネルギーが流れ込んでくる。

（これは……初めてISを動かしたときと同じ感じた……）

まるでずっと昔から知っているかのような、不思議な一体感と懐かしさ。

「……」

これがなんなのか、とりあえず今はいい。それよりも目の前のことだ。

「完了。リヴァイブのエネルギーは残量全部渡したよ」

その言葉の通り、シャルルの体からリヴァイブが光の粒子となって消える。

「やっぱり武器と右腕が限界だね」

「充分さ」

こりゃ、一夏、勝ったな。はぁ見たかったな。一夏の女子の服姿  
ひそつぞうしただけで気持ち悪い」

面白いからいいの。って何度言ったこの言葉？

「い、一夏っ！」

「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！ 私はお前が

「信じる」

「え？」

「俺を信じるよ、篤。心配も祈りも不要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

「負ける 一夏」

なんてこった加津佐の奴

「じゃあ、行ってくる」

「あ、ああ！ 勝ってこい、一夏！」

箒に約束をして、俺は目の前の相手へと向かう

「じゃあ、行くぜ偽物野郎」

俺の右手、そこに握りしめた《雪片二型》が意志に呼応して刀身を開く。

「零落白夜 起動」

さてと一夏の力が見れるのはここからだ。頑張れよ一夏

(ありがとよ、百式。じゃあ 行くぜ！)

「……………」

黒いISが刀を振り下ろす。それは千冬姉と同じ、速く鋭い袈裟斬り。けれど、そこには千冬姉の意志がない。ならばそれは

「ただの真似事だ」

ギンツ！ 受け止めた一夏はそのまま零落白夜を振り下ろした。

「ぎぎぎ……ガ……」

ジジツ……………紫電が走り、黒いISが真っ二つに割れる。

ああ、一夏が勝った。ハ勝って欲しかったんでしょ」



まあな

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

力を失って倒れるラウラ。一夏がラウラをかかえてピットに向かうとした時

ドカーーンッ！ 第三アリーナの遮断バリアーが壊された

「なんだ!？」

「なに!？」

「なんだ!？」

俺と篝、一夏、シャルルは同時に降りて来たものを見る。

まさか

目の前には、ラウラの消えかかったISが再び集まり

「そんな!？ 何でお前が」  
「加津佐、あれは前に戦った生命体」

「うわおおっ!」

加速して極光を振り下ろす。

ギンッ!

「人間、殺す」

何を言っている？　「急いでまだ、箒と一夏、シャルル、ラウラが残ってる。」

「くそおおおおお」

回転して蹴りを入れるがガキンツ！　足を掴まれアリーナの端に飛ばされる。

ド　ンツ！　すごい勢いで加津佐が投げ飛ばされた。

「あの野郎、フリアビットを頼む。皆を守ってくれ」

「了解」

起きあがった時、箒に向けて大型カノン方が向けられていた。

「前みたいに……そうやって……やれると思うな

「！！！」

加津佐の中に眠る　「が再び壊れる。」　「加津佐の本当の力」

瞬間加速して箒のもとへ

「え？」

「箒！」

大声で叫ぶ一夏

大型カノン砲が撃たれた。

ギンツ！ 撃たれた弾丸を加津佐、斬る。

「貴様、一体」

俺の目を疑った。あれは千冬姉の構え。そうか加津佐も教えてもらってたって言うってたな

「消える！」

その一言とともにラウラのISは細切れになった。一体何が起きたのかわからない

「そう……か貴様が

」

ドン。光の粒子となって消えるラウラのIS

「これで終わった。」

さすがに疲れたな。着地して篝のところへ

「大丈夫だった？」

「うん」

加津佐の顔をみた一夏は、ヤッパリ目の色が変わってる

俺たちは保健室にラウラを運んだ。

<保健室>

「教官は惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め。後で加津佐にも礼を言っておけよ。」

ニヤリとした顔で言われて、ますます落ち着かなくなる。

織斑 一夏と奇跡 加津佐が惚れてしまいそうだ

次回シャルルとお風呂

ファインド・アウド・マイ・マインド後編 (後書き)

次回シャルルとお風呂

予告 一夏 ……と叫ぶ鈴

そして加津佐さん！ と叫ぶセシリア

え！ 俺？ うわああああ

シグマとは、自分の限界をこえるための能力です。

シャルルとお風呂（前書き）

疲れた。見てください

## シャルルとお風呂

『トーナメント事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指票と関係するため、全ての一回戦は行います。』

そして、驚く事にIS学園にもう一人ISに男で乗れる人がいました。名前は……あ、ありました。奇跡 加津佐という少年です。』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺はラーメンを食べながら見ていたので、洋画劇場が終わってもずるずるとしていた。麺的な意味で。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがとう」

「はあ~~~~」

隣で加津佐はため息をついていた。

「どうした？」

と一夏が聞いてくる

「有名人になった。もうやだ」

「そんな事が、二、三日でなれる」

「無理」

即答だな

あ！ そうだ！ シャルルに見せる物があった

とりあはず晩飯を食べてから、ということであれは夕食優先でテーブルに着いた。

「ふー、ごちそうさま。学食はいい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまいくて幸せだ。……ん？」

何故だか知らないが、さっきまで俺たちの食事が終わるのを今か今かと心持ちにしていた女子一同が酷く落ち込んでいる。

「……優勝……チャンス……消え……」

「……交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

バタバタと数十名が泣きながら走り去っていった。な、なんだなんだ？

「どうしたんだろっね？」

「さあ……？」



俺とシャルルはチンプンカンブンだった。

一夏が筈のところへ行つた後

「そつだ！ シャルル」

「なに？ 加津佐」

「これ」

紙をシャルルに渡した

「………え」

笑いながら加津佐は、僕の方を見る

「どつして……？」

口を押さえられた。

「これでシャルルは自由だ。名前は好きな方を使って」

そう。加津佐がくれたこれは、僕を自由にする書類だった。名前好きな方？

書類を見直すと『名前は自分で好きな方を選ぶ』

乗っている名前は奇跡とデュノアだった。

「ごめん。俺が書類にサインしたから俺の名前しかなくて、奇跡でもデュノアでもどっちで使っていたいから」

「うん」

加津佐、僕が女だって知っていたんだ。優しいな加津佐

話を終わり一夏を見ると……

……ば、バカ、ちょっとパンツ見えたぞ……  
ちなみに白だ。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

ずかずかと去っていく筈を視線で負うことも出来ず、俺はその場にくずおれる。

「一夏って、わざとやっているんじゃないかって思うときがあるよね」

「そうそう」

「な、なに？どついう意味だ」

「「さあね」」

同時に一夏に言う。俺とシャルル

でも、本当に今日の敵は、危なかった。倒したと思っていたのにまさか、また来るとは「ごめん。私のミスで」

気にするな。それよりお前俺の中で何かしたか？　「うんうん、何もしてない」

なんだろうな。前の時も俺の中で何か壊れるって感じがしたのが気のせいか

「……ちょっと待てよ。そいや、一夏、なんで生命体の事覚えている？」　「消すの失敗したんじゃないの」

そうだといいけど。確かに消した筈なのにな、これでまた平和な生活が帰ってくるからいいかな

俺がフリアと話している

「あ、織斑君、デュノア君、加津佐君。ここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からあいつた地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と胸を振る山田先生。またあの大きな膨らみが重たげにゆさつと揺れた。俺はまた目のやり場に困って、ついつい顔をそむけてしまう。

「一夏のスケベ」

「一夏、変態」

ぼそつとしたつぶやきがだったが、俺には確かに聞えた。

「な、なにっ？ ちょっと待てシャルル、加津佐！ それは誤解だ  
！」

「ふん。どうだか」

ああもう、どうしてこんなにシャルルは機嫌が悪いんだ？ しかも  
加津佐は後ろで笑ってるし。この後覚えてろ

「？ どうかしました？」

「い、いえいえ。なんでもないです」

「そうですね。それよりも朗報です！」

グツと山田先生が両手拳を握り閉めガッツポーズ。またしても胸の  
膨らみが揺れた。

……うつつ。眼福なんだが目に毒だ。

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁  
です！」

「おお！ そうなんですか！？ てつきり来月からなるものか  
とばかり」

って事は、まずい俺は避難しよう！加津佐、最低！

違う。これは一夏の為だ。俺は無実だ

!!!。

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もともと生徒たちが使えない日なんです。

でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使つてもらおうつて計らいなんですよー」

なんとなんという、なんということだ！ 素晴らしい、またしてもトラブル続きだったトーナメントは疲れを湯船でしっかり落としたと思つていたところだったのだ。

「ありがとうございます、山田先生！」

感動のあまり山田先生の手を握りしめてしまう。

「あ、あのっ、そんなに近づかれると、先生ちょっと困りますというか、その……」

「はいっ？」

「い、いえっ！ なんでもありません！ なんでもありませんよ？」

なぜあろうか、山田先生が落ち着かなさそうな視線をさまよわせている。前に相手の目を見て話さないとダメですよ！

「あー……コホンコホンッ！」

シャルルが咳払いをして話しに区切りをつける。

ナイスだ。シャルル！　　「加津佐が風呂に入らずどうするの？」

シャワーで十分。てか、女子と風呂に入りたくない。目のやり場に困る。　　「一夏は」

別にいいの

「と、ともかくですね。さんには早速お風呂にどうぞ。今日の疲れも肩まで遣って百数えたらスッキリ！　　ですよ」

「はい！　　じゃあ早速、風呂に　　あ」

勢いよく返事をしたから、あることに気がついた。

確か山田先生はこう言ったのだ。『さんには早速お風呂にどうぞ』  
。『さんになん』……というの間違いなく、俺とシャルルと加津佐のことだ。

シャルルはいまのところまだ男子で通しているのだ。

まずいぞ、加津佐はシャルルが女だとしらないし、しかも別々に入るなんて不自然だし、なにより無理を通しての大浴場なのだ。

「え、えーと……」

「どうしたんですか？　　ほらほら、さんにともはやく着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、大浴場前で待っていますから、後加津佐君織斑先生が……」

「どうぞ」

俺はUSBメモリーを渡した。

「今日の資料が入ってます。後、俺は今日は疲れたのでシャワー浴びて寝ます。それじゃ」

すたすたと歩いて加津佐はどこかに行った。

おっとそのまえに

「シャルルもし……………をするんだ」

「え!？」

「じゃあ」

「あ、加津佐君……………」

どうする？加津佐は自分の部屋でシャワー。何とかここは大丈夫だ。  
問題は

「……………シャルル」

「う、うん。困った……………ね。どうしよう。と、とりあわず、  
着替えを取りに部屋に戻るうか」

「おう……………。何かしらの対策が思いつくのを天に委ねよう」

以心伝心      とうか伝わって当たり前か。

そして

「あ、来てしまったね。それじゃあどつぞど！ 一番風呂ですよ！」

「ど、どつぞも」

そのこの加津佐は

<加津佐視点>

楽しいぞこれは、きっと、加津佐、酷いね本当に

いいんだ。一夏へのサービスだ。

とフリアと話していると目の前に箸がいた

「加津佐」

「なに？」

モジモジしてる。何かあったのかな？

「今日は助けてくれてありがとうと……これ」

箸から弁当を貰った。え？ へよかったね

まてー……！ 考えるどこで間違えた。……『大丈夫か』

……あれか



「ありがとう」

すたすたと走ってどこかに行った。まあいいや、部屋に帰って食べよう。

部屋に戻ると………寝てるよ。速くないか？ ベッドで鈴が寝ております。静かにね

弁当を開けて食べた。美味い、美味いぞこれ

前はセシリアの弁当食べて死にかけたからな

「よし、シャワー浴びてISの調整して寝るか」

「お疲れ様」

俺はシャワーを浴びた。

そのころ一夏は

<一夏&シャルル視点>

来ました！ 沈黙タ イム。

「……………」

「……………」

いかん。いかんぞこれは。俺は風呂に入りたい。しかしさすがにシ

ヤルルと一緒にというわけにはいかん。

一度その……は、裸を見てしまっているがそれとこれは別なのだ。当たり前だが、年頃の女子がみだらに男に肌を晒すものではない。

「えーと……シャルル？」

「はっ、はいっ!？」

なんで敬語? まあ、いいや。

取りあはず顔を合わせて会話する。

「シャルルも今日は疲れたろ? 風呂に入ってこいよ。俺はここで時間潰してから、頃合いを見て部屋に戻る」

「え? 一夏はどうするの?」

「一緒に入るわけにもいかないだろ。まあ、そういうことだから、シャルルはゆっくりしてきてくれ。俺は部屋のシャワーで我慢するさ」

男は黙って我慢の子。ちょっと待てよ……おかしいぞこれは、加津佐は何故来ない?

まで、今俺の頭が加津佐は何かを企んでいると言っている。

……そんなわけないか!

「い、いいよ。それなら僕がここで待ってる。その……お風呂ってそんなに好きじゃないし。でも一夏は好きなんだよね?」

加津佐が言っていた事、実行……しようか……な

「好きだ!」

そりゃあもちろん!

俺は食事と風呂ならギリで風呂に軍配がある。食事に料理をプラスするならまた話しは別なんだが  
って、あれ? なんでシャルルは真っ赤になってんだ?

「どづした?」

「ど、どうも!? と、とにかくっ、一夏はお風呂にどづぞ! 僕  
のことは気にしないでいいから、ね?」

「……いいのか?」

「う、うん」

「じゃあ入る! シャルル、サンキュー! この恩はいつか返す  
!」

こうまで言ってくれてるのに断ると申し訳が立たない。

「じゃあ、入ってくる」

「う、うんっ。しゅっくじ」

加津佐が言った事できるかな僕に、でも頑張る。

一夏の為にも頑張る。

「うおー！」

広い！ とにかく広い！

大浴場は湯船大が一つにジェットとバブルのついた湯船中が二つ、  
加えて檜風呂が一つ。

さらばサウナ、全方位シャワー……嬉しくて涙が出そうだ。

いやあしかし気分が高まる。なにせこの風呂湯全部使いたい放題なのだ。

「まあ落ち着け。慌てるなんてはもらいが少ないってな。まずは体を流してからだ」

体を流してからだ、なんつって。

「わはははは！」

大声だしても平気！だってここは大浴場なのだから（注・好いこの  
皆は真似しないでね）

そして全身を洗い終えて、俺は待望の湯船大へと身を入れる。

「ぶづううう……」

そのころシャルロットは

「大丈夫だ・・・よね」

鏡を見ながら自分に言い聞かせている。

そしてシャルロットは、一枚一枚上を脱いで行く。

頑張る。一夏の為に

服と下着を脱ぎ終えたシャルロットは、タオルを持つ浴場へ

カラカラカラ

(ん・・・今浴場の扉開いた音がしたような・・・)

「お、お邪魔します」

「!?!?」

なんと！なんと！まさか入ってきたのは・・・シャルル!?

一夏、奥の方に入るのかな？

「な、なっ、なあっ!?!?」

「・・・あ、あんまりみないで。一夏のえっち・・・」

「！ す、すまん！」

あああああ、なんで謝っているんだ！？

わからん！？ わからんが、謝ろう！

そしてすぐさま回れ右。ISクイックターン並みの反射と速度だった。すごいね人体。

「ど、ど、どうした？ どうしてここに？ いや確かに俺も入浴を勧めたけど、それは俺が入らない場合であってだな なぜどうして、やってきたよシャルルさん」

ああ、いかん。混乱している。それは自分でもわかっているんだが、収まりようがない。

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ………？」

加津佐はこう言えば大丈夫って言ってたよね。

「いやけしてそういうことではないが！」

イヤとかそういうのではない。強いて言うなら 困る。そう困るのだ。俺とて健全な男子十五歳。人並みに異性に興味はあるし、だから……

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなくて。 め、迷惑なら上がるよ？」

確かこれも言えば大丈夫って言ってたよね。加津佐話が速いからな  
~~~~~

「い、いやいや、上がるなら俺が上がるよ。もう堪能したし、それに」

「ま、待って」

急に大声で呼び止められ、俺は驚きもあつて言葉と動作を止めた。

「そ、その、話があるんだ。大事な事だから、一夏にも聞いてほしい……」

「わ、わかった……」

大事な話と言われれば、それは聞かない訳にはいかない。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前って言うと……もしかして、学園に残るって話か？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだつて思える居場所を見つけれないし、それに……」

「そ、それに？」

「……」

なぜか、返ってきたのは沈黙だった。急に会話が止まったことで、浴場全体がしーんと静まりかえっている。

ぴちゅーん。

「きゃあっ!?!」

「どどど、どうした!?!」

いきなりのかわいらしい叫び声に、俺自身の声までひっくり返ってしまっ。

「す、水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「そ、そうか……」

「……」

「……」

そしてまた沈黙が続く。天窓から落ちる雫が、妙に大きく感じられた。

ちやぷ……。

「? シャルル?」

湯船の中を動く水音が聞こえて、俺は反射的に発生源へと顔を向けてしまう。

「こ、こっち見ちゃダメ! あっち向いてて!」

「わ、悪い!」

湯気でおぼろげではあったが、さすがにこのメートルとない距離



だ。シャルルが確かにこっちに向かってきているのは見えた。

(な、何をする気なんだ？ いかん、のぼせてきたせいか頭がくらくらしってきた……)

ぴとっ……と、俺の背中にシャルルの手が触れてきた。

「じゃ、シャルル」

そのまま、手は俺を後ろから抱きしめる。

ちよ、ちよ!?!?

「一夏が、ここにいろって言ってくれたから。そんな一夏がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうか……」

俺にとってはなんでもないことだったのだが、もしそれがシャルルの助けになったというのなら嬉しいことだ。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……?」

「そう。僕のあり方。一夏が教えてくれたんだよ?」

加津佐がくれた自由。一夏が僕に教えてくれた。僕のあり方

「そ、そうだったか?」

「そうだよ。ふふっ、一夏って自分に関することはどこまでも鈍感だね。憎たらしいくらい」

「そ、それは……すまん」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？ ふたりのときだけでいいから」

「それが本当の……？」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルル いや、シャルロットが返事をした。それはまるで子供のような無邪気さで、あのいつもの屈託のない表情が相像できた。

「と、と、ところで、だな。あの、いつまでもこの体勢でいられると、正直色々とまずい事態が起こりうるんだが……」

さっきまで意識しなかったが、改めてくつついていることに気が向くと、背中に触れている確かな膨らみがどうしても気になって仕方がない。

「あ、ああっ、うん！ そうだねっ！ ぼ、僕、先に体と髪を洗っちゃうねー！」

シャルロットもやっと自分の状態を自覚したのか、ばしゃばしゃと慌てて水音を立てながら俺から離れ、そのまま湯船を上がる。

「こ、こつち覗いちゃダメだよ?」

「の、覗かねえよ……」

「……………。覗いてもいいのに……………」

何か最後につぶやいたような気がしたのだが、水音にかき消されてよく聞えなかった。

それから俺とシャルロットは交代で湯船に浸かり、のんびりたつぷり三分ほど満喫してから風呂場を出た。

もちろん、着替えは別々。シャルロットが先に上がって着替え、俺を待っていた。

男の着替えなんて一瞬だ。すぐに終わる。      ほら、終わった。

「じゃあ、戻るか」

「うん」

そう言って頷くシャルロットは、湯上りのせいだろうか頬を赤く染めていた。

それから部屋に帰り他愛もない話をしたあと、眠りについた。

<加津佐視点>

現在モニターを見ながらカタカタとキーボードを打っている。

でも、今回の敵厄介だったな。ISに取り付き操るか……何と  
してもそししなきゃな

もうフリーアは寝ている。疲れていたからな

「どうする？ 遮断バリアーの強度あげとくか……ダメだ。下  
手にいじると怒られるからな」

「加津佐」

ヘッドホンを付けながらキーボードを打っていたので鈴が起きてい  
る事に築かなかった。

鈴の手が俺のヘッドホンを取る

「加津佐って言うてんのよ！」

「わぁ！」

鈴がどなりびっくりして転んだ。

あれ、鈴起きてたんだ。

「どっしたの？」

「どっしたのじゃないわよ。もういいい」

また布団に入り、眠った。

なんだ！？ 一体？ もいいや

モニターの電源を切り眠りについた。

<東さん視点>

「んー…………、暇、暇あ」

ぱらりるぱらりるへるへる

ゴット・ファザーのテーマが流れる。新世紀をこえてもヤンキー御用達の名曲である。

「じ、この着信音はあ！ トウッ！」

大ジャンプ。もとい携帯電話にダイブである。がっしやんとマグカップにツールキットが激しく散らばる。東にとってはどうでもいい。すぐさま携帯電話を耳に当てる。

「も、もすもす？ 終日？」

「……………」

ぶつつ。

切れた。二重の意味で。

「わー、待つて待つて！」

束の願いが通じたのかはたまたまた神様のイタズラか、携帯電話再度鳴り響いた。ぱらりろぱらりろぺろく

「はい、みんなのアイドル・？ノ之束ここに　　待つて待つてえ！　ちーちゃん！」

「その名で呼ぶな」

「おっけえ、ちーちゃん！」

「……はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今日の件に一枚噛んでいるのか？」

「今回、今回　　はて？」

束は首をひねる。とぼけているのではなく、本当にわからない。

「VTシステムだ」

「ああ。あれ？　うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？」

私は完璧にして十全な？ノ之束だよ？　すなわち、作るのも完璧において十全でなければ意味がない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ていうか忘れていたけど、つい二時間ほど前にあれ作った研究所はもう地上から消えてもらっよ。・・・・・・・・ああ、言わなくてもわかっていると思うけど、死亡者ゼロね。」

赤子の手をひねるより簡単　ていうか、ちーちゃん、私に隠し事してない？」

「してない」

「そうなんだ！　よかつた〜」

加津佐が束に教えていいと言っまでは、言わない

「では、またな」

ぶつと電話が切れる。

「ちーちゃん、私に隠し事はできないよ。でも、ちーちゃんの声が聞けて嬉しいよ」

ちやらら〜　ちやらら〜　あんたら全員、覚悟しいや。バキユーンバキユーン！　ぐあああつ！　ああつ、兄貴っ兄貴い！　おっだらあ、タマあとつたらんかあ！

あり得ない着信音が鳴り響いた。

「やあやあやあ！　久しぶりだねえ！　ずっとず　　と待つていたよー！」

「……………姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しんだよね？ 君だけのオンラインワン、オルタナティブ・ゼロ、箒の専用機が。勿論用意はしてあるよ」

その機体名は

「『紅椿』」

<  
>

「箒、昨日のお弁当箱」

「あ、お、美味しかったか？」

「うん。美味しかった」

「そ、そうか」

頬を赤くさせながら言う箒。

加津佐と箒のやつなんか合ったのか？

ホームルームの時間

翌日。朝のホームルームにシャルロットの姿がなかった。

『先に行つてて』と言うので食堂で別れたのだが、何かあったのだろうか。



一度ぐるりと教室を見渡すと、シャルロット以外にラウラもいなかったが、これはまあ昨日の負傷で休んでいるんだろう。

シャルロットの姿見たら一夏驚くぞう楽しそうね

まあな

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はなぜだかふらふらしている。朝っぱあかららどんなダメージを受けたのだろうか。

目玉焼きが半熟じゃなくてテンション上がりません、とか？

「織斑君、何を考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしようにしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はあ……」

怒ります、という割に迫力が全然ない。しかしそれはそれで。ごめんなさい、先生。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいですか、すでに紹介は済んでいるといいですか、ええと……」

なにやら山田先生の説明よくわからないが、……何？ 転校生？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

え？ この声って

「シャルロット・キセキです。皆さん、改めてよろしく願いします。後僕の事はデュノアでも構いません」

ペこり、スカート姿のシャルロットが礼をする。俺を始めクラス全員がぼかんとしたまま、これはどうもご丁寧にとばかりにぺこりと頭を下げ返す。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですよ。はああ……また寮の部屋割りをを組み立て直す作業がはじまります……」

「山田先生、大丈夫です。部屋の割りは、俺が考えてあります。」

「そ、そうですか！」

なるほど山田先生が憂いはそこにあつたのか……しかもいきなり元気になってるし

……て、待・て・よ？

「え？ デュノア君って女……？ しかも、キセキって加津佐君の上の名前よね？」

「確かに。おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは

」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

あ。まずい。まずい気がする。

ん、何か俺もまずい気がする。

バシーン！と 教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く。

「一夏あつ！！！！」

「加津佐さん！！！！！」

どどんと登場、凰、鈴音。その顔には烈火の如く怒り一色。

え、俺も！ 俺関係ないのに。後ろからは、セシリアが。

「「死ね！！！！！」」

ISアーマー展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

レーザーがフルパワーで発射される。

あ、これは、死んだな、俺。

あ、俺も、死んだな。

明日の朝の一面は決まりだな。

『高校一年男子、同学年の女子に殺害される。死体は原形をとどめておらず、クラスは口々悲しみの声を響かせる』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿でした」

「あるいはイチジクでした」「破裂したコーラでした」「ペシコーラでした」

おい、最後の奴は一緒

このとき俺と一夏の考える事は同じだった。

ズドドドオンツッ！ 俺（加津佐）は、音とともにISのビートをシールドで最大出力で展開した。残念ながら一夏には間に合わなかった。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴がいる。

つて、あれ？ 俺……生きてる………？ 俺生きている！？

「……………」

俺と鈴の間にラウラがいた。

その体にはIS『シュバルツェア・レーゲン』を纏っている。

「助かったぜ、サンキユ。……っていつかお前もうIS直ったのか？　すげーな」

「……コアはかるうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん　むぐっ!?!」

お

いきなりで。ある。

いきなり俺はぐいっとなぐらを掴まれ、ラウラに引き寄せられ、そ  
いてあるうことが　唇を奪われた。

「!?!?!?!」

何が起こったのか俺にわかるように説明してほしい。

「お、お前を私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！　後  
加津佐も私の嫁にする」

「……嫁？　婿じゃなくて」

「あ、ラウラ、嫁には一人しか無理だから一夏を選ぶといい」

「そ、そうか。それは仕方ないな」

加津佐！ しかも納得してるよ

このときだった。前にいるシャルロットからは、凄い笑顔でISが展開されている。後ろではセシリアがISを展開している。

これは俺（加津佐）も巻き込まれるな

「加津佐、お前のせいだ！」

「俺は、関係ない」

「「うわああああ」

叫びつつ逃げたが

あっと言う間に俺と一夏は教室の端に追い込まれた。

シャルルのマシンガンとセシリアのビットと鈴の衝撃砲がこちらをロックしている。

「「は、はは、ははは……」

一夏、

加津佐、

人は限界を超えると笑うしかないというのは、本当らしいな

そうか、これが、そうか……！！

わかったよ。じーちゃん。女の子を怒らせると死ぬね

ドカアアアアッ!!!

その日のホームルームは轟音と爆音、衝撃でクラスが揺れた。

## シャルルとお風呂（後書き）

次回 買い物

予告 一夏、うまい店ってあるか？ ああ一件あるぞ

むー手をつないでますわね。

一夏、これに合うかな

一体何が起きるのか！ 次回に続く



俺お金ない(前書き)

すみません。次回を買いものにします

## 俺お金ない

昨日の夜のことだ。そう俺たちがミンチになりそうだったその夜だ。言い忘れてた。今は一夏と俺が同室だ。ラウラの部屋にいた……。誰だっけ、まいいや、その人が鈴の部屋に行き、シャルロットがラウラの部屋に行ったんだ。

いつも通りにISの調整を行っていた時だ。部屋のドアが開いたのだ。

誰だ？ こんな時間に、とドアに向かうと……

「ラウラ何してんの？」

目の前に入るのは、代表候補生のラウラ・ボーデビッツだ。

「いや、嫁の様子をみにきた」

「そうか、中に入れよ。」

「ああ」

ラウラすんなり部屋に入ると

「加津佐、こんな時間まで何をしてたんだ？」

「ん、ISの調整だ」

「まあ無理はするな」

千冬さんみたいな事言つなラウラ。お茶を出しラウラに渡す

「あ、すまない」

「どうする？ このまま部屋を出て織斑先生に見つかりと怒られるよ」

「そうだな・・・」

考えなしなの。仕方ない助けてやるか。一夏へのサービスタイム

「一夏の布団の中で寝ろよ。嫁だったらそれが普通だぞ」

「そうなのか？」

「ああ。だから一夏の隣で寝ろよ」

「わ、わかった。」

一夏のベットに近づき布団の中に入るラウラ。猫なのか？

朝、起きたら直ぐにランニングに行く。何故だか分からないが一夏と入ると危ない目に合う気がする。

「は~~~~あ、おはすみ、加津佐」

「ああ。おやすみラウラ」

なんだ今の言葉、日本語では無かったな

ふふまいいや速くISの調整終わらせて寝よう。

もの見事に10分でISの調整を終わらせて眠りに着いた。

<シャルロット視点>

「ゴメンね、手伝ってもらっちゃって」

「気にするなよ」

放課後の廊下、赤い夕陽が差し込む中を一夏とシャルロットが並んで歩いてきた。ふたりとも、その手には今月の学校行事・臨海学校について書かれていたプリントを持っている。

「でも、よかったの？ 今日ハセシリアたちと街に行く予定だったんでしょ？」

「いいんだよ。大体、シャルロットがいないんなら行ってもしょうがないしな」

「えっ？」

「まあ、なんだ。プリントの手伝いでも、好きな相手と一緒にの方がいいってことだよ」

そう言った一夏の頬はわずかに赤く染まっている。それは夕陽の色だけではないように見えた。

「一夏……」

「シャルロット……」

ふたりしかいない廊下で互いに相手だけを映した瞳。

そこには言葉はいらなかった。

オレンジ色の光景の中、ふたりの影が徐々に重なって

「あ、れ？」

ぽーっとした頭で状況を確認する。

場所はIS学園に一年生寮の自室。時刻は早朝六時半。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャルロットはまだはつきりしない意識のままだったが、二回まばたきをしたところでやっと現状を把握した。

「夢・・・・・・・・」

はああああ・・・・・・・・っと深く深海二万マイルほどのため息が漏れる。

(ああ、せめてもう十秒くらい見ていれば・・・・・・・・)

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。

目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、その執着からなかなか消えずに手元に残っていた。

それを、お気に入りのビデオを見るような感覚で、もう一度頭の中で再生をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぼっ、とシャルロットが赤くなった。意識がはつきりとするにつれ、夢の内容が途端に恥ずかしくなってくる。

(学校の廊下で、なんて・・・・・・・・)

しかし、文字通りの夢見心地だった。

(僕はなにを考えているんだろうね……………)

「あれ？」

隣のベツトルームメイトが姿がない。

「……………まあ、いいや」

それよりも夢の続きである。今すぐに眠りに着けば、もしかしたら続きが見れるかもしれない。

(でもせつかく夢なら、もうちょっとエツちな内容でも僕は全然構わな )

……………。

「な、何を言っているんだろうね、僕はっ」

カーツと赤くなった顔を隠すように頭のでっぺんまで布団を被ると、ドキドキと高鳴る心臓をなだめるように……………した。

<加津佐&一夏視点>

チュンチュン……………。

「ん……………」

「はあ~~~~今何時？」

時計を見ると

「げ!？」

ランニングをするのを忘れて眠っていた。

やばい急いで避難しないと、俺は一夏の方を見る。

「.....」

一夏は変態だったか

ふにふに

「ん.....」

待てい。今、確かに俺のものではない声が聞えてたぞ。そしてそれはたぶん男の声ではない。(というか加津佐の声だと怖いわ。)

何か予感をめいたものが俺の脳裏をよぎる。交換音はピキユイんだ。

がばっ! と布団をめくる。と、そこには

「ら、ら、ラウラー!」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデビッツ。先月転校してきた



いきなりの宣戦布告。

その後色々あって、色々あった。

しかし問題はそこではない。問題は、なぜ衣服を纏っていないのかということだ。つまり、その……全裸なのだ。

身につけているのは左目の眼帯と持機形態のIS 右太ももの黒いレッグバッグのみ。

「ん……。なんだ……？ 朝か……？」

「ば、バカ！ 隠せ！」

「おかしなことを言う。夫婦とは肌身隠さぬものだ」と聞いたぞ

「それはそうかもしれんが……って違うわ！ 服着ろ、服！」

(一夏、お前の写真をとり俺の支配下に置かせて貰う)

今の俺はベットの下に隠れているのだ。ここなら誰にも見つからない。そう織斑先生がこないかぎり

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれる者同士が定番だと。後、嫁のとなりで寝るのは普通とも聞いたぞ」

「……お前に間違えた知識を吹き込んだ奴は誰なんだ？」

「一人は加津佐だ！ しかし、効果はてきめんのようだな」

「アイツか！ 加津佐はどこだ！」

と一夏は俺の方のベットを見るがいない。

(加津佐の奴逃げたか、見つけたら恨みを返してやる)

(あぶねえー、見つかったら確実に殺される)

こんな事をしていて

「加津佐、急いでそこを離れないと箒がくる」

(え!?!? こんな時に)

俺は咄嗟に立ちあがり一夏の方を向く。

「あ! 加津佐、お前な」

なんで加津佐の奴汗をあんなに流しているんだ。

「加津佐、どうした?」

「どうしたんだ?」

言いくい。そうも箒が近くにいたとは、言えない。だとは言わないと死ぬ。

「一夏、箒が直ぐそこまで来てる」

「げ!!!?? マジか?」

「…………マジだ。このままでは俺とお前の命はない」

「ラウラどけ！」

急いでラウラをどけようとするが一夏は押し倒された。

「お前はもう少し組み技の訓練をすべきだな」

そんなことはどうでもいい。速くどけてくれー

一夏とラウラが言い争いをしていると

「コンコンッ！」

きた ……！！

一夏からの目の通信

「頼む、箒を中に入れてくれ」

「わかっている」

俺はすぐに扉のドアノブに手をかけて開ける。

「どっつしたの箒？」

「い、いや、一夏はいるか？」

言い訳を言い訳を考える。

.....!

「一夏、今風呂に入ってた。だからそこで待ってくれだって」

(加津佐、様子がおかしいぞ。誰かが来ているのか!?)

箒は俺を無視して中に入る。

「やばい。一夏、箒が行ったぞ!」

(マジかよ!)

残念遅かった。もう一夏の眼の前には箒が立っている。

「一夏あつ! ななつ、何をしているかこの獣ー!」

しゅらん、と一息で真剣を抜刀。毎日の鍛錬の成果である。

「一夏、俺先に食堂で待っている。じゃあ」

「お、おい!」

加津佐、ありえない速度で部屋から出ていった。人間板瞬間加速だ。

感心している場合じゃない。

「な、待て、箒! これは違うぞ!」

「何が違うというの、何が! ええい、おとなしく斬られる!」

「だああっ！ やめろ、やめろってバカ！ これは加津佐の仕業だ  
！」

「バカとはなんだ、この大バカ者があつ！」

ダメだ。今の筈に何を言っても通じない。

「せつ、せつ、成敗してくれる！」

<加津佐視点>

まさか筈が来るとは予想がいだな。ハ加津佐が悪いんでしょ

まあ、そうだが

食堂に着くと

「やあーかづっち、ヤッホ」

この声は！

後ろを振り向く。やはり

「のほんさん。どうしたの？」

「今から朝食食べるの？」

目がまだ眠たいと言っている。大丈夫なのか、のほほんさん

「うん。そうだけど」

「じゃあ私達と一緒に食べようよ」

元気いいねー。それでこそ、のほほんさんだ。

「いいよ」

ある意味ではこの誘いが俺を救う。

四人で朝ご食べる。

(一夏、大丈夫かな〜ま!大丈夫だろう)

293

<一夏視点>

「ちえ……」

「ちえ?」

「チエストオオオオオ!!!!」

「どわぁ!」

筈の原義が一夏襲う。一夏はその筈の攻撃をかわすと、後ろにある

ベットが真っ二つになった。

(す、すげー篤)

感心している場合じゃない。

「一夏！ おなしく死ね！」

「何を言っているのかわかっているのかお前は！」

「人の嫁に手を出すとは不躰な」

三者三様、交わらぬ線と線。こうして早朝のドタバタ騒ぎは寮長の山田先生が大あわてで飛んでくるまで続いた。

<  
>

時間は過ぎ、場所は変わって一年の食堂である。

加津佐の仕業で死にかける俺（織斑 一夏）。

「ん、欲しいのか？」

俺の視線に気づいたラウラが「わけてやるっ」と言っって自分の口にパンを持って行く。

うん？ なんで自分の口にパンを持って……って、どわぁ！

「ん……。どうした、かじっていいぞ？」

「ば、ばか！ そんな食べ方出来るか！ それじゃまるつきりキス」

とそこまで言ったところで箸がテーブルを叩いた。

「食事のときくらい落ち着いたらどうだ……？」

その顔はひくひく口元が引きつり、こわい笑顔になっていた。

「ふむ。……嫉妬か？」

「なっ！？」

「自分ができないものだから、羨ましいと」

「だ、だ、だれができないものか！ っ、一夏っ！」

ずずずつと味噌汁を口に含んだ箸が身を乗り出してくる。

「お前ら本当に元気だな」

「か、加津佐！ お前のせいで死にかけたぞ」

俺は一夏と話しているとラウラが箸になにか言った。

「ちなみにこれは一夏が言っていたことだが」

ラウラも成長したな。感心する俺（加津佐）



「一夏はおしとやかな女が好きだそうだ」

「！」

一撃必殺きた。一夏を使うとはなかなかやるなラウラ。

「わああっ！　ち、遅刻っ……遅刻するっ……」

不意に珍しい声が聞えた。

「よ、シャルロット」

「あっ、一夏。お、おはよう」

ちょうど俺の隣が空いていたので、手招きして呼ぶ。

とシャルロットがきてから、ご飯を食べていると俺はある事に気づく。

時計を俺は見た。

「……げ！　時間がないじゃん！」

「は!?!」

「え!?!」

「なに!?!」

「「「え〜」」」

のほほんさん。三人組も同時に声をあげた。

「のほほんさん、俺の後ろに乗って」

「う、うん」

「他の人も」

「あ、はい」

「わかった」

三人組は俺に捕まると、俺はISを部分展開して

「じゃあー夏」

ブーストしてその場を立ち去り学校へ向かった。なんかギリギリ間に合った。

「いいよ。楽しかった〜」

「いいですよ」

「本当に嬉しかった」

「元気ほんとにいいな〜のほほんさん」

そのあとが大変だった。皆からはずるいと抱っこされてるとか、

まあ大変だった。

一夏達はシャルロットが俺と同じようにISを部分展開して、俺と同様にブーストして学園にきたが間に合わなかった。

箒たちは一夏が怒られて何時間に教室に入り着席していた。

(さすが箒とラウラ)

「デュノアと織斑は放課後教室の掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい………」

ふたりそろって意気消沈、その後着席。朝から千冬さんを怒らせて得など何にもない。

キン コーン カーン コーン。空気の読めないチャイムが鳴って、S・H・Rがはじまる。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園のといえお前たちの扱いは高校生だ。赤点など取ってくれんなよ」

だよな。確かに赤点を取ると織斑先生の個人の授業がはじまるからな。

(久しぶりに千冬さんと訓練したいな) (したいの?)

(実はあまりしたくは無い) (ダメじゃん)

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

そう。七月頭の校外実習 すなわち、臨海学校なのだ。三日間の日のうちの初日が丸々自由時間。

「ではS・H・Rを終わる。各人、今日もしつかりと勉学に励めよ  
そいやなんで山田先生いないんだ？

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

「山田先生は校外実習の現地調査に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わり担当する。後加津佐、山田先生の現地に着くまで護衛しろ」

「了解です」

そう言つて今山田先生がどこにいるか情報を貰う。

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？ いいな〜  
！」

「ずるい！ 私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでいるのかなー。泳いでいるんだろうなー」

（でもなんで俺に護衛を頼むんだろう？） へ加津佐のISが一番早

いからじゃないの？」

(だな)

「あー、いちいち騒ぐな。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」

はーい、と揃った返事をする一組女子。

「後織斑先生」

「なんだ加津佐？」

「俺お金ないんですけど、どうすればいいですか」  
皆が同時にびつくりした顔で俺を見る

「すまなかつたな。ほら」

とカード見たいなものを渡される。

「なんですこれ？」

「お前のキャッシュカードだ。そこからお金を引き出せ」

「了解です」

「それでは解散」

(それじゃあ行くとしますか?) ㇿだねㇿ

俺は窓から飛び降りて

『来い、アルファ』

ISを展開して山田先生がいる所に向かう。

ていつか街中でISを見せてもいいのかな?

簡単に山田先生は見つかり無事に到着したので俺はTORAIAR  
Uを使ってIS学園に戻った。

俺お金ない(後書き)

次回が買い物です。

## 買い物（前書き）

頑張りました。見てください。

自分的には少しはいいかなと思います。



## 買い物

「なあシャル」

「な、なに一夏？」

「付き合ってくれ」

「……へ？」

<加津佐視点>

さて今日は珍しく生命体ISこなかったな。ゝそうだねゝ

(加津佐、多分もう時間がないのよ。貴方の体もそろそろ限界。そして臨海学校の途中で戦いが始まる)

「加津佐」

「ん、なんだ一夏」

「いやお前なにしてんのかなって」

「あ、明日買い物に行こうかなと思って、それで昼に食べる店を探しているんだ」

「あ、一件だけあるぞ美味しい店」

「本当か」

俺は飛びあがって一夏に近づく

そのあと俺は一夏にその店の場所を教えてもらった。名前は五弾田という店

それからISの調整を終わらせ眠ろうとした時だ

ピロリロリン と携帯がなった

「あ、もしもどちら様ですか？」

『私の名は天才の 』

ブチ、俺は千冬さんに言われた通りに電話を切った。

そして30秒後

ピロリロリン と再び携帯がなった

「なんですか？ 束さん」

『酷いよかづくん。切るなんてそんな子に育てた覚えはないぞ〜』

「育てられた覚えもありません」

『あ、はははは。そうだったね』

なんて気楽な人だ。

「それで用件は？」

『え〜とね。たた声を聞きたくなつたから電話しただけだよー』

「そんなんだ。じゃあ俺もつ寝るんで」

電話を切ろうとした時

『待つてー！』

という声が聞えたので切るのを止めた。

「なんです？」

『デートしやうねー』

「……………」

そうなぜだろうか、今デートしようと思えた気がする。俺の気のせいだといいが

もう一度電話を耳に当てて聞く

『だからデートしやうねー』

「マジで言ってますか？」

『うんうん。言ってるよ』

俺は悩んだ。悩んでいます。だれか答えを俺のかわりに言ってください。

東さんとデートか、多分俺の予想だと荷物持ちだな

「いいですよ」

『じゃあ、明日の8時に駅前ね。絶対にこないとかづくんの体ISにしちやうよ』

それはかんべんなので

「わかりました」

『それじゃあね』

「はい」

と言って携帯を切り。考えた

「.....」  
「.....」

あーやっちまった

東さんとのデートってどんな事するんだろ？ 機械のパーツ買つとかかな。東って加津佐を助けてくれた人？

「そうだな」

「ふん」

とずっと考えながら眠りについた。明日は8時か学校に行くわけでもないのにな

じーちゃん。俺明日初めてのデートだよ。楽しみだ。

朝になり俺は服をきて寮を出た。

IS学園の正面玄関の前で千冬さんが立っていた。

「織斑先生、おはようございます」

「お、加津佐か早いな」

「えーまあ」

「今日は買い物か？」

俺は東さんとデート行くのだとは千冬さんには言えない。

「はい」

「だったらこれを持ってけ」

と言われてサングラスを渡された。

「なぜサングラス？」

「加津佐をマスコミが狙っているからな」

「ああ。ありがとうございます」

サングラスをかけて

「行ってきます。織斑先生」

「ああ」

IS学園を出て待ち合わせ場所へ向かった。

待ち合わせ場所で待って30分待った。

「……………こない」

この暑い中立っていることがつらい。おかしいな時間は確かに合っているはずなのにな。

近くの自販機でスポーツドリンクを買いそれを口に持って行くこととした時だ

「かーづーくん！」

と叫び声が聞えるのでそつらを振り向く

思わず口の中にいれたスポーツドリンクをはきだした。

「なんでそのまんまで来てるんですか!？」

「いやー寝坊しちゃった。テヘ！」

と頭を叩く東さん。それは乙女がするものですよ。

「それよりそれ飲ませて」

俺の手に持っているスポーツドリンクを指差した。

「それよりこっちに来てください」

俺は東さんを引っ張って店の中に入りメガネを買って東さんに渡す

「それをかけてください」

「えー~~~~」

「じゃありません。見つかったら連れて行かれますよ」

「それはこまるね」

と言いメガネをかける東さん。違う意味で可愛いぞこれ

「じゃあ行こう！」

腕を高く上げる。無論俺はあげてない

「ここだよ！」

ガラクタシヨップ？

中にはいり東さんがこれとこれとこれとを連発してお店の人に言う。  
可哀そうに

東さんとのデートは俺の予想通りメカの器具やなんやらのパーツの  
荷物持ちだ。

その後東さんが途中まで乗ってきた乗り物に荷物を乗せた。



「それじゃあ、かつくん今日はありがとー」

「いえいえ俺もお世話になってますから」

「またね。バイバイー」

と言って空中を飛んで何処かに行った。

あれってISなのか？ ニンジンの形をしてたけど

そう束さんのデートはもの見事に9時前に終わった。あまりにも早すぎる。

だがまいい俺も買い物をしにいくところだったからな

そのまま俺は歩きだし駅前に着くと

「………でか！ つうか広い」

俺の地球にはこんなにでかいショッピングモールなんかないぞ

これも科学が進んでいるという証拠か

さてと男の用の水着はどこだ？

地図を見る。後ろ？

後ろを振り向く

「あ、あった」

それにしてもフリア、このごろ話かけてこないな。なにかあったのか？

俺の体の中で何が起きるんだ。

「すみません。これください」

商品を持って行く。

「会計3500円になります」

ずっと店員さんたちが俺の方を見ているですごく気になる。

きちんとサングラスかけてる。じゃあなんだ？

お金を出す

「お釣りは6500円になります。ありがとうございました」

と頭をさげる店員。当たり前か

ふっやっつと視線から開放されたかと思いきや

「.....」

外からも女子の視線だ。なんだこれ

辺りを見渡すと

「あ、一夏とシャルロットだ。なにしてんだ？」

ISの頭の部分を展開させて一夏とシャルロットをみる。

（おいおい、一緒に試着室入っていったぞ。）「いいんじゃない？」

「ダメだから。でもこれはこれで面白いかも」

と再び見る。

<一夏視点>

なぜだかわからないが俺はシャルと一緒に水着の試着室に入っている。

この時の俺は非常に頭が回転がよかった。

「ん……」

後ろの方で何かが上にはさつと被さる音が聞えてきた。

もしかして　いや、もしかしなくても、今は下着の脱いだ音  
なんだえろつか。

うああっ、俺に一体どうしろというんだ、シャルは何がしたいんだ

!?

<  
>

これは一夏の女運は違う意味で最悪だなと俺は確信した。

「なあフリア」

「なに？」

「お前たちも水着とかあるのか？」

「すごく聞いてみたかった。」

「あるよ」

「生命体なの？」

「うん。私達人間とほとんどかわないよ姿は、生命体になれるだけってくらいで」

「いやいや今貴方すごい事言いましたからね。人間と姿は変わらない？  
しかも生命体になれるだけ？」

「すごいよ。もしかして進化した人類なのかもしれないと確信をえた」

「お前の水着姿見てみたいな」

「……………え!？」

「だって俺お前の姿見たのって、夢の中だからさ本当のお前の姿見たい」

「見えるけど……………多分加津佐の体力が持たないよ」

「なぜ体力?と聞く」

「そ、それは……………」

「言いにくそうに無言を続けるフリア。まあいいや」

「まあお前が姿を見せてくれるのはいつでもいいよ」

「うん」

再び一夏を見ると……………千冬さんと真耶さんがなん  
でここに?」

俺は今すぐ立ち去ろうとすると

「加津佐!」

向こうから俺の名前を呼ぶ声が聞えた。まさに千冬さんだ。

「はあ」

ため息をつきながら向こうに行く

<  
>

シャルロットに引き留められる前に試着室を出ようとドアを開ける  
一夏。

「えっ？」

「えっ？」

「ええっ？」

なんと、ドアを開けた場所に一組副担任の山田真耶先生そのひとだった。

そして違う方向を向いていた千冬、こちらを見て状況に気づき千冬が頭を押さえる。

「何をしている、バカ者が……」

なぜだかわからないがそこに加津佐がやってくる。なぜ加津佐いるんだ？

軽いパニックに山田真耶は起こっていた

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室にふたりで入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すいません……」

ぺこりと頭を下げるシャル。なんか、アレだな。最近怒られてばかりだな。しかもたぶん、俺のせい。うーん、すまん

この時の俺は加津佐の方向を見ると笑っていた。

そして目の会話が始まった。

「良かったじゃないか」

「どこがだよ」

「普通の男性では体験できない事をお前は体験したんだ」

そこに千冬さんが俺と一夏の目の通信をとぎらせた

そつだ！　なんで千冬さんと真耶さんはなんでここにいるんだ？

「千冬さん、真耶さん、なんでここにいるんですか」

「山田先生って……」

一夏と俺の質問は同じだった

「私達も水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は学園の外ですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

しかし、そう言っても……なあ。言いにくいですよ山田先生と心の中で山田先生に言う一夏。

(でも加津佐の奴、先生ではなく、さん付だったな。そこは感心するよ)

ところで

「そろそろ出てきた方がいいんじゃないか？」

「そうだぞ鈴、セシリア」

ギクツという音が聞えた気がする。いや、たぶん気のせいだけど

(でもなぜ加津佐まで……)

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

というわけで変な所から登場したふたり。鈴とセシリアだった。うん。加津佐と千冬姉すごい！

「なにをこそこそしているかと思って」

「ずっと気になっていた」

すごい本当に息ぴったり

加津佐と千冬姉ってもしかして………なのかなという事を考えている一夏。

(ん？　なんか変な誤解を去れている気がする)

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」



「そ、そうですね！ まったく、一夏さんのデリカシ のなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

わー、何でか知らないが非難轟々だ。しかもなぜ俺に言う？ 千冬姉と加津佐が呼び出したのに

「さっさと買い物を買わせて退散するでしょう」

ふう、とため息混じりにそう言ったのは千冬姉だった。

手にしているのはどうやら水着で、千冬姉も山田先生同様に土壇場準備らしい。

「じゃあ俺はこれで」

と言ってその場を離れようとする加津佐

「加津佐少し私に付き合え」

……千冬姉ナイスだ。

まさか千冬さんに捕まるとは、逃げると後が怖いで大人しく入ることにした

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきてください。それにデユノアさんも」

俺はと手を上げる加津佐だが山田先生に加津佐君はここに残ってく

ださいと言われた。

<ラウラ視点>

危なかったと考えているラウラ

(まさか加津佐と教官が私達を知っていたとは、あなどれんと物影に隠れながら言っている。

<加津佐視点>

「……………まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「「え？」」

「ふう……………。言っても仕方がない、か。一夏、加津佐」

「な、なんですか？ 織斑先生」

久しぶりに下の名前で呼ばれたので、どうにもぎくしゃくした反応になってしまう

「なんですか？ 千冬さん」

なんで一夏は今は外なのになんで千冬姉じゃないの？

「今は休みだ。名前がいい。私達はこの場ではただの姉弟だろう」

俺関係ないです（加津佐）。

「わ、わかった」

緊張している一夏。なぜ自分の姉なのに

「で、一夏、加津佐、どっちの水着がいいと思う？」

うわーなんで俺にまで聞くの。一夏だけにしてくれ

えーと水着は………黒と白

「うーん、黒かな」

「うーん、白かな」

俺と一夏の意見がわかれた。だって千冬さんスタイルいいしね。黒の方が絶対に似合うと俺は思う

加津佐、そこで黒か〜お前勇氣あるな

「黒の方が」

「いや、白の」

「ウソをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる」

さすが千冬さん。俺はそのまま逃げだした（加津佐）

<  
>

駅前から走って外に出る

「なんで俺にまで聞くんだ？」  
「それは加津佐だからよ」

意味がまったくわかりません。と心でつぶやく

「グー」

と俺のお腹が鳴り始めた。そろそろ昼飯を取らなければな

確かここら辺に五弾田定食屋があるはずなんだけどな

と辺りを見渡す

「あ！ あったあった」

と五弾田に走る。そして中に入る

ガラガラ

「いらっしゃいま」

俺の目の前に入たのは赤い髪の少女だ。たぶんこの子が蘭だったか

(この人どこかで見たことあるような気がするんだけど)

「こちらです」

案内されて席に着く。

「何にしますか?」

「ここにあるメニュー全部ください」

「え!? 全部ですか?」

「うん」

「わかりました」

と言って俺の前から蘭はいなくなる。

待つこと10分

「お待たせいたしました」

と言って俺の前にメニューの定食が出てくる

「いただきます」

(美味しい。美味いどこれ)

どんどんお腹の中に入れていく。美味すぎる

「ふう〜美味しかった」

蘭は俺をびっくりした目で見ている。

「お金いくらですか?」

「えーと、9000円です」

「じゃあはい」

一万円をだす俺

「少々お待ちください」

待っていると柄の悪い奴が座っていた

「なんだこの店、ぼろ！」

「しかも不味い」

なんだとあいつ等ここの飯のどこが不味いんだ！  
「加津佐、ご飯にだけは五月蠅い」

「おい、お前等それ作った奴に謝れ」

「ああ、なんだてめえ」

「謝れだど！ 誰が謝るかよ」

「力ぞくでも謝らす」

「やって見やがれ」

と言ったところでそいつのパンチが右から俺の顔面目掛けて俺に飛んでくる

ガシッ

そいつのパンチを右腕で止める。そのまま俺がそいつに殴ろうとし

た時

後ろから椅子をおもいきり頭に叩きつけられた

「グハツ！」

そのまま前に倒れる。この時俺はサングラスが取れていることには築いていなかった

「い、てて。少し調子に乗りすぎだな」

俺は普通に立つ

「げ！ お前！」

「逃げろ！」

俺はそいつらを捕まえてそのに放り投げた。

「早く謝れ」

「「は、はい。す、すいませんでした」」

と言って直ぐに居なくなった。なんで俺に言っただよ

「あ、あのありがとうございました」

「いえいえ」

後ろを振り向く



(この人前にニユースでやっていた確か名前は……奇跡 加津佐だったかな)

「あの」

「なに？」

「奇跡 加津佐さんですよ」

「え!？」

なんで俺ばれてんのと鏡を見る。

(サングラス取れてるよ)

「まあいいや。修理だいいここに出しといてください。」

紙を置いてその場を立ち去ろうとすると急に頭がくらくらしてきた

「あ、あれ」

バタ

倒れた。へ加津佐、疲れたまりすぎ

「加津佐さん」

誰かが俺よんでる。

<  
>

「……………」

目を覚まし起きあがる。うん頭がいたい

「あ、起きましたか？」

「え」と

「五弾田 蘭です」

「蘭さん？」

「蘭でいいです」

「じゃあ俺も加津佐でいい」

早いないきなり呼び捨てって

蘭の机の上を見ると……………IS学園の勉強？

「IS学園はいるの？」

俺は蘭に聞く

「は、はい」

へー、一夏を追い掛けてね

「そんな事より大丈夫ですか？」

「う、うん。まだ頭くらくらするけど」

「休んで行ってください」

「うん」

さすがに女の子の部屋に入るのは初めてだな。女の子ってこういう部屋なんだ

それにしても蘭、かわいい。普通の意味ですからね。

「加津佐さんってIS学園に入っているんですよね」

「うん」

「じゃあ一夏さんとは？」

「友達だよ」

「私来年、IS学園受けるんです」

「へー、頑張ってるね」

「はい」

しっかりしてるな

「加津佐、蘭についてデータが手にはいった」

（お前まさか）

「うん。ハッキング。蘭は学校の生徒会長をしているの」

（すごいな）

「ISの適正、Aだって」

「すごいな蘭、IS適正Aって」

「え！？ 私言いましたっけ？」

ヤバイ

「い、一夏に聞いたんだ」

「そうなんだ」

顔を赤くする蘭

「ISの勉強なら少し付き合っただけだよ。お礼に」

「いえ、そこまでしてもらつ訳には」

「いいから」

蘭を机に座らせ勉強を始めた。

蘭の学力を俺は甘く見ていた。すごい俺が今日教えた事全部覚えた蘭。

「すごいよ蘭」

と顔を寄せてしまった

顔が近い

「い、いめん」

直ぐに後ろに背を向ける

「い、いえ」

「そろそろ帰るかな。一夏も心配しているだろっし」

「そつですか・・・」

残念そうな顔していた蘭。なんで?????

蘭の部屋をでて廊下に出ると

「お、蘭、飯のようい」

「あ、バカ兄」

「蘭、お前とうとう彼氏出来たんだな！」

なんだその嬉しそうな顔は

「違うよバカ兄」

「そうだよ。蘭が俺に釣り合う訳がないじゃないですか。蘭は綺麗で料理もできて勉強も出来るんですよ」

「加津佐さん、それフォローになってない」

蘭は顔を赤くしながら言う。え！？俺間違えた事言ったか？

「まあいいや。それじゃあねバカ兄。私加津佐さんを見送りにいくから」

「あ、ああ」

急に弾が震え始める。凄いぞ蘭の殺気

「それじゃあ、蘭」

「はい。」

「あ、そうだ！ これ」

俺の携帯番号を渡す

「あ、じゃあ私のも」

と送られてくる。

「帰ったらメールするね」

「は、はい」

(初めてバカ兄以外の男の人とのメール)

「またね。 蘭」

「それでは加津佐さん」

蘭と別れ走ってIS学園に帰った。

<加津佐視点 I S 学園の寮>

「加津佐、お前遅いぞ」

「一夏、俺」

「どうしたんだ？」

「疲れた。寝る」

「お、おい」

そして携帯を広げて蘭にメールを送って眠りに着いた。



買い物（後書き）

次回 箒との部活

加津佐！ 甘い！

箒もね バンツ！

お互いにぶつかり合う。

今回はすぐに更新します。何故なら2000文字くらいしかありません。

## 簿と部活

俺は朝いつもの通りにランニングをしていた。そこに

「簿なにしてるの?」

「加津佐か、いやこれから部活に行くところだが」

部活かー確か簿って剣道部だったけ? 俺もやってみるかな

「その練習俺も混ぜてくれ」

「え!?!」

それから直ぐにランニングを終わらせて剣道場に向かった

「おはようございます」

「おはよ

ここでみんなの挨拶が終わり。俺の周りに集まってくる

「なんで加津佐くんがここにいるの?」

すぐさま回答

「箒と一回戦ってみたかったから」

「そうなんだ」

「じゃあ好きなタイプは？」

え〜と待て！ それ関係ない気がする

「加津佐！」

箒に呼ばれたので箒のところに行く

「ごめんごめん」

「早く構えろ」

「めん無し？」

「何か問題があるか？」

それはあるでしょ。箒、女の子と言つ事忘れてないか？

「打ち止めするから」

「ああ」

お互いに構える。動けない。強い箒

「はっ  
「！」

先に動いたのは箒だ。

そのまま俺の頭に冒頭がくる。

バシッ！

秘儀ガード。危ない危ない。

「甘いぞ加津佐！」

「なに！？」

すぐに弾かれ右から飛んでくる。

「箒もね」

ガンッ

一回間合いをとりお互いに突っ込む

「はっー！」

「くっ！」

箒の左からのこてだ。

「私の勝ちだな」

「い、いやあい打ちだ」

「なに!?!」

俺も箒の脇腹に当てる直前で止めていた。

「さがだな加津佐」

「箒もね」

「まだまだ行くぞ」

「おし来い」

と夕方の6時まで続いたのだ。

幕と部活（後書き）

次回 海だー！

一夏さん、オイル塗っていただけますか？

一夏、負けたらおごってね。

加津佐、なぜここにいる？

俺と箒はふたりで海の岩場にいた。

なぜここに箒がいるんだ！

これからのストーリーで新しいキャラを出そうと思います。

キャラはどっちがいいですか

男と女

感想にどっか書いてください

海だー！（前書き）

まずこちらを見てください。ここからの続きは次回です



海だー！

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。

臨海学校初日、空は青い。だが隣の隣にいる加津佐はカタカタとキーボードを打っている。

あいつはどんだけISが好きなんだと俺は思っている

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「う、うん？ そうだねっ」

俺で隣の席になったのはシャルだった。しかしどうも出発してからずっとこんな感じで、いまいち話を聞いていない。今も、返事だけしてすぐまた手元に視線をやっている。

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

左手首にシャルがしているブレスレットは、昨日とある買い物に付き合ってくれたお礼として俺がプレゼントしたものだ。

< 加津佐視点 >

(フリーア、これで簿のデータ全部か?)

「うん」

(これで調整終了)

でもなんだかフリーアが元気ないみたいだな。何かあったのか?

「かつ、加津佐」

「どうしたの簿?」

「これ食べるか?」

ポッキーを俺に差し出してきた。おいしいよねこれ

「もらっつよ」

と一本手にとち口の中にいれる。うん美味しい

「じゃあこれ俺の手作りのクッキー」

昨日から作って置いていたものを持ってきた。美味しんだこれ。甘さ控えめ、砂糖控えめ、女の子には調度いいだよねこれ

まあこれを教えてくれたのがおじいちゃんというね。誰にも言えない。

「………」  
「ありがとう」

口の中にいれる筈。どうだ……？

「美味しいぞこれ、甘さ控えめだ」

すごいなぜわかった？ 超能力者か？

「あ、ずるい！ 篠乃之さんずるい！ 加津佐君からクッキーもらってる」

みんなにばれてしまった。仕方ないからみんなに配る。

あたりからは『これももの凄く美味しいと』言う声が聞こえる。そして織斑先生も食べた。

「加津佐、これお前の手作りか？」

「はい」

「なかなかだな……」

ほめられた。なぜだ凄くうれしいぞ織斑先生に言われると

うーん、なんだろうな母見たいな感じかな？

「加津佐、もう貴方は……」

（何か言ったか？）

「なにも言っていない」

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬姉の言葉で全員がさつとそれに従う。凄いよ千冬姉

言葉通りに目的地である旅館前に到着。四代のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を邪魔しないように注意しろ」

「」「」よろしくおねがいしまーす」「」

千冬姉の言葉の後、全員で挨拶をする。この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」

歳は三十代くらいだろうかと考えている時だ。

「一夏、お前最低だな。見た目で年齢を決めるなよ」

と小さい声で加津佐が言ってきた。

「あら、こちらが噂の……?」

ふと俺（一夏）と目があった女将が千冬姉にそう尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなっ  
てしまって申し訳ありません」

「申し訳ありません」

加津佐は頭をさげた。

「いえいえ、そんな。いい男じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。こちらの馬鹿者は。挨拶しろ、馬鹿者」

ぐいっと頭を押さえられる。いや、今しようとしたんだって。本当に

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「奇跡 加津佐です。よろしく願います。それにしてもお綺麗ですね。ほんと織斑先生みたいに」

と加津佐がお世辞を言う。そんなので喜ぶわけないだろ！

「うふふ、ご丁寧にも。清州景子です」

喜んでるよーちゃっかり。

「不出来の弟で迷惑をおかけます」

なんだ千冬姉。おれだけ差別かよ。それとも……さっき言われた言葉がうれしかったのか？

「あらあら、織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいですね」

「いつも手を焼かされていますので」

待てよ・・・ほとんど加津佐のせいだぞ！　なんで俺心の中で叫んでいるんだろう

いや、でも拒否はできない。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていすから

そちらをご利用になってください。場所が分からない場合はいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をするとうすぐさま旅館の中へと向かう。とりあはず荷物を置いて、そこからなんだろう。

ちなみに初日は自由時間

はあく心の中でため息をつく。なぜなら俺の部屋は・・・と一緒だ。

「ね、ね、ねー。おりむ〜、きつき〜」

ぐあ、この呼び方は間違えなくのほほんさんだ。

なぜ俺の名前がきつきになっっているんだ？

「おりむ〜ときつき〜って部屋どこ〜？　一覽に書いてなかったー。

遊びに行くから教えて」

あ、あれ俺の名前って、織斑先生がくれたんじゃないか？  
加津佐って誰と一緒に部屋？

「……………」ん？

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

出来れば俺もそっちの方がいいです！

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめた  
ーいって〜」

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい。加津佐はきちんと部  
屋に行くんだぞ」

「はい」

おっと織斑先生のお呼びだ。でもなんで俺だけ？

<加津佐視点>

「じゃまあ、のほほんさん行こうか」

「……………」え!?!?」「……………」

そこに固まっている女子の軍団が俺を見て驚いていた。そりゃそうだろうな。俺がのほんグループと同じ部屋で寝ることになったからな

その中に箒とセシリアもいるので、後が怖いです。寝るときはみんなから離れた場所に寝よう。万が一事故が起きたらシャレにならない

「やったー」

と言うグループのほん。いや俺は野宿したいな」と俺は非常に思っている。

その後俺はすぐに水着を持ち部屋を出て一夏がいる織斑先生と同じ部屋に向かった。

コンコン

「誰だ」

「俺だと言うのは冗談で加津佐です。一夏をラチしにきました」

「え!？」

「だから冗談だ。それで織斑先生はどうするんですか?」

確か二日まいに水着を買ったということとは

「私は他の先生との連絡なり色々ある。しかしまあ」



「ほんと咳払いをする千冬さん

」軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟がわざわざね」

「選んでくれたものですよね」

加津佐め中々やるようになってきたな

その後山田先生が来て織斑先生をどこかに連れて行った。頑張ってください千冬さん

「加津佐」

（どうしたんだ？）

「ふうん。なんでもない」

なんかこの頃おかしいんだよな。フリア

さあ、行かん。いざ海へ！

<  
>

俺と一夏と篝のは更衣室のある別館へ向かう途中でぱったりと出くわした。

「なあ箒」

「これって……」

「知らん私に聞くな」

そう俺たちの目の前にウサ耳が突き刺さっているのだ。

「えーと、抜くぞ」

「じゃー夏、俺先に行ってるな」

「お、おい加津佐！」

一人残された俺は、仕方なく目の前にあるウサ耳を引っ張る

すぽっ。

「のわっ!?!」

てつきり地中に束さんがいると思って勢いよく引っ張ったのだが、そんなことはなかった。力の余った俺は盛大にすっころぶ。

「いてて……」

「何をしていますの?」

「お、セシリアか。いや、今このウサミミを　　あ」

つつい声の方に視線をやる俺。しかし体勢は倒れたままなので、つまり……セシリアのスカートの中が見えてしまった。

「!?! い、一夏さんっ!」

俺の視線に気づいたセシリアは、ばばっとスクートを押さえて後ずさる。ちなみに、えーと、……レースのついた白だった。って、俺のバカタレ。何をすっかり見てるんだ

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えていて、それで……」

「は、はい?」

セシリアは素っ頓狂な声で返す。そりゃそうだ。俺だって説明を受けたらちんぷんかんぷんだ。

「いや、東さんが」

キイイイン……。

う? なんだ、この、何かが高速で向かっているかのような音は  
って、うお!?

ドカ　　ン!

謎の飛行物体は盛大に地面に突き刺さった。しかもその見た目というのが

「に、にんじん……」

俺とセシリアはダブルで漏らす。

「あっはっはっ！ 引っかかったね、いっくん！」

パカッと真っ二つに割れたにんじんのなか笑い声とともに登場したのは、件の天才・篠乃之束さんだった。

……この人は普通に登場するということを知らないのか。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

格好はというと、不思議の国のアリスです。

「お、お久しぶりです。束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。篝ちゃんとかづくんはどこかな？ さっきまで一緒だったよね？ トイレ？」

「えーと」

束さんを避けてどこかに行きました。とは言えないので、どう答えるか迷った。

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。じやあねいっくん。また後でね！」

すたすたと走り去った。無茶苦茶早い。凄いよ東さん

< 加津佐視点 >

俺は一夏と離れた後、すぐに水着に着替えて岩場に向かった。

ここなら誰も来ないと思って

「風が気持ちいなー」

「泳がないの？」

「うん。少し考えたい事があるから」

「そう……加津佐、私も加津佐に話さないといけないことがあるの」

フリアと話そうとした時だ

「加津佐、なぜここにいる？」

目の前に来たのは……その筈です。なんで筈がここにいるんだ！？

「い、いや少し考え事をね」

「そうか、私も同じだ」

同じなんだ。

「加津佐、ひとつ質問いいか？」

「なんだ？」

緊張するのはなぜ？ 箒だぞ。友達だぞ

「もしもの話だが、好きなやつがふたり出来たらどうすればいいんだ？」

なんか変な話だなと思うが答える

「うーん、どうだろうな。好きな人がふたりか……相手が好きって言うてくれるのを待つ、かな」

「そ、そうか分かった」

分かったの!？

「それじゃあまず加津佐に聞くが」

「なに？」

「お前は、私を異性として意識しているか？」

……え？ 現在俺は一休さん状態に入った。

.....

全然考えがでない。

「まあ……するかな」

「するのか……」

なんでうれしそうなの？ 〔加津佐も鈍感ね〕

フリアにまで言われたぞ。鈍感って何が？

「箒もあつちで皆と泳がないのか？」

「あ、私はいい。今日はここにいたいのだ」

「う、うん。分かった。また部屋でね」

「うん」

そう何を隠そう旅館で一緒の部屋です。一夏と変わりたい

そして俺は箒と別れ、もう一つの岩場に向かった。

<一夏視点>

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！ わ、私の水着変じゃないよね！？ 大丈夫よね！？」

「わ、わ。体かっこいゝ鍛えてるね」

「織斑くん、あとでビーチバレーしようよ」

「おー、時間があればいいぜ」

更衣室から浜辺に出てすぐ、ちょうど隣の更衣室から出てきた女子数人と出会う。各人、可愛い水着を身につけて、その露出度にやや照れてしまう。

さて砂浜向けて一歩踏み出す。

「あちちちっ」

海に来るのも何年かぶりの俺としては、この感触は懐かしくもある。素足で感じる熱にややつま先立ちになりながら、波打ち際へと向かう。

ビーチにはすでに多くの女子生徒が溢れていて、肌を焼いている子もいればビーチバレーをしている子、さっそく泳いでいる子など様々だった。

来ている水着も色とりどりで、ある意味七月の太陽よりも眩しい。

「よっ、と……」



とりあはず準備運動を始める俺。何年かぶりの海だし、足がつって溺れても格好悪い。

「い、ち、か~~~~~っ！」

おう？  
って、のわっ！？

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら終わったんなら泳ぐわよ」

いきなり俺に飛び乗ってきたのは、鈴だった。小学校の頃も、そういえばこいつ水着になると飛びついてくる。猫みたいなやつだ。

ちなみに着ているのはスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白のストライプでへそが出ているやつ。

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れてもしらねえぞ」

「あたし溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そうこう言いながら、俺の体をしゅるりと駆け上って肩車の体勢になる。こいつ、前世は猫だろ、たぶん。

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね、一夏」

そりゃどうも。今はなにもしてないから、それもいいかもしれん。

って、バカ！

「監視員じゃなくて監視塔かよ！」

「いいじゃん。人の役に立つじゃん」

「誰が乗るんだよ」

「んー……あたし？」

にへへと笑ってみせる鈴。うーん、こいつは……。

「あつ、あつ、ああつ！？ な、何をしていますの！？」

と言ってやってきたのはセシリアだった。手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。

「何って肩車。あるいは移動監視塔ごっこ」

「ごっこかよ」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセイバーの資格とか持っていないし」

「うーん、そう言われるとそうか」

「でしょ？ まあ、溺れている子がいたら助けるけどね」

「わ、わたくしを無視しないでいただけますか！？」

おおっ、ついつい鈴と上下で会話をしてしまった。ちなみに、鈴に

こうやってべったりくっつかれても平気なのは 本人の前では  
けして言えないが 胸がないからだ。

それに小学校のころからこんな感じで俺に乗っかってくるので、ぶ  
っちゃけ慣れた。

「とにかく！ 鈴さんそこから降りてください」

「ヤダ」

「な、なに子供みたいなこと言って……！！」

セシリアがざくっ！ とパラソルを砂浜に刺す。うお、なんか怒り  
がこもっているぞ。

「なになに？ なんか揉め事？」

「って、あー！ お、織斑君が肩車してる！」

「ええっ！ いいなあっ、いいなあ〜！」

「きつと交代制よ」

「そして早いもの勝ちよ！」

う、まずい。さすがにまずい。あれだけの女子を肩車するのは体  
力的にも精神的にも男子的にも非常にまずい。なんでこんな時加津  
佐はいないんだ！

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」

<加津佐視点>

ここならだれもこないと思う。

山田先生の護衛をしていたときに見つけた。静かでいいとろなんだ

「なあフリア」

「なに？」

「お前俺に話あるんだよな？」

「うん、うん」

「早く聞かせてくれ」

「次の戦いで最後だと思う」

「!？」

そうこの何カ月か俺は生命体と戦っていたんだな。それももう終わりか……

「戦い終わったら俺どうなるんだ？」

「もとの世界に戻るか。ここに残るか」

選択しは一つか……もとの世界に戻っても俺を待っている奴はいない。

それならこちらにいた方が……駄目だ！ 元の世界に戻るんだ俺は。

「みんなの記憶は？」

「消える」

消えるか……

「……俺の記憶は？」

「残る」

「それならいいか別に、俺元の世界に戻るよ。皆にはお世話になってばっかしたけど」

そこに

「……加津佐か？」

泣いているのか？

なんでここに織斑先生が！？

「どうした加津佐？ なにかあったのか？」

「いえ、ちよつと考えごとがあつて。それより織斑先生はなんでここに?」

「見回りだ。そんなことよりなぜ泣いていた?」

ここで言うか……いやまだいいや

それより

「織斑先生、お願いがあります」

「なんだ?」

「少しだけでいいので俺の……いや僕のがままを受け入れてください」

そのまま織斑先生を抱きしめる。やっぱりお母さん見たいだな。つい涙が出てきた。

もとの世界では、父さん、母さん、じーちゃんはもういない。だからお母さんというものが自分をらくにしてくれるか。試したかった。

「加津佐!?!」

「ありがとうございます。もういいです」

すぐに織斑先生から離れる。

「加津佐、一夏たちのところに行かないのか?」

「これから行きます」

最後の挨拶をしにね。もう誰も悲しまない。ついでに鈴の記憶も少しだけでもとに戻すほうん。わかった」

俺と織斑先生は一緒に一夏たちの所に向かった。

「今まで加津佐、ありがとう。私がやらないといけないことが分かった。思い出した。そう私がやらなきゃいけない事は貴方の最後……」

<一夏視点>

「ん？ なんだそのバスタオルおぼけは」

なんだか奇天烈な存在がいた。バスタオルを数枚で全身を頭の上から膝下まで覆い隠している。な、なんだこいつは……。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める」

んん？ 今の声は……ラウラか？

しかし、いつも自信に満ちたラウラにしては、ずいぶんと弱々しい声に聞こえた。シャルはシャルでなにやら説得を試みている。うーん、どういう状況なのかさっぱりだな。

「ほーら、せつかく水着に着替えたんだから、一夏に見てもらわな  
いと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんなこと言ってさつきから全然出てこないじゃない。一  
応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなあ」

そう言えばラウラとシャルは同室になったらしい。先月加津佐が提  
案したのがこれだ。だから今俺のところに加津佐がいる。

ぶっちゃけ、そっちの方が助かる

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も一夏と遊びに行こうかな  
あ」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。一夏、行こう」

言うなり、シャルは俺の手をとる。そのまましゅるっと腕を絡ませ  
て、シャルは波打ち際へと俺を誘う。

「ま、待て。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

ばばばとバスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光



の下に現れる。しかもその水着というのが

「わ、笑いたければ笑うがいい……!!」

黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、一見するとそれは大人の下着にも見える。

……

可愛い。

「おかしなところなんてないよね、一夏?」

「お、おう。ちょっと驚いたけど、似合ってると思うぞ」

「なっ……!!」

そんなに俺の言葉が予想外だったのか、ラウラは驚きに一瞬たじろいだあとそのままカッと赤面した。

「じゃ、社交辞令ならいらん……」

「いや、世辞じゃねえって。なあ、シャル?」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからおしやれしなきゃってね」

「う、うん、ありがとう」

褒められて照れくさそうに髪をいじるシャル。その手首には、昨日プレゼントしたブレスレットが光っていた。

「それ、錆びたりしないか？ 大丈夫か？」

「大丈夫だよ。来る前にちゃんと保護コートしてあるし、後で塩水洗い流すから。その、せつかく一夏がくれたものだしね」

えへへ、と笑顔で言うシャル。本当に気に入ってるんだな、それ。

「一夏」

「ん？」

さっきまでの声と違う、いつもの落ち着き払ったラウラの声が俺を呼ぶ。

「ずるいぞ、それは。私にも何かプレゼントを……その、して欲しいのだが……」

う、セシリアに引き続きラウラまでねだってくるとは。

< 加津佐 & 千冬視点 >

今織斑先生と一緒に一夏たちのところに向かっている

「加津佐」

「はい。なんですか？」

「なんで……その、私を抱きしめた？」

織斑先生が顔を少しだけ赤くさせながら言う

「俺母親の感覚しらないんです。だから織斑先生だったら母と  
言うものが感じられるか試したかったんです。すいません」

「い、いやそれなら構わない」

珍しくやさしいな。でもこれが最後の会話になるのか……い  
やだな

「質問だがいいか？」

「どうぞ」

「加津佐、お前凰の記憶になにかしたか？」

なでいきなり鈴の事が……

「いえ、なにもしてません」

「嘘だな」

「!？」

「図星か、気になって調べていたが」

仕方ない。話すか

「分かりました。話します。確かに俺は鈴の記憶をいじりました」

「なに！？ なぜそんなことを」

「俺の一番近くの人間が危ないんです。だから記憶を書き換えました」

「それで他に記憶をいじったものはいるのか？」

「一夏の記憶をいじった筈なのに消えてなかった。一夏は特別見たいです」

「一夏が……」

「織斑先生、見えました」

向こうから声が聞こえた

「だね わざわざ鬼の」

ここまで確実に聞こえた

「誰が鬼だ、誰が」

ドン！ と何か音が聞こえた気がした。いや、気のせいじゃないのかも知れない。

一同、ギギギギ……と軋んだ動作で首を動かす

「お、お、織斑先生にそれに加津佐……」

「「おっ」

あ、千冬姉、例の水着着ている。でもなんで加津佐と一緒に？

「一夏、鼻の下伸びてる」

「なっ……!?　しゃ、シャル？　何を言ってるんだよ。ははは……」

「見とれていたくせに」

うぐっ。それは、その……拒否できない。

「そら、お前たちは食堂に行って昼食でもとっこい。加津佐も」

「自分はいいです。織斑先生と久しぶりに勝負したいし」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらおうとしよう。加津佐、覚悟しろよ。今回は手加減なしだぞ」

「覚悟のうえです」

その言葉通り、教師には自由時間なんてないのだろう。

「じゃ俺たちは食堂に行ってきます」

「集合時間までには遅れるなよ」

「はい」

と、それだけ言ってその場を離れる。加津佐の奴大丈夫か？

と心配する一夏であった。

海だー！（後書き）

次回 千冬さんに今度こそ勝つ！

加津佐、まだまだだな

くそっ！ 早い

二人は泳ぎの勝負をしている。どちらが勝つのか。

千冬さんに今度こそ勝つ！（前書き）

まあ初めはオリジナルです



千冬さんに今度こそ勝つ！

ざあざあと波が流れる。そこにふたりの戦いが始まった。

「それじゃ織斑先生、向こうの島にタッチしてこちらに帰ってきた方が勝ちです。負けたら相手に命令でokですか？」

「いいぞ。その条件で」

(加津佐、私に勝てると思うなよ)

「よいドン！」

とともに俺と織斑先生は水の中に飛び込む。

ここは完璧にクロールじゃないと負ける。と思って俺はクロールをする。

バシャ！ バシャ！

と水を蹴りながら前に進む俺。だけど織斑先生はどこにもいない。

次の瞬間目の前を見ると

「加津佐、まだまだな」

「くっ！ 早い」

そういつの間にか織斑先生が俺の前にいた。なんて早さだ。

だけど織斑先生に命令出来るのなら俺は！

さらに俺は速度をあげる。島に到着

だけどその時織斑先生はもうリターンしていた。

「やっぱり凄いな千冬さん」

俺もダツシユで戻る。

「うおおおおおお！！！」

バシャバシャバシャと織斑先生に近づく

「追いついた！」

「なかなかやるな。だが私の勝ちだな」

俺と同じ場所に貴方はいるんだ。だから俺が前に出れば

シユと確かに聞こえた。そう俺の隣にいた織斑先生はもうそこには  
いなかった

まさか………な。と前見ると

「嘘だ！」

もう着いていた。織斑先生凄すぎだ。俺がこの人を超えるときはい  
つになるのかな

「はあはあ、負けたー」

「加津佐、お前はもっとトレーニングをした方がいいぞ」

「言われた無くてもしてます!」

「ははは」

と笑う織斑先生。なんて眩しい笑顔だ。 可愛いぞこれ

「それじゃ私たちも行くか」

「そうですね」

と言って旅館に戻ることにした。

(やったー織斑先生、勝った時の条件忘れてる)

「言い忘れていたな」

「え?」

「うーん、そうだな・・・ビール10ケースで手を打とう」

「そんなー!!!」

と叫ぶ加津佐であった。

「アルファデータ書き換え75パーセント。これでアルファは私の

}

< 一夏視点 >

時間はあっという間に過ぎ、現在七時半。大広場に三つ繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。

「うん、うまい！ 昼も夜も刺身が出るなんて最高だなあ」

「そうだね。ほんとIS学園って羽振りがいいよ」

そう言っつうなずいたのは俺の右隣に座っているシャル。

今は全員が浴衣姿だ。一人を除いて……加津佐だ。あいつだけ私服だ。なんで？

ずらりと並んだ一学年の生徒は座敷なので当然正坐だ。

今日でこれ何回言っただろうか。加津佐には驚かされる。まあともかく料理を食べる

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじゃないか。すげえなおい。高校生のメシじゃねえぞ」

「本わさ？」

「ああ、シャルは知らないのか。本物のわさびをおろしたやつを本

わさって言っただ」

「え？　じゃあ、学園の定食でついているのって……」

「あれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとか言うやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せてあるやつ」

「ふうん。じゃあこれが本当のわさびなんだ？」

「そう。でも練りわさでも最近はおいしいのが多いぞ。店によっては本わさと練りわさを混ぜて出したりするから」

「そうなんだ。はむ」

え？　シャル、今わさびの山を食べなかったか……？

「っ~~~~~~~~!!」

鼻を押さえて涙目になるシャル。な、なにをやっているんだ……

「だ、大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

鼻声で返事をしながら、にこりと笑顔を浮かべようとするシャルだったが、その笑顔は涙目に崩れていまいちに決まっていなかった。

「ぶ、風味があって、いいね……。お、おいしい……」

よ？」

どこまで優等生なんだ、この子は。

「っ……う……」

ちなみに俺の隣ではセシリアがさっきからずっとこんな感じでうめいている。どうも、正坐が苦手らしい。一向に食事が進んでない。

「大丈夫か？ セシリア。顔色よくないぞ」

「だ……い……よう、ぶ……ですわ」

うん。すげえ大丈夫じゃないっぽい。とうか、そんなに苦手なのか、正坐。

次第にプルプルと震えだしたセシリアは、しかし英国人としてのプライドなのかなるべく平静を装って橋を手にした。

「い、いただき……ます……」

ず、ず……と、味噌汁を飲むのに難儀している

<加津佐視点>

俺の目の前で食事をしているのは……その筈です。なんでだ

ろうか？

俺等に対して……なんだろうなー、変なんだよな俺。

「これ、美味しいな」

とひとり言を言っている

「そうだな、確かにうまいな」

と箸が口にしながら言う。待つてなにこの距離、凄く変な感じがするともかくだ飯を食ってとっと風呂に入って部屋に退散しよう。

バクバク

と食べる

「これも美味しい」

あっという間に俺の食事はすんだ。もの見事に5分でおなかの中にしまった。美味しかった

そのころ一夏たちの方では『セシリアずるい。織斑君にご飯食べさせてもらってる』とか聞こえた。まあそのあと

『お前たち静かに食事することはできんのか』

その声に場の全員が凍りつく。凄いです千冬さん

まあ一夏も箒を探していたのだが、箒に知らんぷりさせられて、  
夏の中のことはこうだろう（なんで箒の奴怒ってんだ）と

まあいいや、風呂に入りに行く俺と一夏



千冬さんに今度こそ勝つ！（後書き）

次回 一夏のマッサージと加津佐の女子との遊び

加津佐くんこれしよ。とトランプ他にも……やめてくれ！！！！

と叫ぶ加津佐

一夏さん、痛いです。す、すまん

一夏に何があったのか、そんなことより加津佐は一体どうなるのか

次回に続く

一夏のマッサージと加津佐の女子との遊び（前書き）

すいません。展開を少し急にしました。

一夏のマッサージと加津佐の女子との遊び

<  
>

「なあ一夏」

「なんだ加津佐」

「俺と部屋変わらないか？」

「遠慮しとくよ」

即答かよ！ もう少し考えてくれてもいいだろ

「まあいいか、そろそろ上がるうぜ」

「おっ」

風呂をでて、着替え俺は部屋に戻る。一夏も部屋に戻る

<加津佐視点>

風呂から戻ると

「ねえ、加津佐くんも一緒にやるうぜ」

と女子一同が言ってくる。まあトランプくらいなら

「いいよ」

と返事をしてしまった。そう俺はこの時本当の女子の気力を知る

「じゃー、ポーカーしよう」

「ポーカー？」

「うんうん」

「いいよ」

女子一同とやる。俺の隣にいるのは、本音さんことのほほんさんだ。

「じゃ俺がシャッフルするね」

そう確かにこの時俺がシャッフルしたはずなんだ……なのに

「ロイヤルストレートフラッシュ」

四人が同時に俺にカード見せてくる。確かに数字はそろっている。

なんで、俺の手元のカードは、23456なんだ。しかも全部バラバラ最悪だ。

「じゃあ次のゲーム行こう」

「なにするの？」

「王様ゲームしよう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

王様ゲーム、ってあれ、みんなに命令できるといふあれ

女子の視線が明らかに俺を狙っている目をしていた。絶対に勝たねば

「・・・・・・・・王様だーれだ」「」「」「」

「わたしだ！」

とのほんさんが手を上げる。

なんだのほんさんかと俺は安心する。だけどこれが間違いだった。

「一番の人が五番の人にお菓子をだべさせてあげる」

そうこの時は、俺の数字は・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・え」

そう手元を見ると・・・・・・・・一、俺の電話から着信　リ電話が流れたのではないかと心配する俺

やめてくれ-----!

!-----!　俺を殺さないで!-----!

「それで五番は？」

「私です！」

少女の名前は、月島という少女だ。

「ごめんね」

「い、・・・いえ」

と言ってお菓子を食べさせてあげる。凄く恥ずかしい。  
そして『次、行こう！！！！！』

と女子一同は言う

もうやだ誰か助けて！！！！！！ と俺は叫んだ。心の中で

< 一夏視点 >

「ふゝ、さっぱりした」

食後に温泉。なんという贅沢だろうka .

海を一望できる露天風呂を二人で使ったおれたちは、かなり上機嫌

で部屋へと戻ってきた。

(千冬姉も温泉かな?)

部屋にいないところを見ると、たぶんそうだろう。と、ちょうど千冬姉が帰ってきた。

「ん？ 一人か？ 女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつだ」

「だから……はあ、もういいよ。それは」

大体、この部屋は一応も何も『織斑先生』の部屋な訳で、いかがわしいことを目的にそんなことをしようものなら後でどんな目に遭わされるかわからない。

ちなみに、やっぱり千冬姉も温泉に行っていたみたいで、その髪はしっとり濡れている。艶のかかった黒髪は、相手が姉であったも妙にドキドキとってしまった。

「なあ、千冬姉」

ごすつ。鋭いチョップが飛んできた。

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それはいいじゃん。ふたりきりだし、風呂上がりだし、久しぶりに」

<加津佐視点>

「ねえ、俺そろそろ行かなきゃいけないんだけど……」

と俺は女子一同に言う。簡単にこつ返事が返ってくる。

まあ嘘だけど

「後少しだけ」

とだから俺はこの場を逃げた。

「じゃね」

「あー、きつきーが逃げた」

「「「えー！」「」」

そいやー、セシリアの奴、さつきめちやくちやにされていたな。その後どこかに行ったな。たぶん一夏のところだろう

まあいいや、早く織斑先生の所に行こうと

ともかくダツシュで向かう。なぜなら女子に見つかれば、ゲームの始まりだから

あ、待てよ確か織斑先生との命令でもう一つ言っていたな。あれ言いたくないなー



先回りして、織斑先生のところに行つてよつと

コンコン

ガラスからノックして

「だれだ？」

「俺だ開けてくれ一夏」

「なんだ加津佐か、ドアから入つてこいよ」

「そつだぞ加津佐」

げ！　なんで織斑先生がいるんだ！？

「それは……その……無理です。開けてください」

「仕方ない奴だな」

と織斑先生がドアを開ける。

その後、織斑先生は一夏にマッサージの続きをしてもらっていた。

「加津佐、約束忘れるなよ」

やはりここに来たか！

(なんのことだ？　千冬姉と加津佐……なにかあつたか？)

そう俺が命令でもう一つ後で言われたことは、一日の間私の事を千冬姉と呼ぶことだった。仕事の終わりだけだけどね

<セシリア視点>

「うっ、うっ……ひどい目に遭いましたわ……」

結局もみくちやにされたセシリアは、未だに傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた

(でも、これでやっと　　!!)

一夏の部屋へと行ける。そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛んだ。崩れた服装も、わずか十秒で元に戻る。

(の、喉の調子もしておきませんと。ん、んっ)

セシリアは浮かれているのが歩調に表れている。今にもスキップしそうな足取りは、だんだんと早足になって目的の場所へと向かった。

ところが。

「……………」

「……………」

部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が二名。

「鈴さん？ それに篝さんまで。一体そこで何を」

「シッ！！」

鈴がそう言うなりセシリアの口を塞ぐ

状況がわからずにもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえてきた。

『千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる？』

『え！？ そうなの千冬姉』

まさか！？ 加津佐が千冬姉の事を姉と呼ぶとは、何があったんだ本当に

『そんな訳あるか、馬鹿者。 んっ！ す、少しは加減をしろ・

・・・』

『凄いな一夏』

『はいはい。 んじゃあ、こじは・・・』と

『くあっ！ そ、そこは・・・やめっ、つうっ！！』

「すぐに良くなるって。 だいが溜まってたみたいだし、ね」

「あああっ!」

外から誰かの気配がする。……箒と鈴とセシリアか、なんで入ってこないんだ?

「ねえ加津佐、これからちよつと外に行かない?」

いきなりフリアの声が聞こえてびっくりした!

(別にいいけど、何か用事か?)

「うん。そう、……貴方とのお別れのね」

最後の声が聞こえなかった。

……。

「じ、じ、これは、一体、何ですの……?」

ひくひくと口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながらそう尋ねるセシリア。

「……」

「……」

鈴も箒も、ずーんと沈んだ表情をしている。その様子はまるでお通夜さながらだった

『じゃあ次は 』

『俺これから外に散歩に行つてきますね』

「一夏、加津佐、少しまで」

三人の声が途切れる。あれ？ と思ってドアにびったりと耳を寄せた三人が

バンツ！！

「くくくへぶっ！！」「くく」

思いつきり、ドアに殴られた。

打撃の刹那、反射的に漏れた声は十代女子にあるまじき響きをしていた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは………」

「じゃ、俺は行くんで」

と言って加津佐はどこかに行った

「じ、こんばんわ、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ!!」

脱兎のごとく逃走開始

が、すぐに捕まった。

<加津佐視点>

現在山の中を歩いている。フリーアが俺に話があると言っので

「それで、ようつてなに?」

「IS展開してくれる?」

「敵か!？」

「違う。ただISを見たくて……これで私の物……  
アルファ……ごめんね」

ん? まあいいかとISを展開する

いきなりである。俺の体に電流が流れてくる。

「うわぁぁぁぁ」

(なんだ？ 今の電流……)

そうこの時俺のISが立って浮いていた。装着もしてないのに、さつきまで装着していた俺のISが

「え？」

「加津佐、ありがとね。この機体を覚醒させてくれて」

目の前にいたのは、間違えなくフリーアだ。人間の姿をしたフリーア

「フリーア、何言っているんだ？」

「残念でした。貴方は私の道具に過ぎなかった。ありがとね愚かな人間」

「あははは、何冗談言っているんだよ……嘘だろ」

(ごめんね、本当にごめんね加津佐)

「バカな人間奇跡 加津佐くん、素晴らしい道具だったよ。そうだ！ 言い忘れてた。貴方の地球もう壊したから」

「!?!?」

頭の中に横切る幼馴染の顔と友達顔

「そんな訳ない。俺の地球はまだある！」

「貴方の星壊したとき、楽しかったよ。加津佐の友達のえーと・・・  
・美由紀だったかな、あれが『弟だけは助けてとか言ってた』  
ついつい笑っちゃったよ。命ごいだよ。面白いよね」

「嘘だ！ 美由紀が・・・死ぬわけない」

「これ」

と投げってくるペンダント。これは俺が誕生日に美由紀に上げたプレゼント

「そ・・・んな」

フリーアがそんなことをする訳がない。俺は俺に言い聞かせるが目の前にいるのは確かにフリーアだ。

何がどうなってんだよ!?

「加津佐、いや人間お前にチャンスあげる。明日の11時、一人でここから30キロ離れた場所に小島がある。そこで私はまっている。こない場合、ここいる地球人を全て殺す」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!?!」

「さよなら」

と言ってフリーアはアルファを装着した状態でどこかに飛んで行った。

嘘だ！ 嘘だ！ 嘘だ！ フリーアはそんなことしない！



だけど手元にあるのは確かに美由紀のペンダントだ。

そして加津佐は怒りが限界に達する。

「フリーアー!!! 俺はお前を殺す!!!」

と大きく叫ぶ加津佐。

(そう。貴方はそれでいいの)

その後、織斑先生から電話があり一夏の部屋に向かう。

<一夏視点>

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えっ!」「」」

予想外の言葉に目を丸くする三人。

「ああ、そつだ。他の二人　　ヴォーデヴィツヒとデュノアを  
呼んで来い。加津佐は私から連絡する」

ぴびび

「加津佐、私だ今すぐに私の部屋にこい」

『・・・・・・・・・・・・・・・・わか・・・・・・・・り・・・・・・・・ま・・・・・・・・した』

ん？ 加津佐？

電話を切る千冬姉

「おお、セシリア。遅かったじゃないか。じゃあはじめようぜ」

ぽんぽんとベットを叩いてセシリアを呼ぶ一夏

それに対して、セシリアはあまりにもストレートな誘いにポツと真っ赤になった。

「え、あの、織斑先生もいらっしやいますし、その・・・・・・・・」

「？ 別にいいじゃないか。俺も体が温まってるし、早くはじめよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、雰囲気・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？」

いまいちセシリアの言葉の意味がよくわからない一夏。

どうにも困ったセシリアがちらりと千冬を見ると、向こうは向こうで「私に構わずはじめろ」

と無言で告げてきた。

(か、構わないなんてできるわけないでしょうに……！)

しかし、埒がない。しかも先ほど千冬はシャルロットとラウラを呼んでくるように言ったので、このままだとますます大変な事態になっってしまう。

(うつうつ……！ お、女は度胸、ですわ……！)

そう心の中で叫んで、半ばヤケクソ気味にベットに横たわる。

ドクツドクツと高鳴る胸は今にも張り裂けそうなので、セシリアは期待と不安に踊らされたままぎゅっと目を閉じた。

「……………」

けれど、何もはじまらない。

ああれ……………？ と思って右目を半分だけ開けると、一夏が口を開いた。

「セシリア、うつぶせじゃないとできないぞ」

「え？ え？ う、うつぶせで……しますの？」

「うつ」

「そ、そうですか……」

本では読んだのと違うことに築くが、もしかしたら日本ではそうするの一般的なのかもしれないと自分を説得させるセシリア。

「じゃあ、はじめぞー」

「はっ、はいっー!」

思わず裏返ってしまった声を恥じらうような余裕はもうない。

「ん、しょっ……」

ギユウウウウウウ~~~~ツ。

「!? いたたっ、いたっ! い、い、一夏さん!? な、な、なにをして あううっ!」

「何って、指圧」

「し……あっ……?」

「そう、腰の」

「腰の……」

きよとんとしたセシリアは、一夏の言葉をオウム返しにする。

「え、ええと、一夏さん。部屋に誘ったのは、もしかしてこの……」

「おう。マッサージをサービスしようと思ってな。セシリアって斑部屋だろ？ それじゃ落ち着かないだろうから、この部屋に呼んだんだ」

・・・・・・・・・・。

カア、と。カラスが鳴いた。そして心の中でセシリアが泣いた。

「ぶ、無様です・・・・・・・・わたくし・・・・・・・・」

「う？ ど、どうした。そんなに痛かったか？」

「ええ、とても・・・・・・・・」

「そ、そりゃ悪かった。すまん。優しくする」

「もう何でもいいです・・・・・・・・」

深い深い、闇より深いため息を漏らしたセシリア。それと一緒に魂まで抜けてしまっているかのような  
マッサージがはじまるとその心地よさと一夏との会話もあって、自然と気分が回復した。

「これくらいだったら大丈夫か？」

「ええ・・・・・・・・。気持ちいいです・・・・・・・・」

「それにしても、腰のコリがひどいな。セシリアって何かやってるのか？」

「んっ。ええ、たしなむ程度にバイオリンを。そ、そこは、ちょっと苦しいです……」

「はああ……。一夏さんって上手ですね……」

「まあ、昔から千冬姉にしていたしな、マッサージは」

「……それと、女の扱いも……」

わずかに批難を含んでいる声は、けれど一夏には聞こえないように小さく響く。

「じゃあ、このまま背筋を上に行くからな」

「はい……。お任せいたしますわ……」

そのころシャルとラウラを呼びに行った箒と鈴は

<箒と鈴視点>

ガラガラ

「ラウラとシャルロットいる？」

「いるよーって鈴と箒どっししたの？」

「いや、織斑先生がお前たちを呼んで来いと言ったのでな」

「分かった。今すぐ向かう」

「そうだね。行こうラウラ」

元気なシャルロットさんでした。

廊下を歩いていると反対側から加津佐の姿が見えた

「か、加津佐」

と箒が加津佐の名前を呼ぶが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない。何かおかしいのでそのまま加津佐に近づく私たち

肩を叩くシャルロット

「加津佐？ 大丈夫？」

「あ！ シャルロットに箒に鈴にラウラ、どうしたの？」

加津佐何かが変わだと思おうシャルロットと箒。

そして箒はある異変に築く

「！」

(加津佐の手首にISがない)

視線に築きすぐに加津佐は腕を隠す。

「早く行くぞ。シャルロット、加津佐」

とラウラが呼ぶ

「ああ

「うん

「私を無視しないで！」

そのまま無言で歩く筈。加津佐何かがおかしい……

そして一夏の部屋に到着。

この時も加津佐は無言だった。

<一夏視点>

「「「「「………」」」」」

ドアがゆっくり開いた。



立っていたのは箒に鈴にシャルロットにラウラに加津佐。一人を除いて全員が旅館の服でる。

加津佐は未だに普段着。

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きなのところに座れ」

ちよいちよいと手招きをされて、五人はおずおずと部屋に入る。そして言われたとおり、各人が好きな場所座った。と書いてもベットとチェアに

加津佐はずっと立っていた。

「加津佐も座れ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事なし。そこで千冬は加津佐の頭を叩こうとしたとき

バシッ！ と加津佐に腕を掴まれた

加津佐はそのまま千冬を睨んだ。

「ほう、いい度胸だな。加津」

そうこの時千冬も加津佐の異変に築く。

目が完全に殺しの目に入っていた。

「どうしたんだ？ 千冬姉、加津佐？」

「あ、すみません。織斑先生」

再び普通に戻る加津佐と千冬姉

そこで一夏は

「ふー。さすがに連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ」

「いや、そりゃせっかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」

「どうだかな」

楽しそうに会話をするふたりを見て、全員がやっと状況を飲み込む。

箒は加津佐の方をずっと見ていた。

「は、はは……はあ」

「ま、まあ、あたしはわかってたけどね」

ずるりと脱力する箒と、妙な強がりを見せる鈴。

「まあ、お前はもう一度風呂に行ってこい。部屋を汗臭くされては

困る  
「

ん。そうする  
「

一夏が言った後

「すみません。織斑先生、俺はもう寝ます」

「そうか、分かった」

「あ、加津佐」

「どうしたのシャルロット？」

「これ」

と渡されるネックレス。

「これは？」

「いや、いつも加津佐にちゃんとお礼してなかったから、本当にありがとう加津佐」

「いや、俺がしたいからしただけだから」

「うん」

「それじゃあね」

「うん」

再び無言のまま加津佐は部屋に戻った。

やはり変だな加津佐。

加津佐一体何があつたんだ？

<一夏視点>

「気持ちいな〜」

一人呑気に露天風呂に入っていた。

まあ説明しよう。ここの露天風呂は肩こりにいいそうだ。

説明終わり

<千冬視点>

「ほれ、ラムネとオレンジジュースとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言われたものの、順番に篝・シャルロット・鈴・ラウラ・セシリアと受け取った全員が渡されたもので満足だったために交換会は

開かれなかった。

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にする。

女子の喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言つて千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、星マークのキラリと光る缶ビールだった。

プシュツ！ と千冬はビールを口にいった

「……………」

全員が啞然としている中、千冬は上機嫌な様子でベットにかける。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

ラウラは目の前の状況が信じられずに何度も何度もまばたきをして

目の前の光景を否定していた。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらい飲むさ。加津佐だってワインなら飲むんだぞ！ あれは私が無理やり飲ませたが、なんの話をしているの？」

「でも、その……」

「仕事中なんじゃ……」

ラウラはぼかんと開いた口から何も言葉が出てこない。代わりに、ブラックのコーヒーをこくりと嚥下する。

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そう言ってニヤリとする千冬は、全員の手元をざつと流し見る。そこでやっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あっ」と声をもらした。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ本題を話すか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、またぐぐつとビール飲む。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、と言ってはいるが全員が誰を指しているのかわかっていた。

一夏　　しかない。

「私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

と言ってラムネを預けながら等。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もごもごと言う鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

さっきの行動の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、三人はぎょっとしてから

「」「言わなくていいです！」「」

その様子をはっはっはっと笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを預ける。

「僕　あの、私は……やさしいところ、です……」

ぼつりとそう言ったのはシャルロットだ。

「ほう。しかしなあ、あいつ誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

「で、お前は？」

さっきから一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ、まだ加津佐の方が強いぞ」

<一夏視点>

「ハックション！ うゝ少し浸かりすぎたかな？」

まだ風呂に入っていた。

<千冬視点>

にべもない。しかも加津佐の方が強い。確かに……だが一夏には一夏しかないものを持っている。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

そうかねえ……と言う千冬は、二本目のビールを空ける。



「まあ、強いが別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

「そつだろ、オルコット？ と話す振られたセシリアは、赤い顔をしてうつむく・うなずく。」

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

え！？ 全員が顔上げる。それからおずおずと、箒以外の全員尋ねる

「くくく、くれるんですか？」「」「」

「やるかバカ」

ええ〜・・・と心の中で突っ込む女子一同。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分で何とかして見せる、ガキども」

三本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情でそう言った。その後

「それでお前ら、加津佐の事はどう思う？」

「僕的には、お兄ちゃんって感じですかね」

とシャルロットは言う。

「確かにな。いつも無理をするからな」

「私も同じです」

とラウラも言う。ほほうと千冬は言う

「わたくしは……その……」

つまったセシリア。そのまま飛ばす千冬

「あたしは、加津佐は親友かな」

と鈴は言う。(本当に加津佐凰の記憶を消したんだな)

「私はその待ってるんです」

「何を？」

皆が筭を見る。

「それは……その……いろいろです」

なんだそれーと皆は言う。

そのころ一夏は

「ほんといい湯だな」

まだ入っていた。

<加津佐視点>

ガラガラと部屋に戻る

「きつきーお帰り」

「……うん。俺これからやることあるから」

と加津佐はP Cモニターをつけて、何かを始める。

明日の戦いにそなえて加津佐はI Sの機能を強化するプログラムを作っている。

一夏のI Sを借りてでもフリア……いや宇宙生命体を殺す。

待ってるよフリア。俺はお前を絶対に許さない。

一夏のマッサージと加津佐の女子との遊び（後書き）

次回 始まりの戦い前編

次に加津佐がのる新のISの武器の候補をください。

**始まりの戦い前編（前書き）**

すいません。急遽変更します。

すこし長くなりそうなので

## 始まりの戦い前編

<加津佐視点>

朝俺はすぐに部屋を出て山に入った。

「どうして……俺は……呑気にここにいるんだろっ？」  
ぶつぶつとひとり言を言っている

電話が鳴った。

「あ、もしもし」

『加津佐、織斑先生が集まらだつて』

「わかった。それより一夏……貸してくれなか？」

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験軍用とデータ取りに追われる。

特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「よつやく全員集まったか。」

おい、遅刻者」

「は、はいっ」

「……はい」

千冬姉に呼ばれて身をすくませたのは、意外にもラウラと加津佐だった。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

加津佐はずっと無言のまままで何かを言おうとしない。千冬もその異変には築く

ラウラはそのままコア・ネットワークについて喋っていた。

(加津佐、一体何が言ったと言っただ?)

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう。加津佐、お前は後で顔をかせ」

「……はい」

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員迅速に行え」

はい、と一同が返事する。さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。

ちなみに現在位置はIS試験用のビーチで、四方切り立った崖に囲まれている。ちょっとした秘密のビーチみたいだ。

ドーム状なのが、どこかの学園のアリーナを連想させる。大海原に出るには一度水面下に潜って、水中のトンネルから来るらしい。本当、映画みたいなロケーションだ。

ここは搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的。

当然ISの稼働を行うので、全員がISスーツ着用だ。海だとますます水着に見える。加津佐だけ普段着のままだ。なんで？

「ああ、篠ノ之。お前はちよつと来い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた篁は、千冬姉に呼ばれてそちらへと向かう。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!!!」

ずどどどど………！と砂煙を上げながら人影が走ってくる。無茶苦茶速い。たぶん、ISっぽい何かをつけているからだろうと思うんだが、問題はその人影が

「………束」

だということ。立ち入り禁止もなんのその、稀代の天才・篠ノ之束さんは堂々と臨海学校に乱入してきた。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ　　ぶへっ」



飛びかかってきた東さんを片手で掴む。しかも顔面。思いっきり指が食い込んでいた。

まったくもって手加減のない千冬姉だった。

「うるさいぞ、東」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクロだねっ」

そして拘束から抜け出す東さんもただ者ではない。

よっ、着地をした東さんは、今度は箒の方に向く。

「やあー！」

「……………どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おっきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

箒が東さんに日本刀の鞘で叩こうとしたとき

バシッ！

「……………」

加津佐が受け止めた。だが少し東さんに当たっていた。

「ひどいー！ 箒ちゃんひどいー！」

みんな何が起きたのかわからないが俺の隣にいた加津佐が箒の鞘を受け止めていた。速い！ しかも無言だ

頭を押さえながら涙目になっている東さん。

「……………加津佐？」

と箒が加津佐の名前を呼ぶ、加津佐は振り向くがその目は明らかに……………殺しの目だ。

「!?!」

箒はびつくりしていた。

「東さんに鞘を向けたらだめだ。鞘でも人を殺すこともあるんだ！」  
と怒られていた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外」

「んん？ ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて、他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……………」

山田先生は見事に轟沈。

「おい。東。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の東さんだよ、はー。終わり」

加津佐は少しだけ元気になったみたいだった。東さんが来て元気になった。

東さん、凄いよ

「はぁ………。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつとはひどいなあ、らぶりい東さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

東さん、前デートとした時と同じ服だな

加津佐と一夏は

「一夏、百式のさっきの件、忘れてないよな？」

「ああ、貸すって話だろ。別にいいけど、なんかするの？」

「う、うん。ちょっとね」

「そ、そうか」

その二人と呼ばれる俺と一夏

「それで頼んでおいたものは……?」

ややためらいがちに篤はがそう尋ねる。それを聞いて束さんの目がキラーンと光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ!」

びしっと直上に指さす束さん。その言葉に篤も、上を見る

ズーンッ!

「のわっ!?!」

いきなり、いきなりである。なにやら鉄の塊が上から落ちてきた。うまいことに加津佐はバックステップして回避。すご!

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を俺たちに見せる。

そこにあっしたのは

「じゃじゃーん! これぞ篤ちゃん専用機こと『紅椿』! 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ!」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉んい応えるかのように動作アームによって外へと出てくる。

新品のISだからだろうか、太陽の光を反射する赤い装甲がとても眩しい。　　って、東さんさっきなんかとんでもないことをさりと言わなかったか？

全スペックが現在ISを上回っているって………それってつまり、最新機にして最高性能機じゃないか。

「さあ！ 篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！ 私が捕佐するから直ぐに終わるよん　　後、かづくんはIS出してね」

と東さんが言う

「………それでは、頼みます」

篝はそのまま言ったのだが

「………すいません、ありません」

小さくて聞こえなかった。

「はやくー！」

と東さんは言う。

「加津佐、早くISを出せ」

千冬姉も言う。

「ISはありません。すいません」

加津佐の口からありえない言葉が出てきた。

全員が驚いた顔をしている。そりやそうだ、加津佐がISがんだいと言ったんだ。……え!?

「加津佐なにを言っている?」

「………すいません」

「あははは、やっぱり昨日飛んで行ったのはかづくんのISだったか」

「なに!?!」

千冬姉は驚く。皆が加津佐の腕を見る。

「加津佐、説明してもらおうぞ」

「東さん、山田先生、織斑先生、向こうで話しましょう」

三人は加津佐に付いていく。

「ごめんね、篝ちゃん、少し待ってね」

< 一夏視点 >

「一体、加津佐になにがあったのだ?」

ラウラは一夏に尋ねる。

鈴は少し頭を抱えていた。

「俺にもわからない」

「僕も」

「私も」

「私もですわ」

「私も」

情報なしか

(加津佐………のことを考えると頭がいたくなる)

<加津佐視点>

昨日、なにがあったのか全て話した。

「だから………俺は、一夏に百式を借りて行くことと思ったんです」

「今日の11時………か」

「おもしろいお話だね。かづくん」

「そんな！」

山田先生は今にも気絶しそう

「だから俺は行きます。打鉄貸してください。織斑先生」

そして隣にいる束さんが

「大丈夫だよ　かづくん、私天才だね。向こうに行こう！」

束さんにみんなのところに戻される。

「お、戻ってきた」

「それじゃあ、かづくんの本当の専用機のお披露目だね」

「なに！？」

「え？」

千冬姉と加津佐がびっくりしていた。

さらに束さんが大空に手を上げるとまた上から鉄の塊が落ちてきた。

ドカーンッ！

「さあさあ、かづくんの本当の専用機こと、オメガだよ。紅椿どう  
ようの第四世代型ISだよ」



加津佐は驚きながらISに近づく

「でも……俺、ISのコア持ってません」

「大丈夫だよ。そのISにはかづくんがもっていたISのコアが入ってるから」

「だが束、それはアルファに入っていたのでは？」

「残念、あれはコピーだよ。かづくんのコアデータが凄いからコピーしようと思っただけ二つのコアになったちゃった」

頭を叩く束さん

「だけど凄いね。私天才。それじゃフィッシングはじめよう。かづくん」

「はい。それじゃあ、勝負しよう束さん、勝ったら相手に命令でいいでしょうか？」

「いいよ。私負ける気ないよ」

「大丈夫です。俺もこの何カ月かで成長しましたから」

「それいじゃ行くよ」

カタカタとびびりとなるモニターディスプレイ、この二人おかし

「なにあれ、速い」

「だな」

「すごいですわ」

二人とも全力でやっているが残念ながら

「はい、フィッティング終了。超速いね。さすが私」

「くそっ！ 負けた。それでなんですか？」

「え〜とね、かづくんのデータが欲しい」

俺はポケットにあるUSBを束さんに渡す

「どうもね〜」

俺もISのフィッティング終了。

「いつくん百式見せて」

「え、あ。はい」

全部のディスプレイとキーボードを片づけ、一夏の方に向く

（ 来い、百式 ）

その念に応えるかのように強い光を放つ百式。さらに空中に光の粒子が発生し、それらが集まって輪の形になる。

俺の専用機『百式』。接近戦闘に特化した機体で、武器は格闘ブレ

ード 雪片式型 が一本。後付装備お断りのわがままボディだ。  
って、そりゃ意味が違うか。

「データ見せてね。うりゃ」

言うなり、白式の装甲にぶすりとコードを刺す束さん。すると、またさっきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がる。

「んゝ……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？ 見たことないパターン。いつくんが男のだからかな？」

「ああ、俺もそれ思いました。一夏の白式を前見たときに」

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺と加津佐がISを使えるんですか？」

「ん？ んゝ……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？ ちなみにかづくんがなぜISを使えるかはわかる」

もしかして束さん、言う気じゃ……

「なんですかそれは？」

女子一同が聞く。

「簡単。かづくんが束さんの事を好きだから」

土壇場でこの人何言ってるんだ!?

「・・・・・・・・え!？」

「冗談だよーちゃん、わかってる内緒でしょ」

ふーよかった。

一夏は

「いい訳ないでしょ・・・・・・・・」

「にはやは、そう言うと思ったよ。んー、まあ、わからないならわかんないでいいんだけどねー。そもそもISって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

うわー、何の解決にもならなかった。でも加津佐のことを秘密にしているな。千冬姉と山田先生と東さん、一体加津佐は何者なんだ？

435

<加津佐視点>

戦いにそなえてISの調整をしている。

「ん？ リミッターがかかっている。東さんありがとう。でも俺は」

カタカタと俺はリミッターを解除する。

シールドエネルギー7000、よしおkだ。武器は・・・・接近ブレード閃光、左肩に付いている武装・・・・タクティクス？

タクティクスにビットがついてる。エネルギーウィング、すごいな束さん。と関心する加津佐。

<一夏視点>

話をもどして

「ちなみに後装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよ」

「え……ええ！？ 白式って束さんが作ったんですか！？」

「一夏のやつ驚いているな」

「うん、そーだよ。っていつても欠陥機としてпойされてたのをもらって動くようにいじっただけだねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？」

「超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そーいう機体らしいよ？ 日本が開発してたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

後ろの方で加津佐が笑っていた。元気になってよかったとみんな安心する。

「いたた。はー、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も凄い激痛だね」

「やかましい」

さらにもう一発べしん！ と東さんが叩かれたとこれで、一人の女子が東さんに声をかけた。

「あ、あの！ 篠ノ之博士の高名はかねがね承っておりますっ。もしよければ私のESを見ていただけませんか!?」

誰かと思えば、その女子はセシリアだった。

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも篝ちゃんとかーちゃんといっくんは数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。」

どういう了見で君はしゃしゃり出てきているのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

突然冷たい言葉。言葉だけではなく視線も、そして口調もかなり冷たい。

「え、あの……………」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「……………」

<加津佐視点>

「ねえ、加津佐」

「どづしたシャルロット？」

「東さんってあんな人？」

「い、いや面白い人。それよりシャルロットのIS見せてくれ」

「う、うん」

と言ってシャルロットはISをだす。

「うん、少しいじってもいい？」

「え!？」

「無駄なところがありすぎるから」

「………うん」

反論できないシャルロット。

(加津佐ってISの整備までできるの!?)

ディスプレイモニターを操作していると幕の試運転が始まるみたいだ。

リヴァイブ?をOSを書き換えながら見る。

< 幕視点 >

「どつどつ？ 箒ちゃんか思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

束さんもISを装備しているだろうか、オープン・チャンネルの会話がこちらにも飛び込んでくる。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

そう言つて空中に指を躍らせる束さん。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説つきー 雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！ する武装だよー」

射程距離はは、まあアサルトライフルくらいかだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

束さんの解説に合わせてかどうかはしらないが、箒が試しとばかりに突きを放つ。右腕を右肩まで持って行って構える、篠ノ之剣術流二刀型・盾刃の構え。

攻防どちらにも転じやすく、刀を受ける力で肩の軸を動かして反撃に転じるという守りの型。

そこから突きが放たれると同時に、周辺の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、そして順番に光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。



「次は空裂ん。こっちは対集団使用の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよ。振った瞬間に自動で展開するから超便利。」

それじゃこれ打ち落としてみてね、ほーいっ」と

言うなり、束さんはいきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出す。光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

「箒！」

「やれる！ この紅椿なら！」

その言葉通り、右脇下に構えた空裂を一回転するように振るう箒。またあの赤いレーザーが、今度は束さんの言葉通り帯状になって広がり、十六発のミサイルを全弾撃墜した。

「すげえ……………」

<加津佐視点>

「さすが箒だな」

「ん？ なにが」

とシャルロットは俺に質問する。

「まず箒の剣術は多分俺より強い。だから」

「え！？ 加津佐より箒の方が強いのか？」

「多分ね。でも今の剣技をみて覚えたから大丈夫だ」

「……………」

とシャルロットと話していると

「次はかづくん番だよ。そっちはだれ」

またきつい目線を送る。だけど

「ああ、俺の妹に……………なったのかな……………シャルロットです」

「ど、どうもよろしくおねがいます」

「なんだーかづくん、妹できたんだ！ じゃあ私の妹でもあるね」

えーと言うシャルロット。

「早くかづくん、装着して、そっちは私が終わらせておくから」

「了解」

一度ISをしまい再び展開装着する

(来い、オメガ)

心のなかで呟きISを装着する。

「それじゃかづくんはこれでいいよね」

と言って再びミサイルポッドを出す東さん。その数………50  
!?」

「いいですよ。いつでも」

「加津佐、大丈夫か？」

空を舞う加津佐、その羽はエネルギーの羽。綺麗だった。

「!?!」

すごい速度で急上昇する加津佐、多分紅椿より早い

「すごいね。かづくん。リミッター外したかー」

「リミッターなんだそれは？」

「かづくんのIS私が作ったはずなのにとっても危険なんだよねー。  
あれ前私の研究員を載せたら骨をポックリ行っちゃてさーリミッタ  
をかけたの、でもかづくんそれはずしてるの」

「なに!?!?!」

現在上空にいる加津佐。

「すごいぞこのIS。凄く馴染む」

『いくよー』

と東さんの合図と共にミサイル50発が発射される。

そう加津佐は動かない。

「確かこういう感じだったよな」

それは先ほど箒が使った。篠ノ之剣術流二刀型・盾刃の構え。

加津佐の手には肩に付いていたタクティクスを右手に剣のように持つ。左手には閃光を持つ。

「そんな!？」

箒も驚いていた。

「確かこんな感じで」

ISのシールドエネルギーを一転にため放出。あっという間に50発のミサイルが壊れた。

「さすがかつくん。ちーちゃんの技を一回見ただけで覚えるだけのことはある」

と自慢そうに東さんが言う。

「え! マジで千冬姉」

バシッつと一夏は叩かれる。

「織斑先生だ。ああ加津佐は私の剣技を見て少し訓練しただけで覚えた」

「加津佐、すげ」

降りてくる加津佐。

そして山田先生が

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

いきなりの山田先生の声に、千冬姉は鋭い視線をやめて向き直る。

いつも慌てている山田先生だが、それにしても今回はその様子が尋常じゃない。

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

渡されたのは小型端末の、その画面を見て千冬姉の表情が変わる。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、ハワイ沖で試験稼働をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すいませんっ……………」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり……………席していますが……………」

なにやら、千冬姉と山田先生は小さな声でやりとりをしている。しかも、数人数の生徒の視線に気がついてか、会話でなくなんと手話でやりとりをはじめた。

(う？ 普通の手話じゃない……………。もしかして、軍関係の暗号手話なんだろうか)

「嘘だろ！ こんな時にそれは……………おかしい」

加津佐はなにやら先生たちの手話を見て、言っていた。

「加津佐、わかるのか？」

「ああ。教えてもらったから、それにこれはお前らの仕事だ」

なんのことだ？

そして話しが終わり

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。 全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬姉はパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「弦時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内で待機すること。以上だ！」

「え………？」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って………」

「状況が全然わかんないんだけど………」

「すぐにわかる」

加津佐ははつきりと発言した。

「とつとに戻れ！ 以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！ いいな!!」

「……はっ、はいっ!!」

全員が慌てて動き始める。加津佐はみんなを安全に誘導をしている。さすが

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、デユノア、ボ―でビィツヒ、凰、篠ノ之！ それと、加津佐も来い」

「了解」はい！」

妙に気合の入った返事をしたのは、今し方俺の隣にいた箒だった。

そうか、箒もこれで専用機持ちになったんだ。

（でも、大丈夫なのか・・・？）

なぜだか俺はそんなに不安になっていた。

<  
>

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、俺たち専用機持ち全員と教師が集められた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空城より離脱したとの連絡があつた」

いきなりの説明に、俺は面食らつてばかんとしてしまい。・・・  
え？ 何？ 軍用IS？ それが暴走？ なんで俺たち連絡が？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員が全員、厳しい顔つきになっていた。



俺や箒とは違う、正式な国家代表候補生なのだから、こういった事態に対しての訓練も受けていたのかもしれない。

特に加津佐は、実戦があるから凄く厳しい顔をしていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空城を通過することがわかった。時間にして五十分後。

学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった」

話を進める千冬姉。その次の言葉は思ってもみないものだった。

「教員は学園の訓練機を使用して空城及び海城の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

は、はい？ つまり暴走した軍用のISを 俺たちで止めろって！？

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは拳手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

未だに状況が飲み込めずにいる俺に対して、セシリアをはじめ代表候補生の面々と教師は開示されたデータを元に相談をはじめめる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と起動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。ちょうど本国からリヴァイブ用の防御パッケージが来てるけど、連続して防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない」

セシリア、鈴、シャル、ラウラは真剣に意見を交わしている。

「加津佐、お前の意見を聞きたいのだが」

千冬姉は加津佐に尋ねる。

「……正直の事を話してもいいですか？」

「ああ、構わん」

「俺のオメガだと普通に倒せるでしょう。問題なのは俺が行けない

というところでしょうか、この中で俺の次に一番の格闘の攻撃力を持つ誰かがいかないと」

さすが加津佐だ。俺だと余裕だつて実戦経験のおおいい加津佐ははつきり応える。

でもなんで行けないんだ。その言葉に全員は一夏を見る。

「え………？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろうし」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ お、俺が行くのか!？」

「………当然」

五人の声が見事に重なった。

「そろえて言うな！」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

千冬姉にそう言われて、俺はわずかに腹立った。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが」

といったところで加津佐が

「それなら俺が途中まで送ります。それに作戦なら束さんが考えています」

「なに!？」

そしてその言葉通りに

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

しかも、声が出た方向を……天井だ。

「……山田先生、室外へと強制退去を」

「えっ!？ は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあはず降りてきてください……」

「とっつ」

くるりと空中で一回転して着地。……ピエロだ。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといいい作戦がが私の中にナウ・プリンティング！」

「……………出て行け」

頭を抑える千冬姉。山田先生は言われたとおり束さんを室外をに連れて行こうとするが、するりとかわされてしまう。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータをみて！　パッケージなんかなくても超高機動ができるんだよ！」

束さんの言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬姉を囲むようにして現れる。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」

展開装甲……………ってなんだ？

「一夏、これから束さんが説明するか聞いとけ」

加津佐に言われた。

「説明しましよ〜そうしましよ〜。展開装甲というのはだね、この天才東さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

第・・・四!?

始まりの戦い前編（後書き）

次回 始まるり戦い後編

今回は一週間後に更新します。

それではまた次回に

始まりの戦い後編(前書き)

疲れた。ところどころ飛ばして読みにくいと思いますが読んでください。

前回のあらすじ

第四・・・!?



## 始まりの戦い後編

「はい、ここで心優しい東さんの解説開始。いつくんのためだね。へへん、嬉しいかい？　まず第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。

次が、『後付武装による多様化』　これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器、あとはAICとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、

現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いつくん理解できました？　先生は優秀な子が大好きです。ちなみにかづくんは5日で覚えたよ」

「は、はあ……。え、いや、えーと……。？」

こんなの5日で覚える加津佐は、凄い

「ちつつちつ。東さんはそんじょそこの天才じゃないんだよ。これくらい三時のおやつ前なのさ！」

三時のおやつ前って……。なんかえらい中途半端なイメージだな……。。

「具体的には白式の　雪片Ⅱ型　に使用されてます。試しに私が突っ込んだ」

「え！？」

この言葉には、さすがに俺以外の専用機持ちも驚いていた。加津佐以外

「それで、うまくいったのでなんとんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍プッシュユだ」

「ちよっ、ちよっと、ちよっと待ってください。え？ 全身？ 全身が、雪片二型と同じ？ それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言でいうと最強だね」

（さすが束さんだ。これなら俺がいなくなっても……大丈夫だな。それじゃ行くかな）

「織斑先生、できるだけ早くしてもらえますか？ もう俺には時間がないんです」

「ああ、わかった」

その後、紅椿の完全ではないことと、白騎士とかいろいろと作戦に付いて話した。

現在滝のある場所で紅椿の調整をする。

「しかし、それにしてもウフフフ。白騎士って誰だったんだろうねー？ ね？ ね。ちーちゃん？」

「知らん」

「うむん。私の予想ではバスト八八センチの」

「ぐすつ。凄い音がした。」

（そうか……織斑先生が……白騎士か……それだ  
けでもしれてよかったな……）

「ひ、ひどい、ちーちゃん。束さんの脳は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったな。これからは左右で交代に考え事ができるぞ」

「おお！ そつかあ！ ちーちゃん、頭いい〜！」

<加津佐視点>

この戦いで俺は……消える。みんなの頭の中から、目の前から  
まあでも、今まで楽しかったからいいかな。最後にみんなにプレゼ  
ントを上げておこ

「なあ、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリア、箒、一夏」

「ん？ なんだ？」

「なんですの？」

「なに？」

「なんだ？」

「どっした？」

「どっしたのよ？」

みんなが同時に俺に言う。息ピッタリ

「もし、俺が帰ってこなかったから……お前らのバッグの中  
見てくれな」

「何言ってるんだよ！？　まるで最後ですみたいな言い方だな」

「そうですわ」

「そうだよ」

「そうだ」

「そつだぞ加津佐」

「そつね」

本当にこれが最後なんだ。ゴメンな……みんな

「冗談だ！　まあこの作戦が終わったらバッグみてくれ」

「おつ」

「」「」「」「」「」「」

織斑先生はずっと俺の方を見ていた。

「加津佐、来い」

「はい」

そして束さんは篝のISの紅椿の調整にかかった。

俺は織斑先生に付いていく。

「それで、なんですか？」

「加津佐、お前この戦いが終わったら消えるんだな」

「!?!」

少し俺は無言になるが

「そんなことあるわけじゃないですよ。俺はここ……に……います」

「嘘だな。お前はいつも嘘を付くとき悲しい顔するから分かる」

「……さすがですね。確かに消えます」

「……加津佐、お前は生きなくてはならないぞ。デュノアを一人にする気か？」

「それは……記憶を消すから大丈夫です」

バシンッ！

思いっきりほつぺたを叩かれた。

「加津佐いい加減に記憶を消すのはやめろ。お前はみんなの中から消えてもいいのか？」

「・・・もう意味がないんです。俺がこの地球から消えれば、みんなの記憶から俺は消える。そして俺と過ごした日々は忘れる」

「なに!?!」

「だから、誰も悲しませないようにするんです。織斑先生も今までありがとうございませう。そして・・・さようなら」

と言って俺は織斑先生に近づき頭に手をこごとすると

バシッ！

腕をつかまれた。

「そうか・・・やはり頭に直接触れなければ・・・ダメのようだな」

「築いていましたか？ さすがですね。そろそろ作戦前ですので俺はこれで」

「一つ言っておく。お前は消えない。それだけだお前はまだ私にピールを買ってないのだから」

俺は歩く中、涙を流してしまった。

<  
>

現在の時刻は十時半

「行くよ。オメガ」

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がぱあつと光に包まれ、ISアーマーが装着される。それと同時にPICによる浮遊感、パワーアシストによる力

「じゃあ、箒、加津佐。よろしく頼む」

「二人とも俺の横に」

「ああ」

「うん」

そして2人が俺の隣にくると俺はエネルギーウィングを最大出威力で展開し、一夏と箒を包む

「一夏、箒の上に、箒、途中からはじき出すからそのままスピードに乗れ」

「了解」

「それじゃ、行くぞ！」

「了解」

俺は一夏と箒を乗せて飛ぶ。

超加速をする。

「はやええ」

「加津佐は大丈夫なのかこの速度？」

「ああ、まあな。なれてるから」

一キロ半分近くで

「そろそろ、パーシするぞ。箒、一夏を届けてこい」

「了解だ」

そして俺は二人をエネルギーウィングから離す。

そのままふたりは前に飛ぶ。

「ありがと……一夏、箒。TORAIRU起動」



一気に俺はフリーアのもとに飛んだ。

<フリーア視点>

加津佐、貴方は私との戦いで強くならなくやいけないの。そう貴方の……さんを開放してあげるのよ。貴方が

だから、私はその為なら加津佐の敵にだってなるよ。

(加津佐、ありがとう私を信じてくれて)

フリーアが思いを決意に変えていると向こうから加津佐が飛んで来た。

「来たのね、加津佐。それがお前の新しいISなんだ」

(まさか！？ 貴方とあの人のISが同じだなんて……………)

「ああ、絶対に俺はお前殺す！」

「約束道理に来たね。それじゃ始めよっか」

互いに接近ブレードを出す。フリーアは極光を俺は閃光を出した。

ガキンツ！ ガキンツ！ ガキンツィイ！

「お前だけは、絶対に許さない！」

「加津佐、弱いね」

「ざけんな！」

タクティクスからビットを射出

「当たれ！」

ピュンピュンとビームがフリーアに向かうが

全てかわされた。

「加津佐、その本当の使い方教えてあげるよ」

フリーアもビットを射出

そして、俺のビットはすべて破壊された。

「そんな！」

「さよなら加津佐」

「ここで終わっていいのか？ 俺はなにもせずに終わっていいのか？  
俺の命よりもみんなを守らないと

（ドククン、ドククン、ドククン）

加津佐のなかで何かが動き始める。

俺の友達を殺したあいつを殺すまでは……生きなくちゃいけないんだ!!

(ドクン、ドクン、ドクン)

その思いに 答え

「俺の友達を殺した、お前なんか負けてたまるかあ!!」

バリッ!

起動。そして完全覚醒の がいま起動する。加津佐の目の色が銀色になる。

「うわああああああああ」

(やっと本当の覚醒をしたのね。その力見せて)

「見えたぞ、一夏！」

「!!!」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。

『銀の福音』はその名にふさわしく全身が銀色をしている。

そして何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼だ。

本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

こんなもんがもし加津佐のISのオメガに付いたら、もう勝てねえ。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

俺は強く雪片二型を強く握りしめる。

「ああ！」

スラスターと展開装甲の出力をさらに上げる筈。その速度はすさまじく、高速で飛翔する。福音との距離をぐんぐんとつめる。

五、六、七、八、九……十！

「うおおおおっ！」

零落百夜を発動。それと同時に瞬時加速を行なって間合いを一気に詰める。

(行ける　!!!)

光の刃が銀の福音に触れる、その瞬間。

「なっ!?!」

福音は、なんと最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身横えた。

(一度大勢を立て直し　いや、このまま押し切る!)

どちらにしてもこの間合いだ。引くには遅すぎる。

それなら、相手の反撃が来る前にケリをつけた方がいい。

しかし

「敵機確認。迎撃モードへ移行。　銀の鐘、稼働開始」

「!?!」

<千冬視点>

「山田先生、状況は?」

「現在、織斑君と篠ノ之さんが敵機と交戦中」

一撃で仕留められなかったか、頼むぞ一夏

「それで加津佐の現在位置は？」

「それが……その、敵機と交戦中なのですが……織斑君達の所に近づいているんです」

「なに！？」

モニターを見直す千冬は加津佐がどんどん一夏に近づいているのを確認する。

大丈夫だ加津佐ならやれる。

<加津佐視点>

「俺はお前を殺す」

閃光を突き出しながらフリアに接近。

「落ちろ！」

右から左に振るが

ガキンッ！

極光に受け止められてしまう。だが

バキンッ！

それを加津佐がさらにはじき、そこで初めて閃光に付いていたトリガーを引いた。

バンッ！

閃光がさらに加速して、フリアの首もとに接触の寸前で

「!?!」

なんで動かないんだよ。頼むから動けよ。俺はフリアを殺さないといけないんだ！

「そんな覚悟で私を倒せると思うな!!」

極光で閃光をはじき、そのまま俺との間合いを取る。

「くっ!!」

「加津佐、落ちなよ！ TORAIARU 起動」

ビットが極光と合体しそれを俺に向ける。そのままエネルギーがチャージされ

「!?!」

ドカーンッ!!

俺に向かって撃った。本気で俺を殺す気だ。

(くそ、間に合うか?)

エネルギーウイングを畳それを盾にする。

「ござかしいね」

さらにTORAIARUバスターの威力があがる。

「くそっー!」

そのまま大きく吹っ飛ばされる。

<一夏視点>

「くっ………! あの翼が急加速をしているのか!??」

高出力のマルチスラスタというの他にも多く存在する。けれど、ここまで精密な急加速というのは見たことがない。改めて『重要軍事機密』の意味を思い知らされる。

「第! 援護を頼む!」

「任せろ!」



とにかく、時間がかかればこちらが圧倒的に不利だ。俺は筭に背中を預けて再度福音へと斬りかかる。

「くっ！ このっ……っ！」

しかし、またひらりひらりと髪一重の回避をされてしまう。

それに見事なまでに翻弄された俺は、零落白夜の残り時間が追っていることもあってつい大振りの一太刀を浴びせようとしてしまう。

そして、その隙を見逃す福音ではなかった。

「……！」

銀色の翼。スラスターでもあるそのの、装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く。

(しまった！ こいつは )

砲口、だ。

一斉に開いた砲口を俺に向かわせるため、翼を前へと迫り出す福音。次の瞬間、幾重もの光の弾丸が撃ち出された。

「ぐうっ!?!」

(なんて連射速度だよ……っ!)

その数と速度 すなわち連射が無茶苦茶速い。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

俺と箒は回避行動を行いながら連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

けれど、俺と箒の攻撃はかすりもしない。その時だったハイパーセンサーに反応がある。

この反応は加津佐のISオメガ！

<加津佐視点>

ピピピピ

ハイパーセンサーに反応が現れる。

「まさか！？」

後ろを見ると箒と一夏が福音と戦っているところまで吹っ飛ばされていた。

「くそっ！ 止まれえっ！」

エネルギーウィングを広げ、速度を落とす。

一夏たちとの距離がそんなにない。このままだとあいつらも戦いに巻き込んでしまう。

エネルギーウィングの出力をあげブーストしてフリアに接近

「!」

ガキンッ!

普通に俺の閃光を受け止められる。

「だから、そんな覚悟で私を殺せると思うな」

思いつき蹴られ下に落下

<一夏視点>

「一夏! 私が動きを止める!!」

「わかった!」

言うなり、筈は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。しかも腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で発出、福音を狙う。

(こっちの機体も化け物だな……! 加津佐の奴、大丈夫か?)

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。

「はあああつ!!」

いける!

そう思つて刀を握り締める俺だったが、そこに福音の全面反撃が待っていた。

「La.....」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウインググスタはその砲門全てを開いた。その数、三六。しかも全方位に向けて一斉射撃。

「やるなっ.....! だが、押し切る!!」

箒が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃する。 隙が、できた。

「!!」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向かった。

「一夏!??」

「うおおおっ!!」

瞬時加速と零落百夜。その両方を最大出力で行い、一発の光弾に追いついた俺はそれをかき消す。

「何をしている！？　せつかくのチャンスに　」

「船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに　ああ  
くそっ、密漁戦か！」

<加津佐視点>

ピュピュ

俺のISオメガが俺に何かを伝えてきた。

「一夏の零落百夜のエネルギーがなくなったか　」

「余裕あるね。加津佐！」

フリアが俺の目の前に現れ、極光が俺の右上の方から俺の顔にめがけて振られる。だけど

俺は右肩に残ったタクティクスを剣にして、ガードする。

ギンッ！

そのまま俺は閃光をフリアに振るがやはり斬れない。

「急いで一夏のところに向かわないと！　フリア邪魔だ！」

そのまま俺はフリアを蹴り海に落下させた。

そして瞬時加速で一夏のところに向かった。

<一夏視点>

「馬鹿者！ 犯罪者などをかばって……。 そんなやつら

！」

「箒!!！」

「ッ ……!?!」

「箒、そんな 寂しいことは言うな。 言うなよ。 力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……。 どうしたんだよ、箒。 らしくない。 全然らしくないぜ」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを手で隠す。 その時に落とされた刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりした。

(今のは、リミット・ダウンだ……。 まずい ……!)

リミット・ダウン …… つまりそれは、エネルギー切れということだ。 そして今は、IS学園のアーリーナではない。 実戦だ。

「箒いいいつ!!！」

俺は刀を捨てて一直線に箒へと向かう。 最後のエネルギー全てを使

つての瞬時加速。

(頼む！ 間に合ってくれ！！)

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、今度は箒に照準を向けている。

エネルギー切れのISのアーマーは恐ろしくもろい。それは第四世代とはいえ変わりないはずだ。

(頼む！ 頼む、白式！ 頼むっ！！)

スローモーションの世界でm¥、俺は光弾が放たれるのを確実に視界で捉え、そして次の週間ぶ福音と箒の間に割って入った。

「ぐあああつ！！」

<加津佐視点>

箒が危ない！

そして俺の目の前では、一夏が箒をかばって福音の攻撃を受けていた。

「箒！ 速く！ 一夏を！」

「・・・・・・・・」

泣きながら一夏を追う箒。

「くそっ！」

福音はまだ箒を狙っていた。

「このままだと一夏と箒が……」

俺は閃光を福音へと向けた。

そのまま俺は斬りかかるが回避をされ、福音の一斉射撃が飛んできた。

「それは、もう攻略済みだ！」

エネルギーウィングを畳盾にする。そう俺はこれでいいと思っていたが

「そんな貫通！？ 違うこれは」

そう右からフリーアが福音の攻撃になにかをしていた。

二機相手にするのは厳しい。

相手はフリーアだ。けどそんなことを言っている暇はない。

フリーアの銃口の先には……箒！

「お前の目的は、俺だろ！」

「知らないね。」



そしてTORAIARUバスターが箒に向けて打たれる。

閃光のトリガーを引いて閃光を加速させる。

バン！

（一発じゃだめだ！）

俺は連射でトリガーを引く

バン！ バン！ バンッ！！

そして閃光が加速してTORAIARUバスターを受け止める。

「くそーっ！」

TORAIARUバスター を消すことは出来なかったが斬れた。

そう安心した瞬間

「馬鹿だね。 加津佐」

そう言葉の先には、フリーアがTORAIARUバスターの構え、福音が一斉射撃の構えをしていた。

回避は間に合わない。

ドーンッ！

「うわぁ あぁぁ！」

大きく海に激突する。俺は海面越しに福音とフリアを見ながら、気を失った。

（今の加津佐では……は救えない。もっと強く自分と対話して）

## 始まりの戦い後編（後書き）

次回 雪羅

まあストーリーの飛ばしすぎですね、僕

次回の更新……決まってるません。

後報告、IS月の剣士のキャラが一時的意に出てきます。

そこは気にしないでください。月の剣士の作者は俺の友達です。

俺の友達とある作戦を実行に移す為に必要なことなので

正確に言えば、遊戯王GXで十代と遊戯が会うみたいな感じですよ。

そこは、まだストーリーが決まってないので書いてません。

その会うストーリーの更新はまだまだずっとさきです。

それでまた次回にキャチジャ・フユウチャー。

どこかで聞いたことある言葉ですね。

雪羅（前書き）

きつい他の小説を書きながらやるのは、さすがにこたえる。

見てください

## 雪羅

<千冬視点>

「織斑先生！ 加津佐君と織斑君が……」

「わかっている。加津佐から救難信号がでていた」

加津佐は爆発するときにボタンを押していた。

「それで容体は？」

「織斑君は、背中に重傷」

「それで加津佐？」

「それが……その……首が骨折、右腕骨折、左腕の骨にひび、正確に言うなら体全体の骨がひびです」

泣きながら山田先生は言う。

「なに！？ それじゃあ加津佐は……」

「はい。起きたとしても、もう歩くことも食べることもできません」

加津佐の衝撃な事実を突き付けられる千冬。

その後モニター通信で不明ISが「今からこちらの要求に応えない場合、地球人を全て抹殺する。」

こちらの要求はそちらのISを全て渡してもらおう。時間は6までだ  
通信が切れた。

< 篝視点 >

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。

ベットで横たわる一夏と加津佐は、もう三時間以上も目覚めない。

その隣に控えている篝は、もうずっとこうしてだれている。

(私のせいだ・・・・・・・・・・)

不意に思い出した思い出の中でも、一夏は笑っていた。

けれどその笑顔は今はない。ただ力なく横たわっているだけだ。

(私が、すっかりとしないから、一夏がこんな目に　　! !)

ぎゅゅつとスカートを握りしめる。その拳が白く色を失うほどに強  
く、強く握りしめた。

自らを戒めるかのように、強く。ただただ強く。

<加津佐夢の中視点>

「俺……死んだのか？」

そう目の前は、真っ暗なところに俺はいた。

どこを、見ても真っ暗だ。本当の闇。

「いや、君はまだ死んでない」

誰かが俺の言葉に語りかけてきた。

「誰？」

後ろ振り向くと

「初めまして、君は僕の事知ってるよね？」

(君がここに来たということとは、もう戦いが始まるんだね)

「………?」

「そうだけど少し違うかな。僕の名前は和矢、弓弦和矢」

「和矢？」

そう目の前にいるのは俺と同じ顔をした人間。

「それでさっきの件だけど、俺まだ死んでないの？」

「うん。そして君はこれから僕と戦うの」

「なんで？」

「君はまだ僕の力を扱えてない」

力……… だよな、でも俺使えるときと使えない時があるから分からない。

「その中で見つけな。答えを」

「答え………」

いきなり向こうがISを展開して、俺に攻撃を仕掛けてくる。

やるしかない！

「来い、オメガ！」

俺の体にISが装着される。

「それじゃあ、始めようか」

俺と和矢の戦いが始まった。

< 第視点 >

(私は………どうして、いつも………)



いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう。

それを使いたくて仕方がない。

わき起こる暴力への衝動を、どうしてもか抑えられない瞬間がある。

（なんのために旅行をして……！！）

箒にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった。

リミッタ。

自らの暴力を抑え込むための、抑止力。

氷のようにもろく、ほんのわずかな重みで壊れてしまう。

（私はもう………ISには………）

一つの決心をつけようとしたときに、突然ドアが乱暴に開く。

バンツ！ という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力がない。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

遠慮無く入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやってくる。

その声は　　鈴だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど篤は答えない。答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんでしょ？」

ISの操縦者絶対防御、それを貫通して人体にダメ　ジをおおい。  
一夏と加津佐は昏睡状態になっている。

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、  
同時にISの補助を深く受けた状態になる。

それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませ  
なくなってしまうのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「で、落ち込んでますってポーズ？　　つぎけんじゃない  
わよー！」

当然烈火の如く怒りをあらわした鈴は、うなだれたままだった篤の  
胸ぐらを掴んで無理矢理に立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！　今！　戦わなくて、どうすん  
のよー！」

「わ、私・・・・・・・・は、もうISは・・・・・・・・使わない・・・・・・・・」

「ッ ……！」

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる。

そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは ……」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する。

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情。

「戦うべきに戦えない、臆病者が」

その言葉で箒の瞳、その奥で闘志に火がついた。

「どっしろと言っただ！ もう敵の居場所もわからない！ 戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の闘志で立ちあがった箒を見て、鈴はふうつとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに!？」

「場所なら分かるわ。今ラウラが ……」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから三キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ

それと、加津佐が戦っていた不明ISもその近くにいる」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているか」

「当然、甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた。

「たった完了しまそたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが筈へと視線を向けた。

「で、あんたはどつするの?」

「私……。私は」

ぎゅっつと拳を握りしめる筈。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に落とすわ」

「ああ！」

< 夏視点 >

ざあ……ざああん……。

(ここは……?)

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかぬ砂浜の上を一人歩いてた。

足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が済んだ音を立てる。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽。

(夏……なのか？ 今は……)

ここがどこで、今がいつなのかわからない。

俺はなぜか制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手には、いつ脱いだのか靴がある。

「。」「」

ふと、歌声が聞こえてきた。

とてもきれいで、とても元気な、その歌声。

俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。

さくさく。

さくさく。

足下の砂が鳴る。

「ラ、ラ、ラ、ラ」

少女はそこにいた。

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、揺つよつに踊る。そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白い色。

それと同じワンピースが、風に撫でられてふわりと膨らんでは舞った。

(ふむ……)

俺はなぜだか声をかけようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。

<  
>

「……………」

海上二メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まるで胎児のような格好でうずくまっていた。

膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

?

不意に、福音が顔をあげる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う。」

五キロ離れた場所に浮かんでいるIS『シユヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも速く次弾を発射した。

その姿は通常装備と大きく異なり、八口径レールカノンブリッツを二門左右それぞれ肩に装備している。

これが、砲撃パッケージ『パンツァー・カノンア』を装備したシユヴァルツェア。レーゲンであった。

(敵機接近まで……四　くっ！　予想よりも速い！)

あっという間に距離が一メートルを切り、福音がラウラへと向かう。

その間もずっと砲撃を行なっているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落としながらラウラへと接近していた。

「ちっ！」

機動力に特化した福音は、三メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

よけられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めていた。

伸ばした腕が突然上空から乗直に降りてきたの機体によって弾かれる。

青一色の機体　ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった。



六機のビットは通常と異なり、その全てがスカート状に腰部に接続される。

さらに手にしている大型BTレーザーライフル スターダスト・シユーターはその全長が二メートル以上もあり、ビットを機動力に回している分の火力を補っていた。

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備しているセシリアは、

時速五キロを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー ブリリアント・クリアランス を頭部に装着している。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

ステルスモードのシャルがいた。

ショットガン二丁による接近射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。

けれどそれも一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して 銀の鐘 による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイブ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシ

ルド両方によって福音の弾雨を防ぐ。

そのシルエットはノーマルのリヴァイクに近く、二枚の実体シールドと、同じく二枚のエネルギーシールドがカーテンのような前面を遮っていた。

『……優先順位を変更。現空城からの離脱を優先先に』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を計る。

「させるかあつ!!!」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出してきたのは真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす!」

福音へ突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パツケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を表す。

『!!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。

「やりましたの!？」

「まだよ！」

<加津佐視点>

「くっ、このおお!」

「君はまだ見つけられないみたいだね」

俺の閃光と向の接近ブレードがぶつかる。

ギィィンッ!

と音を立てながら俺と和也はぶつかる。

「俺はもう覚悟はできている!」

「だけど君はフリアという少女を斬れなかった」

「違う! 俺は……」

気を抜いたとき和也は俺に蹴りをいれて俺は吹っ飛ばす。

「ガハッ」

「君はまだ覚悟を決めてはいない。そして答えを見つけられてはいない」

「……お前……なんかに」

「ん？」

「何がわかるって言うんだ!!!!!!」

バリッ!

覚醒。

「君がそれを扱えるのかな」

俺は閃光とタクティクスで相手に斬りかかる。

「俺は……俺は!」

俺と和也の接近ブレードがぶつかり火花を散らす。だけど

「それでも君は弱い」

「!」

和也の剣が加津佐を貫く。

< 夏視点 >

ざあ、ざあん…………。

さざの波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。

その歌は、その通りは、なぜだか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。

(…………あれ?)

ところが、ふと気がつくとき少女の歌は終わっていた。

踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている。

俺は不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう。

ざあ、ざあ、と。

浪打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どっかしたのか?」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……………行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

あれ？

きよろきよろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も、聞こえない。

ざあざあと、ざあざあと。波の音だけが。

「うーん……………」

俺は仕方なく木のソファに戻ろうと体を反転させる。

すると 背中に声を投げかけられた。

「力を欲しますか……………」

「え……………」

急いで振り向くと、波の中 膝下までを海につかれせていた女性  
性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だ。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を隠すようにガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

「ん？ んー……難しいことを訊くなあ」

「ざあ、ざあん、と。」

波だけが俺と女性の間にある。

「……そうだな。友達を いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていけないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。

話しながら「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつつ、言葉続いていく。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う 仲間を」

「そう……」

女性は、静かに答えてうなずいた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる。

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じいっと俺を見つめている。

「ほら、ね」

手を取られて、にこりと微笑みかけられる。

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

とうなずいた。

すると、いきなり変化が

「な、なんだ？」

空が世界が眩いほどに輝きを放ち始める。

（ああ、そういえば……）

あの女性は、誰かに似ていた。



白い 騎士女性

<  
>

「ぐっ、うっ……！」

ぎりぎりと締め上げられ、喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した。『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

(これまでか……。情けない……。)

ぽいっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

会いたい。

一夏に、会いたい。

すぐに会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……………」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……………」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イイイインツ……………!!

『!?!?』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

(な、何が起きて )

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思っ止まない声だった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ!」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある。

「あ……………あ、あつ……………」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。

わずかに漉かんだ視線に見えるのは、白式第二形態・雪羅をまとった一夏だった。

## 雪羅（後書き）

次回 覚悟

現在月の剣士で俺の主人公、加津佐と和也が出会う物語があります。

見る人は見てください。

僕の方でも出会う物語は書くつもりなので

それではまた次回に

すみませんネットが止まっているので更新遅れます。

## 覚醒（前書き）

すいません。ネットがようやくやくやく繋がるようになりました。

## 覚醒

<加津佐視点>

「君がなぜこの世界にいるかわかるかい？」

「そ．．．なこと．．．．．」

剣が刺され俺の体から血が出ている。これは夢のはずなのに痛い。

「君はフリーアと言う少女を殺すことだけを考えているんだね」

「当たり前だ！ 俺の友達を殺したあいつを殺すまでは．．．．．」

「だから君はダメなんだ。フリーアって子が君を殺せたのに殺さないのは、何故だい？」

「!？」

俺の中でもやもやしていたものが一つに固まる。

俺を殺せたのに殺さないのは．．．．俺に．．．．

「わかったみたいだね。君は何と戦うべき考えるといいよ。君はその力があるんだ」

「そうだった……たの、俺が俺自身が間違えていたんだ。フリアは元から俺を殺す気はない……」

「ただ今の俺は」

「だけど……俺は体が動かない。もし起きたとしても喋れない。歩くこともできない」

「大丈夫、信じて自分のISをパートナーを信じて。そして終わらせてきなよ。君の戦いを」

暗闇の中に光が見えた。俺はそれをつかむように手を伸ばす。

「何を守りたいの？」

「俺は……今生きている者を全て守りたい。だからこそ俺はここに」

「そうだよ。君は行かなくちゃ。いずれ僕は君の目の前に現れる。その時は戦って上げて」

「え？」

光をつかんだ時俺は目を覚ました。

目を開けると隣には織斑先生と山田先生がいた。

「はあ、はあ、織斑……先生」

「加津佐！ お前喋れるのか？」

俺はゆっくり体をお越し

「はい。これから一夏達のところに行きます」

「ダメです！ 加津佐くん、君のからだはもう……」

「大丈夫です。治ってますから」

山田先生はモニター画面で俺の体を調べる。

「そんな傷が!?!」

「でも加津佐、お前のISはどうする?」

「あ、はははは。私はやっぱり天才だね。かづくん、これ」

と渡される俺のISのオメガ。

「修理は万全。タクティクスを一つ増やしといたよ」

「ありがとうございます。織斑先生、俺は命令を無視してでも行きます」

「わかった。その変わり帰ってこなかったらレポート50枚提出だからな」

「はい」

俺は外に出てISを展開する。



(来い、オメガ)

俺の体にISが装着される。

決意を改めて俺は

「奇跡 加津佐。オメガ行きます!」

TORAIARU瞬時加速をして一夏達のところに飛んだ。

<千冬視点>

「加津佐の奴迷いがなくなったな」

「そうだねちーちゃん」

「お前はさっさと出て行け」

「え」

<フリア視点>

「加津佐、目を覚ましたんだ………これで終わる。そろそろ私達も行くよ」

(うん)

「織斑一夏を殺す気で行かなければ……加津佐は戦ってくれない」

（でも、今の加津佐はどうだろうね）

「私にもわからない。彼が自分と対話して何を見つけたか……. . . . .  
だけどそれが加津佐の力となす」

（そうだね。フリーア貴方は私の願いを聞き入れてくれた。ありがとう）

「うんうん。私が貴方は守れなかったのがいけないんだから。そして今美由紀は私の中で生きている……. . . . .」

（またそうやって一人で抱え込もうとする。ダメだよ）

「うん。それじゃ行くよ。美由紀」

（行くこう。加津佐との最後の戦いを）

フリーアが喋っていたのは加津佐の幼馴染の美由紀だった。

<一夏視点>

「一夏っ、一夏なのだな！？ 体は、傷はっ……. . . . .!」

慌てて声を詰まらせる筈の元へと飛んで、俺は答える。

「おう。待たせたな」

「よかつ……よかつた……本当に……」

「なんだよ、泣いているのか？」

「な、泣いてなどないっ！」

ぐくぐしと目元をぬぐうように箒に、俺は優しく頭を撫でてやる。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなごっ……」

どうも強がりばかりが出てくる様子の箒らしい。俺は頭を撫でながら、ポニーテールではないその髪型がやっぱり気になった。

「ちょうどよかつたかもな。これ、やるよ」

「え………？」

俺は持ってきたものを箒に渡す。

「り、リボン………？」

「誕生日、おめでとう」

「あっ………」

七月七日。今日が箒の誕生日。

とはいえプレゼントに何を買っていいのか迷った俺は、シャルに買  
い物を付き合ってもらったわけなんだが。

「そら、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。　まだ、終わってないからな」

言うなり、俺はこちらに向かってきていた福音へと加速、正面から  
ぶつかつた。

「再戦と行くか！」

雪片式型　を右手だけで構え、斬りかかる。

それをひらりと避けぞつてかわした福音を、右手の新武器　雪羅  
で追つた。

第二形態に移行したことで現れたこの装備は、状況に応じていくつ  
かのタイプへと切り替えられるらしい。

俺のイメージに応えるように、その指先からはエネルギー刃のクロ  
が出現する。

「逃げさねえ！」

一メートル以上に伸びたクロ　が福音の装甲を斬る、シールドエネ  
ルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。

「そう何度も食らうかよ！」

俺はよけようとせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

雪羅、シールドモードに切り替え。相殺防御開始。

キンツ！ と甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく。

そう、これはつまり、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。

当然エネルギー消耗は激しいが、完全に攻撃を無効化できる以上、圧倒的にこちらが有利になった。福音に兵器はないのは、スペックカタログで確認済みだ。

「うおおおっ！」

強化され、大型四機のウイングスラスターが備わった百式・雪羅は、二段階瞬時加速を可能にしている。

複雑な動きをする福音も、最高速での回避が可能な訳ではないのだから、これで十分追いつける。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならされていた翼を自身へと巻き付けはじめる。

それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまされた状態へと変わった。

まずい。イヤな予感がする。

それは最悪なことになった。

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。

それはつまり、ダメージから回復しきっていない鈴たちにも攻撃が及ぶということだ。

(くっ！ 守りきれるか      !?)

俺はすぐさま仲間の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされる。

「何やってんのよ！ あたしたちは腐っても代表候補生よ？ 余計な心配してないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴……わかった」

仲間を信じる。今の俺にそれしかない。だったら、どこまでも信じ切ってやる。

俺は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落百夜の光刃を作りだして、再度福音へと飛び込んだ。

< 第視点 >

(一夏が駆けつけてくれた……！)

それがもう、嬉しいを飛び越えていた。

そして戦う一夏の姿を見て、何より強く願った。

(私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！)

強く、強く願った。

そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体エネルギーが急激に回復していくのがわかる。

『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス……完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティの文字だった。

(まだ。戦えるのだな？ ならば )

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

(ならば、行くぞ！ 紅椿！)

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮れの空を裂くように駆けた。

<  
>

「ぜらあああつ！！」

零落百夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても二激目を回避されてしまう。そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた。

「くっ！」

エネルギー残量二 %。予測稼働時間、三分。

(くそっ！ このままじゃ……………)



リミッターなしの軍用のISがどれほどのエネルギーを持っているのか、見当もつかない。

対して自分の機体は稼働限界が近づいている。それは焦燥へと変わって、じわじわと俺の心を焼いていく。

「一夏！」

「箒！？ お前、ダメージは」

「大丈夫だ！ それよりも、これも受け取れ！」

箒の 紅椿の手が百式へと触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃の炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？ エネルギーが 回復！？ 箒、これは」

「今は考えるな！ 行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

意識を集中させ、雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。巨大な光の刃を、俺は両腕で支えて振るった。

「うおおおっ！」

福音は俺の横薙ぎを一回転して回避、こちらに再び視界に捉えると同時に光の翼を向けてくる。                    かった！

「第！」

「任せろ！」

俺の方に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切る。

「逃がすかあぁっ！」

展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った。

予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を、俺は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す。

そして、一突きを繰り出すとす俺に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行なってきた。

（ここまで来たら、もう引かねえっ！！！）

全身にエネルギー弾を浴びながら、俺は福音の胴体へと零落百夜の刃を突き立てた。

「おおおおっ！！！」

エネルギー刃を特有の手応えを感じながら、さらに俺は全ブースタ―を最大出力まで上げる。

押されながらも、俺の首へと手を伸ばす福音。その指先が喉笛に食い込んだところで、  
銀色のISはやっと動きを停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……！」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ　！？」

「　　ったく、ツメが甘いよ、ツメが」

ようやくダメージから回復したらしい鈴が、海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした。

同じく、シャルとラウラも無傷とはいかないが無事のようにだ。

「終わったな」

「ああ……。やっとな」

と言ったところで鈴のハイパーセンサーが何かをキャッチした。

「何！？　この反応？」

「どっした？」

「夏が鈴に質問すると……。」

「シャルロット！ 後ろ！」

「え？」

後ろを見た瞬間、加津佐のISアルファが俺達の目の前に現れた。

そのISを纏っているのが女の子だ。

「きゃあああ！」

シャルは下に落ちる。

「シャルロット！」

ラウラはシャルを追って、下に飛んだ。ギリギリでキャッチに成功。

「織斑 一夏ですよね」

「ああ」

こいつ俺の事を知っている？

だけど初めてあった気がしない。どこかで会ってる。俺たち

「死んでもらう」

「なに！？」

いきなり極光を出し、そのまま一夏に切りかかるフリア。

「夏もつかさず手に持っていた雪片式型で受けとめる。」

「なんの目的で俺を狙う」

「お前が目的ではない。だけども用はない」

その言葉と同時に相手のISがさらに輝き出した。

その速度に夏はついていけずに、思いっきり蹴られシャル達がいる島に落ちた。

「うあああ!!」

そこに全員が集まり

「これは!!」

敵の構えはTORAIARUバスターの構え。

「逃………げろ」

全員動ける状態ではない。ISのシールドエネルギーは既にゼロだ。覚悟を決めた夏達、

「さようなら」

ポオ

ンッッ!!!

（よけられない。ごめん。千冬姉）

走って逃げようとするが逃げられない。

辺が光に包まれて行く。

「ビット、シールドエネルギーモード全開！」

そこに一人のISが割り込んで来て、一夏達を守る。

「か、かつ。加津佐！」

皆が加津佐の名前を呼ぶ。

俺は手に閃光を持つ。トリガーを連続で引いて

TORAIRUBASTERをかき消す。

「加津佐……」

「少しまでフリア。お前の相手は俺がやる」

「そんなこと」

さらにもう一発のバスターを撃とうとしたフリアだが、加津佐は瞬時加速して

「だから少し待て！」

思いつき蹴って島に落下させる。

「一夏、ラウラ、シャルロット、セシリア、箒、鈴。みんなISを  
だしてくれ」

俺がいうと全員ISをだす。

「どうするんだ？」

バイパスを接続し俺のシールドエネルギーを分ける。

「それだけあれば帰れる」

「俺たちも戦う」

「いいから、大人しく帰ってくれ。これは俺の問題だ……」

「……わかった。その変わり絶対に戻ってこいよ」

「任せろ！」

一夏達は、作戦本部に戻った。

「ありがと……一夏」

俺は飛び、フリーアの元に飛んだ。

「フリーア、お前が何を考えているのかは、知らないが、何を待っているんだ？」

「!?!?」

「お前が俺を殺せるのに、殺さないのは、お前が俺に何かを期待しているからだ！」

(加津佐……見つけたんだね。私たちが何を考えているか……)

「自惚れるな。人間不是えが、お前の本当の強さを知りたかっただけだ。」

「それでも……俺は、お前に人殺しなんてさせない！」

「わたしはお前の友達を」

「殺してない！ お前は美由紀を殺してない。」

わたしは加津佐に攻撃をしかけた。だけど

「お前の望むことは、今ので……わかった」

ガキンッ！

閃光で受け止められた。

「わたしはこの手で殺した」

「殺してない。だからこそ確かめなければならない」

俺は瞬時加速をしれ、フリーアの前に達フリーアの頭に触れる。

「!?!」



俺の頭に流れこんでくる記憶。

美由紀が……フリアの中にいる。

俺の友達を殺したのは、フリアではない。

「そうか……そういうことか……。美由紀、フリア、お前たちのやろうとしていることは……」

「築いたのね？ でも私達は、もう後には引けない。貴方を殺す」

「お前達に来るなら、俺は戦う」

お互いに接近ブレードを構え

「「ありがとう、さよなら」」

二人とも同時に走り出す。

ガキンツ！ ガキツ！ ガキイイツ！！

俺の中で過去の記憶が疼く。

『はじめまして、私の名前は美由紀。よろしくえ？ なんて俺に着いてくるか？ それは心配だからだよ』

どんだん思い出す。

『なんで加津佐っていつも購買なの？』

俺の地球であった事をどんどん思い出す。

『これからプールいこうよ。ね、加津佐』

そして

『私の名前はね……ふ、フリーアっていうの。信じられないけど私宇宙人なの……』

『私のこと嫌わないの?』

『約束ね。私との約束は絶対に守ってね』

涙を流す加津佐。

色々な事があって、それを今壊そうとしている。

「フリーア、美由紀。お前たちの事大好きだったぞ」

俺は一気に接近する。

右から左に閃光を振る。だけどそれをフリーアは、極光で俺の閃光を飛ばす。

バキンッ!

「相打ちは、負けだよ」

俺は残されたタクティクスを剣にする。

「え!？」

微笑みを浮かべるフリーア。

ブスッ

フリーアとISSに剣が突き刺さる。

剣から血が加津佐のISSに付く。

「加津佐、貴方はそれでいいの」

「加津佐は、それでこそ加津佐だよ」

「フリ……ア。美由紀……」

「泣かないで、加津佐」

でも、俺は結局お前達を殺してしまった。

「加津佐、これから私達と一つになるの……」

「え？」

急にフリーアが光と成り俺の体を包む。

その時に確かに俺はフリーアと美由紀の姿を見た。

そして最初に会った時の様に俺の頭に手を置きフリーアは言った。

「私が調べたIS学園の事教えてあげるね」

色々な事が流れ込んで来る。俺はフリーアに聞いた。

「フリーア、美由紀。もう行くのか？」

「うん。貴方のおかげで私達は明日を迎えられる」

「明日か……俺には明日はない」

「大丈夫だよ。加津佐、貴方には未来もある。明日もあるから」

「でも……元の世界にもどるんだろ？」

「うんうん。加津佐はこのISの世界にいるの。貴方の戦いはまだ終わってない」

「まだ……終わってない？」

「うん。これから始まる　それじゃ行くね」

俺はフリーアと美由紀に言った。

「ありがとう。フリーア、美由紀。またな！」

俺はさよならは嫌いだ。だから

笑いながら消えた。

「さてと、通信するか？」

と独り言を言っていると上から

「ん？ これは……」

少し俺は笑った。落ちてきたのはISアルファだ。

「加津佐より、IS本部へ。戦闘は終了。今から帰還します。」

『速く帰ってこい。みんな待ってるぞ』

俺は帰る途中、福音を拾って帰った。

「作戦完了」と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。

帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

戦士たちの帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待っていた千冬姉に俺達はきつく言われ、勝利の感触さえおぼろげだった。

今は大広場で全員正座。この状態でもう三分は過ぎた気がする。

セシリアの顔色が真っ赤から真っ青になりはじめているのが、危険信号の目安だ。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……。」

怒り心頭の千冬姉に対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。

（ヤバイな……。目眩がしてきた……。フリーア強かったな……。）

「じゃ、じゃあ、一度休憩してからにしましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。」

あつ！　だ、男女別ですよ！　わかってますか、織斑君、加津佐君！？」

「織斑先生、俺……。先に」

加津佐は立ってどこかに行こうとしたとき、加津佐は倒れた。

「加津佐君！」

山田先生が駆け寄り調べる。あちこち怪我をしていた。

「加津佐」

「少し寝かせてやれ」

皆が加津佐を呼ぶ声が聞こえた。加津佐はどこかに運ばれていった。

「つてて……うあ、口の中切れてるな」

なんか口の中が鉄っぽいと思ったら、血の味か。戦闘中に興奮して自分で切ったのかもしれない。

とりあえず、今日の夕食でわさび醤油は控えよう。地獄を見る。

「……………」

「な、なんですか？ 織斑先生」

じーっとこっちを睨んでいたの、俺は居心地悪さからつい口を開いてしまった。

……………う、また怒られたりするのだろうか。

「……………しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？ あ……………」

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えなくなる。

なんだかんだで俺たちの身を案じてくれている千冬姉に、俺は心の中だけで感謝を言った。

直接言っと、きっと本人が嫌がるだろうから。

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ん？　なんで女子一同こっちを見て　　もとい、睨んでいるんだ？

「あの、織斑君？　みんなの検査をしますから、ええと　　」

「「「「とつとと出ていけ！」「」「」

五人の声に押されて、俺は慌てて廊下に脱出。

ぴしゃりと閉じた襖に、俺は背中を預けて深く息を吐いた。

「ふう・・・・・・・・」

ともかく今回の戦いは終わった。

考えなければいけないこと、整理しなくてはいけないことが山ほどあつたが、とりあはず

（仲間を、守れたよな。俺は）

俺と　　白式は。



< 加津佐視点 >

「う！ 体中が痛い」

目を覚ますとどこかの布団で寝ていた。

「ここ……どこ？」

俺は必死に思い出す。確か……織斑先生のところで……倒れたのか……俺？

今築いたが、俺の隣にいる人、誰？

「君が奇跡 加津佐君、だよね」

「……誰？」

俺の目の前にいるのは、金髪の女性。明らかに俺より2〜3歳年上だな。

「私はナターシャ・ファイルス」

「『銀の福音』の操縦者か？」

「正解。凄いね」

いやいや、貴方の事は知ってるよ。俺は。

フリアから貰った記憶の中にあんた入っていたし……。

「それでナターシャはなんで俺の隣にいるのかな？」

「いきなり呼び捨て、嬉しいな。え〜と私も寝てたの」

「呼び捨ては普通です。そうですか……それじゃ俺出ますんで」

立ち上がる。

「ねー。メールアドレス交換しとこ？」

「……この人なに言ってるの？」

「おかしいだろ！？ 初めて会ってまだ1分もたってないのにメールアドレス交換して……」

「携帯今持ってるんですか？」

「え？ 家にある……」

「だよな。まあアメリカの事がわかるからいいかも知れないな。」

「わかりました。メールアドレスと電話番号書くんて明日バスに取りに来てください」

「わかったわ。織斑 一夏くんにもお礼しないと」

「俺お礼要りません。それじゃ」

その場から動きドアに手をかけて開けようとしたとき

「ねー」

と呼ばれたので、後ろを振り向くと

「むっ!?!」

……唇が……重なっていた。加津佐のキスはこれが初めてであった。

「お礼ね」

「げ……げっ……限界があるは!!」

走ってその場を出た。

「あらあら」

その後でナターシャは思った。

「もしかして、今のが、初めてだったのかしら。織斑　一夏くんも初めてだったら危ないわね。ほっぺにしときましよう」

学習していた。わけわからん意味で。

俺は部屋を走って出た後、ご飯の臭いがする方向に走った。

（ナターシャの奴なに考えてんだ！？ あれがお礼かよ！）

ファーストキスは思いもよらないことで亡くなった。

広場に着くと中には、皆が食事を取っていた。

ガラガラ>

「お、加津佐。もういいのか？」

「……わからん。臭いに引き寄せられてやってきた」

「犬か!？」

とりあはず、席に着き食事を取る。

「ね、ね、結局なんだったの？ 教えてよ」

「……ダメ。機密だから」

お膳を挟んで向かい側、ぱくぱくと夕食を食べるシャルに一年女子が数名群がってあれやこれや訊いている。

おそらく一番取っつきやすいシャルになら訊けると思ったのだろうが、それは判断ミスってやつだ。

あの子は専用機持ちの中じゃ一番責任感が強い。それは間違いない。

「ちえ〜。シャルロットってばお堅いなあ」

「あのねえ、聞いたら制限つくんだよ？ いいの？」

「あー……それは困るかなあ」

「だったら、はい。この話はこれでおしまい。もう何も答ええないよ」

「ぶーぶー」

さすがシャル。同学年の女子をあしらうくらい朝飯前ということだろうか。うん、なんかすごくお姉さんキャラだな。シャルは。

「な、なにかな？」

ふと、俺の視線に気づいたシャルが尋ねてくる。

「シャルロット、浴衣の胸元ゆるんでる」

ぼそぼそと隣りの女子が何かを吹き込んでくいる。うぬ、すごくイヤな予感がする。当たるんだ、最近。女子関係のイヤな予感。

「っ………!」

シャルは真っ赤になって浴衣の合わせ目を慌てて塞ぐ。

「い、一夏のえっち………」

「なあっ!?!」

いきなり冤罪だ。ていか何々何で? え? え? え?

「……っっそー。浴衣はゆるんでません」

「!?!」

<加津佐視点>

パクパクとご飯を次々と食べる。

「うまい!」

ひたすら食べた。うますぎるこの旅館。

生まれてよかった。

お魚美味しい。

みんなの視線は加津佐の飯の食べる速度をみてびっくりしていた。

「ごちそうさまでした」

俺は直ぐにご飯を食べ終わり、散歩をしに外に出た。

「気持ちいな風が」

俺は自分の手に付けているISを見る。

つるぎ

一つはフリアと美由紀が残したアルファ、二つ目は俺の新しい剣のオメガ。

この二つが現在俺のISだ。

「なあ、じ ちゃん、俺これでよかったのかな？」

空に話をかける。けど返事がない。あるわけがないのに

「俺さ、自分の手で友達を殺したんだ。そう俺は今日人を殺した・・・」

自分の手のひらを見ながら言う。

「それでも俺は進まなきゃならないんだ。だから、もう少し待って」

俺の決意は・・・今生きている者を全て守る。俺の周りにいる奴は全て守ってみせる。

後ろから誰かの足音がするので振り向く。

「誰かいるのか？」

「貴様が・・・イレギュラーか？」

「だ、誰だ!？」

闇の中から出てきたのは

「お、織斑先生……?」

「あんな奴と一緒にするな」

織斑先生じゃない。

「お前は、誰なんだ!」

「私か……織斑 マドカと名乗っておこう。イレギュラーの  
奇跡 加津佐、お前にはここで死んでもらう」

「イレギュラーってなんのことだ!？」

「死ぬものに教えて意味はない」

マドカが俺に拳銃を向ける。

「!？」

「死ぬがいい」

「俺は……生きる!」

拳銃の引鉄を引いた瞬間、俺はISを装着。

「なに!？」



「お前を捕まえれば、全てわかることだ!？」

俺はマドカに急接近

「ふん……………。今日はひくとしよっ」

マドカもISを展開。

「逃がすか!」

ビットをオールパーシジして、ビットで追撃に出る。  
だが全てをかわされ。

「……………」

「くっ」

そのまま瞬時加速をしてどこかに飛んで行った。

(一体……………何が……………織斑……………マドカ……………  
確か織斑家の姉弟はふたりのはずじゃ……………)

そんな事を考えていると下の方から爆発音がした。俺はカメラで見ると

「……………一夏と箒? それにみんな!？」

一夏と箒を狙っていたのは……………鈴、シャルロット、セシリア、  
ラウラだった。

「お前らといると楽しいよ。」

それでも俺の戦いはつづく。

ISを部分展開して俺は東さんに通信をした。

「はろはろ　なになに？　かづくん」

「東さん、頼みたい事があるんですけど………なんですけど」

「わかった！　今からちよいちよいとやってみるね」

向こうでカタカタとした音が消えこえる。

「………いけるよ！　わたし天才だね」

「それじゃ後は東さんの研究所で話しましょう」

「OKOKだよ」

俺はその後東さんの研究所に向かった。

<一夏視点>

「い、一夏………。いきなり、だな……。その人気のない場所に連れて……。わ、私とて困る………」

「っっ」

箒が何かぼそぼそと言っていたので、そちらに顔を向ける。

「ん……………」

え。

ええええっ!?! 箒さん? なんで目を閉じて、やや唇を上向きに突き出すんですかね、出すんですかね!?!

「……………」

静かに待っている箒の顔は、やっぱり綺麗だった。

う、まずい……………。まずい、まずい……………。

俺が肩に触れるとぴくんと箒が一度震える。

それから改めて身を預けてくる箒に、俺はゆっくりと顔を近づけて

ごっつ。

(……………ん? なんでだ?)

改めて顔を近づけて

ごっつ。

(ああもう、さっきから何だよ。何がデコにぶつかってんだよ)

そう思つて目を開ける。

開けなきゃよかった。

待っていたのはフィン状の浮遊物体。

「・・・・・・・・ブルー・ティアーズ・・・・・・・・」

その、ビット。てかつ！ 加津佐のビットだったら怖いわ！

それが俺のデコに砲口を押しつけている。

キュイイイ・・・・・・・・。

「ぬあああつ!?!」

ズバシュツ!!

間一髪、Bレーザーがのけぞつた俺の髪を焼き切る。

「ほづ・・・・・・・・」

「よし、殺そう」

「一夏、何をしているのかな・・・・・・・・?」

「ふふつ、うふふふつ」

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、四人の突き刺さるような視線。

ちなみに順番はラウラ、鈴、シャル、セシリア。

「ほ、箒っ！ 逃げるぞ！」

「えっ、あっ、きゃあっ!?!」

いきなり抱きかかえられ悲鳴を漏らす箒だが、ええい構ってはいられない。

俺はすぐさま脱兎へとジヨブチエンジ。四人の専用機持ちから逃げ出す。

今思うが加津佐はどこですか？ 助けを求めたいのだけど……。

(……ああ)

なんか、先月もこんなことあったなあ。

俺を撃つ銃声だけが追ってくるう。やめて死ぬ。死んじゃう。

<  
>

「ねー、ちーちゃん」

「なんだ？」

「今の世界は楽しい？」

「……そこそここにな」

「そう……なんだ」

東はその質問をするとどこかに消えた。

<  
>

「かづくん、さっきの話だけど？」

「俺はこれから、この地球を出て行きます」

「なんと！？　すごいこと考えてるね」

「生命体のボスとやらに会って来ます」

「だとしたら、かづくんがいない間、いっくんたちが生命体と戦うことになるよ」

「……………それでも行きます。今は筈もいるので大丈夫だとも思います」

俺の考えは、生命体のボスと出会い地球の侵略をやめてもらい新システム、TORAIARU を使い、前の地球を再生する。そこに生命体のみんなに住んでもらう。

これで対話は終了。フリアの言っている意味を考えた結果がこれだった。

TORAIARU の能力は過去に戻す。だけど人は生きている者しか過去に飛ばせない。

だから、地球を再生することにきめた。それでもダメなら俺は……………。

「わかったよ。手伝うよ。面白そうだから」

「ありがとうございます。それから俺の」

それから30分後俺はその場を離れ旅館に戻った。

「みんないい顔で寝てるな。幸せの為に戦うよ。俺は………」

翌日 朝バスに乗り込みIS学園に戻る。

喉乾いたな。

「誰か飲み物」

「ない」

「知らん」

「知りませんわ」

「知りません」

「一夏がみんなに嫌われてる。一体何が合ったのだ？」

「ただ、思い出になるかな。」

「加津佐、持ってないか？」

「飲むか？」

「すまない」

俺のサイダーを飲む一夏。サイダーなんてどこに売っていたかだつて……秘密だ。

その時、みんなの心の中は

(少し、やりすぎだだろうか?)

(酷く言いすぎたかな?)

(まあ、許してもいいか?)

(みなさんが動かないのなら)

全員同じ事を考えている。

「一夏」

「あのう、こちらに織斑 一夏くんって人いる？」

……ナターシャ……マジで来やがった。

「あ、はい。俺です」



一夏はつい返事をしてしまった。そこにナターシャは近づいて

「ありがとうのナイトさん」

と言ってホッペにキスをした。……おい、俺の時と全然違っ  
じゃねーか？

俺の初めて返せ！

「お礼ね。加津佐くん、約束の物」

「覚えていたか？」

「あたりまえでしょ」

ノリノリで言うな！

ポケットから紙をだす。俺の個人情報を書いてある紙。

まあこれも意味なくなるけど……。

「ほら」

「ありがとう。バイバイ」

バスから降りようとした時だ、一夏のバカタレが

「あれ、加津佐にはお礼しなくていいんですか？」

足を止めるナターシャ。まさか……な

「大丈夫、一番熱いゝのしたから」

「……は!？」

「加津佐、なにしたんだ？」

「知らん」

それからだ。箒、セシリア、ラウラ、シャルロットの四人が俺と一夏に向けてペットボトルを投げてきた。

すごく痛い。だけどこれも思い出だ。

覚醒（後書き）

次回 加津佐死

予告です。

「一夏！！」

「え？」

一人の少年はひかりの中に消えた。

これが次回かな。当分の間はオリストで行きます。  
それではまた次回に

加津佐死（前書き）

これから少し文字を少なくしようとおもいます。

長くなると思いますので、それではどうぞー！ー！

## 加津佐死

< I S 学園 >

俺は直ぐに荷物を纏め、寮を出た。

「あれ、加津佐どっか行くのか？」

一夏が立っていた。

「ああ、少し長い旅を……な。」

「そっか」

と言ったところで俺の I S のセンサーが何かを捉えた。  
この反応は生命体だ。しかもアリーナにいる。

「くっ、こんな時に！」

「どうしたんだ！ 加津佐！」

急に加津佐は走り出した。俺もその後につづく  
走っている途中で専用機持ちに出くわす

「どうしたんだ一夏？」

「加津佐の奴さっきこっちに来なかったか？」

「ああ、アリーナに向かっていたぞ」

「サンキュウ」

再び走りアリーナを目指した。

<  
>

第三アリーナに着いた。扉が開き俺は中に入る。

「我は生命体のボス、ギラ。」

「IS学園には来るな！ 今からお前たちの惑星行くつもりだ」

「知らないな。死ねイレギュラーの人間」

またそれかよ！ と思った加津佐  
向こうはライフルを構えた。

そのライフルはロングレンジライフル。接近戦しかほとんど取り  
柄のない『オメガ』では負ける。

それでも俺は……。ただ今このオメガなら……。  
「こい、オメガ」

ISを装着と同時に閃光と極光を構え接近する。  
連続で斬りに行くが全てライフルでガードされてしまった。

(ライフルが剣に変わった?)

間合いを取り考える。

「無駄だ。貴様では私には勝てん」

向こうはライフルを構え俺に撃ってきた。

ガンツ！

（そんな起動が読まれてる！？）

加津佐が回避するところに全てビームが回避をした場所に飛んでくる。

閃光に腰に付いている『ブラスター』を付けライフルにする。

これが束さんの自信作。

ブラスターは、閃光と極光専用の強化パーツ。

付ける事でライフルに変化したり、装甲の堅いISでも破壊できるようにする。

「これなら！」

閃光を構え撃った。

だけどそこには奴のすがたはなかった。

「雑魚が」

俺の背後から声がし俺は振り向いた。

そこには収束砲撃の構えをとっていた生命体があった。

無論、瞬時加速のチャージはしていない。

（そんな！ フリアと戦って俺は強くなった……はずじゃ）

「消える」

（また俺は……ダメだ！俺は一体何と戦えばいいんだよフリ  
ア）

「加津佐！！」

そこには一夏姿。

そうだ俺は決めたんだ。フリーアと戦って何かを見つけた気がした。  
だけど俺には守る者がある。ごめんフリーア、俺は守る者を優先する  
よ。

「TORAIARU」

相手が引き金を引いたと同時にビットをビームシールドモードで展  
開し、

エネルギーウイングを畳ガード大勢にはいる  
俺のビームシールドに相手のビームが激突する。

「掻き消える！」

閃光のトリガーを引いて、衝撃破を閃光から俺は放った。  
その衝撃破が敵に少し命中。

「なに！？ まだまだな」

そいつは瞬時加速をしてきた。

そう敵は多分俺達のデータを持っている。だからこそ瞬時加速が出



来たと考える。

無数のミサイルが俺めがけて飛んでくる。  
その数30。

「負けるもんか!!」

加津佐の目の色が変わり

俺は瞬時加速をしてミサイルを一つづ壊してしていった。  
そう簡単に全て落としてしまった。

敵は再びライフルを構え俺に撃ってくる。その数10発

「あたるかよ」

「当たるさ。お前もう動けまい」

敵は何を言っているのかわからなかった俺だが。

「なにを言って……うっ!」

急に加津佐のISが上空で止まった。

全てのビームは俺に直撃

「動かねえ」

「無駄だ。お前が破壊したミサイルはな。この為に撃ったんだ」

(エネルギーフィールドか……それとも……)

ISには決定的な弱点がひとつだけある。ミサイルにエネルギーの干渉波をいれて発射する。それを破壊した者のISは数分動けなくなる。俺が現在開発しているものだ。ただ敵の方が先に作るとは加津佐はおもっても見なかった。

「負けない」

「お前は今日ここで死んでもらう。お見せしよう我の新システム、TORAIARU機動」

「!?!」

俺のシステムを奪ったのか？  
敵は俺にライフルを構えた。俺のISからは危険危険と言っている。ISは動かない。もう何もできない。一夏たちがなぜアリーナに入らなかったか、それはISでは破壊できないシールド一時的にはっていたから、俺のISが……。

俺のISのシールドエネルギーがなくなればそのフィールドは消える。

「消えるがいい。お前が消えれば………私が」

「ちくしょうっ!!」

こ光の中に消えてゆく加津佐。出しつは不可能。

<一夏視点>

「くそ！　なんで開かねえだよ」

一夏は白式を展開し零落白夜で何度も遮断バリアーの破壊しようとしたが破壊できない。

「どうして……………」

俺がひとり言を言っていると

「織斑なぜここにいる？」

後ろから現れたのは織斑先生だ。

「なぜって……………加津佐が戦ってるんだ！」

「……………そうか、今すぐ教室に戻れ」

「だけど!？」

「いいから戻れ。私が加津佐を助ける」

織斑先生の言葉に一夏は

「わかった」

それだけを言い一夏はアリーナを出た。

織斑先生はアリーナを見渡した。すると加津佐が光に包まれている光景が目にとまった。

<加津佐視点>

光に包まれる中で俺は織斑先生の姿を見た。

「!?!」

(これだけでも渡さないと……)

加津佐は腕から腕輪を一つはずし

「織斑先生！ 後は……後は……頼みます！」

と言つて腕輪を投げた。

「間に合うか？ TORAIARU起動。ビット行けっ!!」

加津佐はビットをオールパージして敵に突っ込ませた。

それは加津佐の最後の悪あがきに見えた。

「なに!?!」

敵は加津佐の攻撃に予想をしてなかった。

敵ももろ直撃。

そして……

<千冬視点>

加津佐が投げた腕輪を拾った千冬は

「・・・・・・・・加津佐・お前」

その腕輪は加津佐が過去使っていたISアルファだった。  
煙が消えそこにいたのは

「・・・・・・・・!?!」

不明ISが立っていただけだった。加津佐の姿はどこにも見えない。  
地面には加津佐が使っている接近ブレード「極光」だけが地面に突き刺さっていた。

「はははは・・・・・・・・死んだかイレギュラーの人間」

高らかに笑う不明IS

それを見た千冬は・・・・・・・・。

「IS展開・・・・・・・・アルファ」

ISを装着した。

「なに!? まだ人間がここにいたか、今の状況だと負けるな出直そう。わが部隊を引きつれて、そのために一旦退こう」

そう言って不明ISギラはその場を飛び立った。

「待て! 貴様!」

千冬はなにを出来ないまま、ただその場に立っただけだった  
辺りを見渡すが加津佐の姿はなく……

(加津佐……)

千冬はISを解除して地下に向かった。

移動した千冬……目の前には山田先生

「加津佐君が!？」

「ああ。私の目の前で光の中に消えたよ。最後に加津佐は『後は頼みます』」

「え!？ それじゃ加津佐君は……しん」

「そこまでだ。山田先生、加津佐は親に会いに行ったということにしておいてください。」

「わ、わかりました」

加津佐はまだ死んでいないと思った千冬。

加津佐死（後書き）

次回 まだ決まっています。それではまた次回に

焦り（前書き）

いいのかなこれで



## 焦り

次回 焦り

夏休み始まるまで後三日

「みなさんいますか？」

山田先生は辺りを見渡しながらそう言う。

「あとう、まだ加津佐くんが来てません」

「……………加津佐君なら両親に会いに行ってます。先にこの三日と夏休みは帰ってきませんとの事です」

山田先生は言いにくそうにそう告げた。

「それでは一時間目は、アリーナでのIS基礎からの訓練だ。専用機持ちはすぐ準備しろ」

後ろから織斑先生が直ぐに来てそうみんなに言った。

まるで二人がなにかを隠しているのではと思った一夏たち

授業が始まるので俺達はアリーナに向かった。そう第3アリーナに……………

俺達はそこで思いもよらないものを見てしまった。

「それでは鉄を使って機動訓練をしてもらう。各自別れてするように」

「織斑先生」

「なんだ織斑？」

「どうしてあそこに加津佐のIS接近ブレードが突き刺さっているんですか？」

「……………加津佐が忘れたのだろう。私が回収しておく」

今築いた一夏は織斑先生の腕に待機状態のISがあった。

「織斑先生」

「どうした織斑」

「どうして織斑先生が加津佐の元ISアルファを持ってるんだ？」

みんながそれに頷く。みんなも築いていたようだ  
千冬は少しくらい顔をして、こう言った。

「預かっているんだ。あいつが帰ってくるまでな」

「……………そうなんだ」

ぎこちない答えに一夏たちは同じ言葉を同時に口にしてしまった。  
それから俺たちは第三アリーナで訓練をし模擬戦をして、授業が終わった。

「専用機持ちは残るように解散！」

どうして俺たちだけが残されたのかは知らないが集まる。

「なんでしよう織斑先生」

「お前たちにこれから模擬戦をしてもらう」

「さっきやりましたけど……」

鈴は少しビビリながらも言う。

「本気での模擬戦だ」

千冬姉の目が本気になっていた。一体なにがあったんだろう？  
どうして急にこんなことを言い出すのかみんなは考えた。

織斑先生の言うとおり俺達は模擬戦を始めた。

「織斑、切り返しが遅い！ 篠ノ之、後ろをもう少し気にしろ！  
ポーデヴィツヒは、ワイヤーブレードをもう少しまともに使え！  
オルコット、仲間を気にしすぎだ！ もう少し信用しろ！」

なぜだろう？ 千冬姉焦ってる様に見える。

俺の予想だと加津佐がいなくなっただけからだと思う。前加津佐が戦っていたISとなにか関係あるのか？

だけど今は訓練に集中し始めた一夏たちだった。

それから訓練が終わり

「今日はここまでだ。解散」

現在の時刻20:00。ずっとその間模擬戦にフォーメーションを

していた。

だけど、本当に千冬がおかしいと思っている一夏とその仲間たちそして、一夏はあることに築く

「そいやー加津佐ってどこ生まれ？」

「一夏、お前知らないのか？ てっきり私は知っているものだ」と

一夏以外の女子が頷く。

「今思えば加津佐って謎だらけよね」

鈴がそう言った

「どうして？」

シャルロットも加津佐の事が気になるのであろう。  
話に入ってきた。

「だって、私加津佐と出会った時寮の部屋だったのよ！ おかしいでしょ普通。」

その言葉を聞いた一夏は

「……………鈴、お前なに言ってんの？」

「冗談もそこまでにしる鈴」

篝もようやく口を開いた。

「え？ 冗談もなにも本当のことでしょうが！」

シャルロットとラウラは知らない。  
なぜならその場にいなかったからだ。

「……………鈴、お前と加津佐が出会ったのは、ここの食堂だろ  
すれ違う鈴の記憶。」

「ええ、そうですわよ鈴さん」

「そつだ」

箒とセシリアもはつきりと答えた。

「え？ ……どういふこと？」

鈴は頭を抱えながら

「なにがどうなってんの？ 嘘でしょー夏。箒もセシリアも私をは  
めようよしてるんでしょー！」

首を横に振った箒とセシリア

「……………加佐……………佐……………」

再び動き出そうとする鈴の記憶

「……………うっ、頭が痛い」

加津佐の事を考えた鈴はいきなり頭を抑え出す。

「鈴！ 鈴！！」

鈴はその場に倒れた。

どうしてかわ分からないが、鈴は頭を抑えた状態で倒れた。

鈴を寮の部屋まで運び寝かせる。

「それじゃ後はよろしく」

「わかった」

鈴のルームメイトがいて助かった。

「なあ一夏、私たち知らないことが有りすぎないか？」

「ああ、きつと加津佐と何か関係があるに違いない」

（あの時のISも気になる）

「なら織斑先生のところだね」

ここには専用機も二人を覗いた全員がいる。

織斑先生の部屋前、俺たちがドアを叩こうとしたとき

「お前らここでなにをやっている？」

俺たちの右側から織斑先生の登場だ

「聞きたい事がある。加津佐のことだ」

「……………加津佐、現在両親に会いに

」

「多分だけど俺の予想、加津佐は両親に会いに行っていない。それと別に聞きたい事もあるんだ。

あの時の不明ISの事……………加津佐の本当の生まれがどこなのかを俺は知りたい」

一夏の不明ISのところではもうわからなくなっていた。千冬は一体どこまで一夏は知っているのか気になっていた。

「……………いいだろう。はいね」

千冬姉の部屋に初めて入った。

「さてと一夏、お前はどこまで知っている」

「1ヶ月とちょっと前の不明ISとの戦闘、それと加津佐の目の色が違うこと……………」

「そこまで知っているならお前たちに教えるしかないか……………」

( いいか、加津佐? )

心の中でつぶやく千冬。

「まずは加津佐の生まれから話すとしよう。加津佐はこことは違う地球からやってきた。

加津佐の母親、名前は奇跡 紅音。その人はこちらの地球の人だ」

「……………それ本当に？」

「ああ、本当だ。」

「じゃあ加津佐はどうやってこちらの地球に来たというのですか教官？」

「織斑先生だ。そこから話そう。加津佐は黒い霧に包まれてこちらの世界にやってきた。」

そして、加津佐の戦いがここから始まった。」

「それじゃあの時の前からも戦っていたのか加津佐は？」

「ああ、その戦闘データがこれだ」

モニター画面を見る一夏。そこには加津佐の戦いの記録が映っていた。

「すげー」

「ああ、確かに」

「こんな戦闘を続けていれば強くなるわけだ」

「私でもこんな戦闘はできん」

ラウラがこの言葉を言うなんて思ってみなかつた。

「まず不明ISから教えよう。不明ISの正体は、宇宙生命体だ」



「……………嘘だろ。さすがにそれは……………」

「私が嘘をつくと思うか？ 一夏」

「思わないです」

確かに千冬姉が嘘をつくのはほとんどない。

「それと加津佐とどんな関係が？」

「加津佐はその生命体と分かり合う為にこの地球に連れてこられた。そして、現在元加津佐が住んでいた地球はもう存在しない。加津佐の地球を破壊したのは、その生命体だ」

「それじゃ加津佐の両親は……………」

「ああ、死んでいる。加津佐の母は加津佐が生まれてすぐに行方不明になっている」

「どういうことだ？」

「加津佐の母親は、生命体に殺された」

「!?!?」

衝撃的な事実を突きつけられた一夏たち

「そして、加津佐はあることを知った」

「……………なですかそれは？」

「自分に関わった者が殺されると思った加津佐は……ある人物の記憶を消した」

「それが鈴」

「ああ」

千冬はそこまで築いていたとは思ってもみなかっただろう。そこで全員は思っただろう。加津佐はどこにいったんだろう

「加津佐はどこに？」

「……加津佐は死んだ」

「え？」

「嘘ですわよね織斑先生」

「そつだよ加津佐が死ぬわけない」

ラウラだけ無言だった。戦闘を知っているからだ。こんなに俺達は無力なんだろう。と考えた一夏たちだった。

<??????視点>

「あつ……」

「あ！ おきましか？」

「……………誰？」

少年は目を覚ましそこには青い髪の少女が立っていた。

「君……………は……………」

再び眠りについた少年。

「眠ったか？」

「はいお父様」

「それじゃ私は、この者が乗っていたあれをみてくる」

「はい」

地球世界ではISと言っていた者をここにいる少年は乗ってきていた。

これは、私のお姉ちゃんがいつも話してくれていた。

お姉ちゃん、この人をここまで導いたのはお姉ちゃんなの？

焦り（後書き）

次回 迷いの先に

予告だよ。

「はぁ!?!」

「一夏、下がって!」

一夏たちVS生命体

「俺……行かなくちゃ。何と戦えばいいのかわかった気がする」

「そうですか……お父様」

「ああ、完成している」

「私に付いてきてください」

そこには一体なにがあるのか

次回につづく

「私を速くだしてよ」

「……誰?」

「私は……だよ。ってなんで……にするの!！」

「貴方はまだ出てきてはダメです。少し我慢してください」

それではみなさんすいませんでした。

「速く私をだしなさい!！」

剣（前書き）

本当にこれでいいのか？ 僕はおもいます。

てか！？ 自分的にストーリーの展開早すぎだと僕はおもいます。  
それではどうぞ

それとー夏たちVS生命体は次の話にします

## 剣

「そんな！？ 加津佐が死んだ……そんなわけがない。あの時、千冬姉言ったよな！」

私に加津佐を助けるって、どうして!？」

「……………」

無言を続ける千冬。

「だが加津佐が死んだと決まった訳ではない」

一夏が怒っている時、ラウラがそう言った。

体の方向をラウラに向け一夏はラウラに訪ねた。：

「どうゆうことだラウラ？」

「簡単な話だ。加津佐が死んだのに加津佐の遺体がないだろ。だから織斑先生は加津佐は生きていると思っただけではなにかと私は思っておるのですか？」

「さすがだなボーヴィツヒ」

「じゃあ加津佐は……………」

「もしかしたら生きている」

少し喜ぶ一夏たちだった。

「なおこの事は凰には内緒だ」

「どうして?」

「もし凰が記憶を戻したらどうなるか考えてみる?」

「……!」

簡単だった。鈴が記憶を戻すという事は、IS学園の生徒全員が危険にさらされるということだ。  
だから、千冬姉は……。

「多分宇宙生命体は、再びやってくる。その為にお前たちには少し強くなってもらおう」

「はい」

「それでは解散」

俺たちの周りでこんな大変な事が起きていたのに俺達は、なにも知らないまま過ごしていた。

確かに俺達は無力だ。

だからこそ俺たちは進まなきゃいけないのかもしれない。

「一夏……」

みんなが一夏の方を見ながら、名前を呼んだ。

「大丈夫だ。なんとかかしてみせる」



それから俺たちが、各自自分の寮の部屋に戻り眠りについた。  
翌日俺たち専用機持ちは、アリーナに集まり模擬戦と作戦を始めた。

「一夏！ 右！」

「おっ」

現ペアは、一夏&シャルルVS箒&セシリアだ。  
ラウラは状況に応じて攻撃をしている。

「くっ」

シャルルの連続マシンガン攻撃に対し箒は

「これなら」

守りの構えをし、一気にマシンガンを全て破壊した。  
そして、後ろからセシリアのレーザーの雨を浴びせる。  
さらにシャルルはそれをバリアーでガードしつつ、一夏が接近、それを箒が受けとめる。

「今日はここまでだな。千冬姉が言っている事が確かなら僕たちのエネルギーを満たんの状態にしておかないと」

「ああ、そうだな。そろそろ学校に向かおう」

<鈴視点>

「ZZZZ……」

ぽつりと一人だけ取り残された鈴。まだベットの上で眠っている。現在の時刻午前8:00、訓練を止め俺たちは学校に向かった。

<?????視点>

少年が眠ってから一日が過ぎた。

『はあはあ、俺はまだ死ねない』

『貴様では、私には勝てん消えろ』

「うわああ!!」

夢から目を覚ました一人の少年

「どうしました?」

そこには昨日みた女性がいた。

「俺は……死んだはずじゃ……?」

「生きています。貴方のお名前は?」

「俺の名前は……奇跡……加津佐です」

俺がそう言うと少女は笑った。その笑顔はとても綺麗だった。そして加津佐は考え始めた。一体ここがどこなのか……

「ここは……?」

「動かないでください。傷が開きます。ここは……生命球です」

「生命球……」

そう加津佐の記憶にはフリアの物がはいつている。  
だから、加津佐はここがすぐわかった。

「俺は……どうして……ここにいるの?」

「貴方が私のお姉ちゃんに飛ばされてきたのは知ってます」

「お姉ちゃん……?」

加津佐の頭の中では、目の前にいる女性を思い出そうとする。

「……君の名前は……レイ?」

「はい!」

確かにフリアには妹がいた。

地球人と何も変わらない姿だった。なのにどうして生命体になったのか?

「起きたか?」

「お父様」

扉の奥から現れたのは

「ギラがどうしてここに!？」

「なぜ私の名前を知っている？」

俺の目の前に入るのは、俺を消そうとした張本人が立っていた。

<一夏視点>

昼休み俺たちは再びアリーナに全員が集まった。

今度のペアーは、ラウラと一夏、箒とシャルル。

シャルルがいるチームはほぼ100%勝てる。シャルルの作戦はすごいからな。

「箒、右！ 私がラウラを止める」

「ああ」

両手にマシンガンを持ち、ラウラに飛び込む

「私には」

手を前に突き出すラウラ

「それも作戦の内だよラウラ」

シャルルはニコリと笑いながら突撃して行った。

停止結界を機動させたラウラ。シャルルとマシンガンの弾丸が止まる。

「今だよ箒!」

シャルルの合図と共に箒がラウラに急接近

「くっ」

ラウラに突撃する箒。再び動き出すシャルルのマシンガン  
その一瞬でラウラはやられたかと思われたが、その場にいたはずの  
ラウラがいない。

「一体どこに？」

辺りを見渡すがいたい。

「上だよ箒」

空を見るとラウラを抱っこしている一夏がいた。

一夏は二重瞬間加速をしようし、ラウラは助けていた。  
瞬時加速とは少し違い速度が速い。

「二重瞬時加速……それは計算にいれてなかったよ一夏」

「まさか箒がこちらにくるのかと思えば、ラウラに突っ込んで行く  
し予想外だ。」

「ただど負けられない」

「ああ、僕たちもだよ」

その頃セシリアは……

「加津佐さんのデータを元にすれば、少しは……」

現在加津佐のデータを使ってISを強化中だった。  
無論セシリアだけがそれをしていた訳ではない。一夏もラウラもシ  
ヤルも箒も加津佐のデータを元に強化していた。

「はぁ！！」

ガキンツ！！

俺のブレードと箒のブレードがぶつかり合う。

そこにラウラの大型カノン砲が箒に向けられ発射。だが、シャルが  
それをシールドで防御。

シャルのシールドエネルギーが一気に持っていられる。

「箒今だよ」

「ああ」

箒は加速して一気にラウラに接近し、連続で斬る。

ラウラのシールドエネルギーも一気に持っていかなかった。

「くっ、一夏！」

「おっ」

再び二重瞬時加速を使い一気に箒に接近する一夏。  
箒も大勢を立て直し一夏を迎え撃つ。

「はぁ！！」

「うりゃー!」

一夏と篝の斬り合いが始まるが……

「そんな……」

確かに百式はセカンド・シフトしたが向こうは第四世代。紅椿にも零落百夜は付いている。全身に……そこから一気に巻き返され一夏&ラウラペアーは負けた。

「ちくしょう……負けた」

「ああ、予想外の行動がありすぎた。さすがシャルロットだな」

「確かに……多分俺達の中で一番作戦立てられるのは……シャルなのかもしれない」

ラウラと一夏は、二人で話しているところにシャルロットがやってきた。

「何かつかめた？」

「おう。バツチリ」

本当につかめたのかは本人しかわからない。

「取り合えず休憩だな」

みんなでアリーナのと真ん中で弁当を食べる。

相変わらず篝の唐揚げ美味しい。一番怖かったのは……セシ

リアのサンドイッチ。  
だけどやっぱり鈴がないと何かが変に感じる。

「ここにいた!？」

噂をすればなんとやらだ。鈴が第3アリーナにやってきた。  
誰かが教えたのか?と思った一夏だったが、やはり俺たちの誰でもない。

つて事はクラスの誰かか、自分でここまで来たかの二種類しかない。

「私だけ仲間はずれ？」

「い、いや、違うんだ鈴。落ち着け」

「死ねええっ!!」

鈴VS一夏のバトル。無論一夏秒殺でした。

「ぐはっ……………」

地面に横になる一夏。鈴も弁当を食べるのに交わる。  
まあこれは仕方ないんじゃないか？

「死ぬ……………」

それから俺たちは連続で模擬戦をしたり作戦を立てたりした。  
そして……………

「疲れたー」



現在俺織斑 一夏は、自分のベットに横になる。

(加津佐……お前生きているのか?)

と心の中で呟き眠った。

<加津佐視点>

「なぜ私の名前を知っている?」

「お前が……いつ……俺を消したんじゃないか!?!」

「……何を言っているのかわからないぞ」

「ええ、確かにお父様はずっと私と一緒にでした」

「……え? じゃあ地球にいたあのギラは一体……」

それじゃあそこにいたギラは一体なんなのか? それが気になる加津佐。

生命球とこの星だけど空気も悪いこんな環境に入れば、地球に行きたくなるなと思った加津佐。

「まあその話は後ですとしよう」

「飯食べれるか?」

「はい」

生命体ってどんな食べ物食べているんだろう？  
気になるな……。。。フリアが育った場所

……地球の食べ物と対して変わっていた。

「いた……だき……ます」

ナイフで訳の分からない物体を切りフォークで、それを取り口に入る。

「……え？ うまっ!!」

「そうかそれはよかった」

なにこの味付けは……。わからないけど美味しい。  
今築けばどうして俺はここにいるんだ？

「俺飛ばされて来たって言ってたけど……。」

「はい。貴方もしていると思いますが私達は能力が使えるんです。  
そして私のお姉ちゃんは時空を超える力を使えるんです」

「それが俺の中で機動し、俺をここまで連れてきた」

「ご理解が早くて何よりです」

再び思うが俺のISはどこにいったんだ？  
歩きながらベランダみたいなの、所に行った。そこには

「え？」

子供が無邪気に遊ぶ姿。この環境で遊ぶなんて思った加津佐。

「……………」

急にナミダが出てきた。涙が出てきた事を考えた加津佐。そして、分かったんだ加津佐は今

「俺……………わかったよ。フリーアがどうして地球人と生命体と争わずにしたかったか、わかった。」

何と戦えばいいのかも分かった用な気がする。」

「……………そうですか、お父様」

「ああ、完成しているぞ」

「私に付いてきてください」

俺はレイに後ろを付いていく。そうなんかここ戦艦の中みたい。だけど事件が起こった。警報が鳴り始めた。

「何事だ!？」

「外に反逆者です」

「なに!？ レイは彼を連れていきなさい」

ギラは早歩きでどこに行った。

残された俺とレイは……………

「行きましょう」

「いいのか？」

「はい。私お父様は最強ですから」

なんて自信だ。一回戦って見たかったな。気が付けばデカイ扉が俺の目の前にある。扉を開き中に入る。そこには……

「……オメガ!？」

少し形と色が違うがオメガに間違いない。と加津佐は思った。今のオメガの色は青い翼と体は青と白だ。

「これは……あなたに返しますね」

「え？ いいの？ 元々これは君たちの」

「いいんです。お姉ちゃんがやりたかったことをただやりたいんです。力だけでは何も変えられません。今の貴方にならできるとおもいます」

「ありがとう」

オメガに乗り込み最終調整を始めた加津佐。カタカタとキーボードを叩きプログラムを書き換える。

「え？ オメガの三倍以上の力と加速がある。マルチロックシステム。オメガ機動」

武器が二つ追加されていた。BMライフルとBMサーベル。久しぶりの感覚に加津佐は……

「久しぶりだなオメガ」

と話をかけてしまった。向こうから手を振るレイ。

「力だけじゃ何も変えられない……」

大きく上昇するオメガと加津佐。扉を壊し外に出るとそこは宇宙空間だった。

辺りを見渡すとギラが大量の生命体ISに囲まれている。マルチロックスシステムを使い生命体ISを全てをロック。ビットをオールパージしBMライフルを構え撃った。

ギラも何がとかと思いこちらを見た。全ての生命体ISの武器を壊した加津佐。

「これでは……TORAIARU。元に戻れ!!」

この宇宙のどこかで俺の地球が復活したはずだ。俺は最後に

「ギラさん、フリーアがいつも行っていた地球に向かってください。貴方に託します。」

それでは」

そのまま地球に飛んだ。

剣（後書き）

次回 舞い降りる剣

予告 「鈴！」

全員が鈴の名前を叫ぶだが鈴にはライフルが構えられ

「死ぬ。人間」

一体鈴はどうなるのか、楽しみですな。

「どうもだよ。きつきー」

「……………のほほんさん、一体どうやってここに？」

「え〜とね、……………ちゃんに聞いたんだよ」

「昨日来ていたあの人が……………まあほほんさんならいいですよ」

「なんでほほんちゃんだけいいのよ!？」

「うわあ!？ また出た。のほほんさんしめに入ろう」

「え？ あ、うん」

「「それでは次回をよろしくお願いします」」

「私を無視しちゃダメ!!」

次回 舞い降りる剣（前書き）

・・・本当にこれでいいのか俺



## 次回 舞い降りる剣

<一夏視点>

朝俺はランニングに出た。加津佐がいつもしていたことだからな。俺も始めれば少しは変われるのかもと思った。ランニング終わりアリーナに向かった。

「遅いぞ一夏」

「悪い」

「それじゃ始めるよ」

シャルの合図と共に俺たちはISを展開し、模擬戦を始めた。今回は3VS2の組み合わせ

一夏&箒のペア。シャル&ラウラ&セシリア。

この組み合わせ最悪だろ。箒は接近主体、無論俺もだ。

「くっ、射撃の上にビットしかもワイヤーブレードってありかよ！」  
「！」

俺は叫びつつもかわしながらビットを一枚ずつ壊す。箒はワイヤーブレードを壊していく。

「一夏、クロス行くぞ」

「お、おう」

二人同時に加速し始めた。目標はもちろんセシリアだ。本当ならシャルだけど、シャルの近くにはラウラがいる。

俺たちは左右に揺れながらセシリアに近づいた。

「え!？」

その動きにセシリアはついて行けなかった。

何せ向こうは第四世代の加速と二重瞬時加速を使いながら接近している。

「これで」

「終わりだ!」

上手いぐわいにセシリアにクロスがヒットし、シールドエネルギーがゼロとなった。

次はシャルに向かおうとしたが

「あ!」

体が動かない。下を見ると

「……………停止結界。セシリアに気を取られすぎた」

筈の体がピタリと止まる。それに築いた一夏  
もう一度二重瞬時加速をしようとした一夏だが

「……………シールドエネルギーが……………」

それに一夏は予想してなかった。

「一夏、チェックメイトだよ」

後ろにはマシンガンを構えているシャル。下には大型カノンを構えているラウラ。  
これは完全に

「負けた」

「セシリアに気を取られすぎた」

「だな。一番最初に叩いて置かないと後で厄介だったからな」

「はあ、完敗だ」

「でも、一夏と篤も凄いよ。僕の作戦とは違う方に行ったかね」

シャルの考えは、こうだ。

一夏たちはまずシャルがラウラをつぶしに来ると思っていた。  
だけど、まさか、セシリアに行くなんて予想外だったというわけだ。

「ともかく学校に遅刻するよ」

「……え!?」

全員がその場を一気にダッシュで離れた。  
無論着替えに行ったのだ。  
何とか間に合った。

「それでは、明日から夏休みです。楽しんで来てくださいね。みな

さん」

必死に笑顔をする山田先生。

「はい」

とクラスが返事をした。

「それでは今日最後のアリーナでの訓練だ。専用機持ちは直ぐに準備してアリーナで待っている。

他の者は観客席だ。今日は専用機もちの戦いかたを見てもらう」

それを聞いた一夏たちは

「はい」

って、またアリーナかよと思った一夏である。

<加津佐視点>

「武器が強化されてる」

現在宇宙をTORAIARUで加速をしたままISの武器を調べていた。

強化されているのが、『ブラスター』が『ブラスターレール』になっていた。どうやら、射撃武器の実弾らしい

それに『ブラスター』の機能はそのままだ。

「束さん、喜ぶな」

宇宙生命体の技術と束さんの技術が合体したら確実に世界整備できるぞ。

「月って大きいな」

現在月の横を通っている。

<織斑視点>

現在アリーナのピット。どうやらはじめの戦いは俺と篝らしい。勝てる確率が……あるとは言い切れないけど多分大丈夫だろう。

ISを装着しアリーナを出た。そこには紅椿を装着し立っている篝がいた。

「よろしく頼むな篝」

「ああ」

お互いに接近ブレードを構え始まった。瞬時加速をして一気に間合いをつめた。

ただど篝のISは第四世代。前束さんが言っていた全身零落百夜だっけか？

まあそれを展開し俺との距離一時的に取った。

「そう簡単に近づかせてくれないか？」

「当たり前だ！」

空裂を構え放った。それが一夏のISに向かって飛ぶ。

「刹羅！」

刹羅をシールドモードにして防いだ一夏。

つかさず二重瞬時加速を使い箒に零落百夜を振る。

「これで!！」

「甘いな一夏」

接近ブレード『雨月』で受け止めた。

「くそっ!！」

箒はそのまま展開装甲の足部分にシールドエネルギーを集中させ、

一回転蹴りを入れようとす。

一夏もつかさず直ぐに右によけた。

「あぶねえ……………」

「はずしたか？ なら!！」

箒も一気に一夏に接近する。雨月と空裂を同時に振り下ろす。

一夏は雪片式型で受け取るが箒がさらに加速して一夏吹っ飛ばされた。

「くそおおっ!!」

一夏のシールドエネルギーをゼロにしようとする箒

「これで止めだ!!」

その時だ。遮断バリアーが壊れ俺達の目の前に生命体が現れた。同時にセシリア、ラウラ、シャルが同時にISを展開し現れた。

「大丈夫か一夏？」

「ああ、なんとかかな。だけどこんな時に」

「我は生命体のボス、ギラなり。人間に次ぐ今すぐ地球を開けたせ。地球人代表は我が殺した。もし地球を渡さない場合ここにいる人間をすべて殺す」

「ふざけんな!!」

一夏は接近する。

右斜めから雪片式型を振り下ろす。

ガキンッ

片腕で受け止められた。

「そんな!？」

「貴様も消えるがいい」

接近ブレードを一夏に振り下ろす直前で止まった。

「一夏！ 今だ」

ラウラの停止結界で敵が止まっていた。  
俺たちはこいつ一人かと思っていたが、外には40体以上のISSがいた。

「俺たちが諦めたら誰が守るんだ!!」

「ああ、そうだな」

「そうだね」

「最後の最後まであきらめませんわ」

「そつよね一夏」

その声は鈴だった。

「鈴どうして?」

「あんたたちが出ているのに私が後ろ?冗談じゃないわよ!!」

「それじゃ行くぞ!!」

「」「」「」「了解」「」「」「」



全員が一気にバラバラになり生命体を倒しに向かった。

一夏たちVS生命体40の勝負。俺たちは頑張っただけど

「しょせん人間はその程度だ。死ね人間」

そのライフルの先には鈴

「鈴!!」

<千冬視点>

「凰!! 私がでないダメか!」

その場を動かこうとする織斑先生。だけど山田先生は

「織斑先生、待ってください。上空から熱源一、この反応はISSです」

「また生命体か?」

「わかりません。でも、速度が早すぎます」

<鈴視点>

「え？」

赤い光がライフルから見えた鈴。そして

ドカーンッ！！ 生命体の持っていたライフルが上空からの一発の  
ビームが壊した。

「なに！？」

鈴と生命体の間に青い翼の青と白のISがいた。

そのISは大きく八枚の青い翼を広げた。一枚一枚の青い翼から  
エネルギーが出てるのが見えた。  
まるで青い自由の鳥のようだった。

次回 舞い降りる剣（後書き）

次回 帰ってきた少年

「どうも、のほほんと」

「加津佐の」

「「ISを知ろうのコーナー」」

「とうとう始まったね。のほほんさん」

「そうだね。楽しみだよ」

「今日のゲストは……」

「どうしたのきつきー」

「ごめん。少し連れてくる人間違えたみたいなんだ」

「だって……さんだ」

「え!?! また」

「うん。仕方ない今日は予告だけして明日にそなようか?」

「そうだね。明日は誰がくるんだろう。楽しみだな」

「「予告です」だよ」

<  
>

ポロポロの一夏たちのまえに現れた一機のISそれは一体誰なのか？  
次回また。

「「バイバイ」」

スタジオ・・・下ゲート

「遅い！　なんで私呼ばれないの？」

余りにも遅いので私は上に向かった。

「・・・え？」

収録終了していた。

「加津佐くん！！！」

一体このみずいろの髪の色をした女の人は誰なのか、  
気にせず見てくれて入れば、出てきますので見てください。

## 帰ってきた少年（前書き）

次回からは、小説通りに進めますので更新は一週間に一回のペース  
でいきます。

それではどうぞ！

## 帰ってきた少年

「なぜ、なぜ貴様が!?!」

「こちら奇跡 加津佐。 援護する今の内にアリーナの人を避難を」  
その通信を全員に送った加津佐。

<織斑視点>

加津佐の通信を聞いた山田先生

「加津佐くん、生きていたんですよ!」

喜んでいた。

「遅いぞ。バカ者」

<加津佐視点>

『加津佐くん、ダメなんです。アリーナ周辺を生命体がライフルを構えてアリーナを壊そうとしてるんです。だから……』

「……わかりました」

『え? 加津佐くん!?!』

加津佐はライフルをだしビットをオールパージシブラスターレールを構え

バリンツ！ シグマの力を開放

「目標マルチロック。行け！」

そこから撃ち出された無数の弾丸とBMは生命体の持っていた武器を全て破壊した。

連続で撃ちだされるBMと弾丸それを見た一夏たち

「……………すげえ」

「ああ、加津佐はいつもこんな戦いを一人で……………」

「……………でも、あれだけのBMや弾丸を撃つてたらシールドエネルギーなんてすぐなくなっちゃうよ」

それを聞いた鈴は

「だい……………じょう……………ぶ」

「鈴、大丈夫か？」

「ええ、思い出した。私、加津佐のISのシールドエネルギーは、リミッタを外しているから大丈夫」

鈴は記憶が全て戻った。

「鈴、お前記憶が……………」

もう一度加津佐の方を見た。

「敵に伝えます。そこにいるのはギラではない。もう一度繰り返します。そこにいるのはギラではない」

敵の生命体たちは混乱していた。いきなり加津佐はボスが偽物と言いつ出した。

ただど加津佐の目は本気の間だった。

再び加津佐はフルバーストし、どんどん生命体の武器だけを破壊していった。

「くっ！ 貴様！？」

俺は『ブラスターレール』の一番上からBMサーベルを抜きそのまま敵ボスに突っ込んだ。

「貴様にやられるものか！」

ただど俺はそんな挑発には乗らずそのままBMサーベルでボスの顔を斬った。

正確に言うなら仮面を壊した。

「.....」

その下から現れたのは

「お前はカオス」

生命体の一人がそう言っていた。



「やってくれたな。イレギュラーが……やれ！」

その合図と共に生命体の撃ち合いが始まった。ボスと人数を合わせると敵の数は5人だった。他にいた生命体は下に落下中。それを見た加津佐は

「……………」

ビットの2枚をビームのアミ場に、それを生命体が落ちる場所を送った。

それの上に乗っかる生命体。

無事を確認後加津佐は、再びマルチロックを使い敵生命体の武器を破壊した。

「くっここは一旦引くぞ！」

生命体は引いて行った。  
どんだん下に降りてくる加津佐。

「加津佐」

「話たい事があるんですね。僕もこの3日間何があったのか知りた  
いです。」

生命体のみなさんもどうぞ」

その姿は過去の加津佐に戻っていた。

「あ、そうだ鈴来て」

「うん」

鈴は直ぐに加津佐の近くに行く

「なに加津佐？」

「記憶戻ったみたいだね」

「……………」

その時鈴は言葉を言わなかった。  
フリーアは鈴の記憶が戻るようにしていたらしい。

「まあ、もういいけど」

一夏の方を見た加津佐は

「……………一夏、僕の事知ったんだね。織斑先生約束破りましたね」

「……………」

「僕も帰ったら話そうと思ったんですけど……………その手間が省けたようですな。」

アリーナにいた俺たちのクラスの連中は現在寮に戻っていた。

言い訳は、侵入者が入ってきた場合の模擬戦という言い訳になった。  
余りにも無理やりすぎるがみんなそれで納得していた。

現在俺たちが入る場所は、1-1教室。

加津佐は教室の方が話しやすいと言った。

「それじゃ……加津佐お前の事から聞かせてくれ」

千冬はそう加津佐にいうと生命体もそれに同意した。

「俺は……生命球にいたしました」

「なんだと!?!? 生命球だと!?!?」

生命体の一人が驚いた様子で俺を見ていた。

「座って、僕はそこで治療を受けてました。ISを大半が壊れていたらしいです。」

そして生命体のボス、ギラとその娘のレイが俺のISを直しくれてここまでくれた」

「信じられない。貴様が一体どうやって生命球に……」

生命体の言葉と同時に加津佐は目を閉じた。

「これを見て貰えば……」

そう言って目を開け始める。その瞳の色は、青色になっていた。

「その目は!?!? まさか貴様は……」

「この目の力はシグマといいます。」

「シグマ?」

「夏は？マークをしながら俺に質問する。」

「ああ、簡単に言うなら、限界を超える力とでもいうかな」

「それならわかる」

「だけどさっきの射撃加津佐くんのISのシールドエネルギーはなくなっているハズでは？」

山田先生は資料を出しながら加津佐に見せた。

「ああ、言い忘れてました。これ？みたいな物で動いているので、俺のIS触れない方がいいですよ」

普通にすらつと危ない事を言った加津佐。明らかにおかしい。

加津佐のISが？みたいな物で動いている？

みんなは無言になった。

「冗談です。ただシールドエネルギーのリミッターを外しているだけですよ」

「びびったー」

「加津佐さんが真剣に言うので本当なのかとおもいましたわ」

「だね。加津佐ダメだよ」

「じめん」

場の空気も少しは戻ったので話を戻す。

「さてと生命体のみなさん、俺に着いて来てください」

加津佐はその場を立ちアリーナに向かった。

なぜ？ アリーナかは、分からないがアリーナが広いからって言うてたな。確か……

現在俺織斑 一夏がいる場所は、アリーナの観客席だ。そろそろ始まるみたいだ。

(オメガ)

ISを装着すると加津佐は、TORAIARUシステムを使い始めた。

「後はこれで」

ポケットから加津佐は何かを出した。

金属の塊……？ 携帯みたいな形をしている。

それを大空高く上げ、TORAIARUバスターでそれを破壊した。すると何か空に穴が空いた。

「……なんだありゃ!？」

「知らん」

「知りませんわ」

「僕にもわからない」

「私も」

「私もだ」

専用機持ち全員知らない物。それは当然だろう。  
レイから貰った物だから

「この穴に入ってください」

「なぜ？ 貴様は我々を助けた」

「ある奴と約束したんです。全てを守るって」

俺がこの言葉を言うと生命体の一人が笑っていた。

「そうか貴様、奇跡の息子か？」

「母さんを知ってるんですか!？」

「ああ、フリーア様に私は着いて行っていたからな。あの人間は心優しかった。

「ただど……我々のせいで君の母は捕まった」

「……え？」

「いいか、カオスはまたやってくる。あいつは星を破壊する者だ。  
お前の母親は必ずお前の前に現れる。その時は助けてあげなさい」

「はい!」

その言葉だけを言い残し生命体はもう一つの地球に向かった。  
このソーチの転送場所はもう一つの地球だ。

（母さんは生きています。殺されてない……でも、フリーアの記憶では死んだって……でも、母さんは生きています。なら助ける）

俺はその後食堂に向かった。  
腹が減ったから……

現在地食堂。

俺の目の前ではカツ丼二つカレーライス二つラーメン二つと頼んで普通に食べている加津佐。

恐ろしく試みてられない。てか怖いわ!?

しかもまた注文に行った。

え〜と今度は、チャーハン、ギョーザ、和風定食ってどんだけ食べるんだ!?

「加津佐、お前腹壊すぞ?」

「大丈夫だ。問題ない」

問題はお前の体だな。どんだけはいるんだ?

恐ろしい事にどんどんたい上げていく。

最後の肉まん……どっから持ってきた?

「美味しかった。ごちそうさまでした」

みんな無言だ。余りにもありえないものを見てしまったから無言だ。  
空気がおもたい

「加津佐……………」

加津佐に最初に話をかけたのは鈴だ。

「……………鈴」

「私……………」

鈴が話そうとしたとき加津佐は

「さよなら」

その一言だけ鈴に言った。どういう意味なのかは分からない。だけど、それを聞いた鈴は落ち込んだ顔でどこかに行った。

「加津佐、お前何言ったんだ？」

「ん？ いやなんでも」

加津佐の考えいる事はまったくわからん。

「よし。夏をエンジョイしようぜー夏」

「……………お、おう」

なんでこんなにハイテンション？

ま、いつか？ これから俺たちの夏が始まる。



帰ってきた少年（後書き）

次回 「ウェルカム・イン・ザ・サマー」

「のほほんと」

「加津佐の」

「「ISを知ろうコーナー」」

「それじゃきつきー今日のゲストは誰なの？」

「今日のゲストは、織斑 一夏だ」

「どうも、織斑 一夏です」

「敬語使わずに普通にやれ一夏」

「そつだよ。おりむ〜」

「あ、わかった」

「質問コーナーだよ」

「一夏、お前はISに乗れてどんな気分だった？」

「う〜ん……嬉しかったのかなー」

「もう少しまともな答えが欲しかったよ一夏」

「うんうん」

「なんでお前らはそんなにノリノリなんだ？」

「だって、色々なゲストがくるんよ。楽しみにもなる」なるよ

「そうなんだ……」

「所でおりむく、百式なんか形変わってたよね。なんで？」

「……東さんが言うには……進化……だったかな」

「簡単に説明するよのほほんさん。ISわね進化するように作られているんだ。

だからISの形が変わることは、操縦者とISのシンクロ率が上がったっていうこと」

「へーきつきー物知りだね」

「え、基本常識」

「これが基本なのかよ」

「そうだ」

「きつきー、そろそろ終わらないとまずいよ」

「あ！ そうだね」

「「「予告です」だよ」だ」

織斑 一夏の青春ストーリーが始まる。  
終わり

「って予告これでいいのかよ!？」

「いいんだ」

「それじゃまた次回に会おう」「会おうねみんな」

「おい!？」

「「バイバイ」」

(本当に予告あれでいいのか?)

「ウェルカム・イン・ザ・サマー」(前書き)

長くなりそうだ。 . . . .

## 「ウエルカム・イン・ザ・サマー」

次回 「ウエルカム・イン・ザ・サマー」

<加津佐視点>

「よし、久しぶりに今日は五弾田定食に行くぞ」  
と元気に加津佐は出ていった。

現在一夏は、レポートの提出を忘れ山田先生の所に行っていた。

<鈴視点>

八月。クソ暑いたらありやしない。昔から、この国の夏は嫌いだ。  
大ッ嫌い。

そもそも、私はこの国の人間じゃない。最初は両親の都合、次は祖国の都合でここにいる。

凰鈴音。それがあたしの名前。

IS『甲龍』の専属操縦者にして代表候補生。

現在はIS学園に通う一年生。

「あつつう……」

八月、IS学園は遅めの夏休みに入る。そのせいで、世界中やってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中

あたしも本当は国に帰ろうかと思ったんだけど

「・・・・・・・・」

でも、やめた。

帰ってもどうせ両親は一緒にはいないし、軍の訓練も受けたくない。それに、別の理由だってある。

（あいつ、いるんでしょうね。まったく。なんであたしから誘われないきゃいけないのよ。本っ当っ、昔っから甲斐性ないヤツ！）

あたしは寮の廊下の歩きながら（まったく、なんでエアコン入ってないのよ！）、だんだと腹が立ってきた。

そう、そうよ。あいつから誘いにくればいいのよ。

そう思っつてヒターン　　させたところではったりと会った。

「お、鈴じゃねーか。どうした？」

「い、い、一夏！？　な、なんでアンタここにいんのよ！　へ、部屋じゃないの！？」

「いや、レポートの提出忘れたから。ん？　何持ってるんだ？」

「な、なんでもないわよ！」

反射的に、あたしは手に持っていたチケットを後ろに隠してしまう。

・・・・・・・・ああ、しまった。

『ふふん、気づいた？　実は

』

って流れならすんなり言えたのに！ 言えたのに！ 加津佐の前だ  
っ……た……ら

あの時のさよならの意味はこれだった。新しい恋いをしていた鈴。

「……………」

ぐっ……………」何してんだ、『コイツ』って顔しているわね。

あー、ごほんごほん！

「きよ、今日は暑いわね」

「ん？ そうか？ 涼しい方だぞ」

「暑いだよ！ この国の夏は昔から！」

「あー、そっぴやお前昔から暑いのだめだっけ」

あ、う。

昔のことちゃんと覚えていてくれたのが、ちょっと嬉しい。

ああ、ダメダメ！ こいつは、肝心な約束忘れるようなやつ  
なんだから！

「ま、いいや。それなら俺の部屋にでも行くか？ エアコンつける  
ぞ」

ん？ もしかして、これってチャンス……………」

「ま、まあ、そっね。じゃああなたの部屋に行ってあげる。飲み  
物出しなさいよっ。」

「へいへい。麦茶でいいよな。」

「冷たけりゃなんでもいいわよ」

そう言つて、あたしは一夏と並んで歩く。今は寮内も閑散としていて、ちよつとしたふたりきりだった。

(そ、そういえばあたしって汗臭くないわよね……?)

急にそんなことが気になつてしまつて、あたしは、一夏の隣から半歩横にずれる。

大丈夫。大丈夫……だと思つただけど、この暑さなんだから、別にちよつとくらい汗をかいても仕方ないわよね。 うん。 仕方ない！

<加津佐視点>

現在五弾田定食の前  
俺は扉を開け中に入った。

「……………」

「お、いらつしゃい……………つて加津佐かよ」

「こら俺はいつお前と友達になつた?」

「一夏の友達は俺の友達だ」

なんか、どっかで聞いたことあるぞ。その言葉



「それは置いて、何にする」

「取り合えずメニュー全部貰おうか」

「……本気で言ってるのか？」

「ああ、本気だ」

「まってる」

弾が調理場に向かった。

今思えば俺なんで弾と普通に話しているのか不思議でやれない。

それにしても欄の姿が見えない。だから、俺はモニターディスプレイを開き欄の学校にハッキングをした。

「……頑張れ生徒会長」

今日も生徒会の仕事を頑張っていた欄だった。

弾が調理場に行つて10分が経過

「お待たせ」

机には大量のメニュー。そして新メニューが追加されていた。

俺は、まずカボチャ定食を取り一瞬で食った。本当に一瞬だった。

「早！」

「美味い!!」

どんどん飯を食べて行く加津佐。多分弾はそれを見たとき、こころ思  
っただろう？

どんな胃袋をしてるお前は？

それから30分

「こころさまでした」

お茶を手に取り飲む。30分で目の前にあった大量の定食が消えて  
いた。

「お前本当にすげえな」

「そうか、普通な気がするが俺は……」

いやいや、おかしいから君の胃袋。

「それじゃそろそろ帰るか、買い物も残ってるし」

「そうか、また来いよ。今度は俺の奢りだ」

「じゃあさ……今から食べていいか？」

「アホ！」

俺たちの会話はそれで終わり俺は帰りにコンビニによって帰った。

< 鈴視点 >

「鈴？」

「なっ、なによー！」

「なによつて、部屋についたぞ。入れよ」

「わ、わかってるわよ、バカ……」

あたしはそう言いながら一夏のあとについて部屋に入る。別に何回も入ったことがある場所なのに、どうしてもだかドキドキしてしまった。

(あー……うー……。なによ、もう……)

まずい。部屋に入ってベットにかけて、早速まずい。

(一夏つてなんか……。いい匂いするわよね……)

そしてここは一夏&加津佐の部屋なので、当然その『いい匂い』というものより強く感じる。

まずい、やばい、落ち着かない。

(あ……うー……)

ばたばた足を動かしてもがきたいけれど、そんな動きを一夏に見られたくはなくて、

結局あたしはもぞもぞと小さく体を揺すった。

それからふと、テーブルの上に置かれていた本に気づく。

本……というか、アルバムだった。

「ああ、記念写真ってまだ続けてたの？」

「ん？ まあな。でもここ数年は千冬姉がいなかったからあ。鈴と三人で撮ったのが最後になるのか。覚えてるか？ 中の時の、鈴が引越す直前くらいのやつ」

「なんとなくはね」

ウソだ。

なんとなく、なんてものじゃない。しっかりと覚えている。

「しっかし、よくわかんないわね。これって千冬さんがはじめたやつでしょ？ 定期的に写真を撮るっていうの。結構そっていうのにこだわるタイプに見えないのにね」

「ん、まあ。たぶん、俺とふたりだけじゃない写真が重要なんだよ。過去に側に誰かがいたか、ちゃんと覚えておけて前に言ってた。

ほれ、お茶。ちゃんと冷えているぞ」

「ありがとう」

受け取った麦茶を飲みながら、あたしはさりげなく制服の上からサ伊フを確かめる。

「……うん、大丈夫。ちゃんとある。」

「これ、見ていい？」

「ああ、いいぞ。ちょうど整理を終わってるし」

あたしはできる限り『近くにあったから気になっただけ』を装いな

がら、アルバムをめくる。

そういえば、ちゃんと見るのって初めてだっけ。

最初の一ページ目は、やっぱり一夏と千冬さんのツーショットだった。何歳頃の写真なんだろう。

千冬さんは中学の制服を着ていて、一夏は今よりもずっと小さい。

「それは、小学校一年のやつだな」

「あれ？　これが一番最初なの？」

「ん、まあな。そういや、これより前のは無いなあ」

なんでなんだろうな、と付け加えた一夏にあたしも同意する。あんなに弟大好きな千冬さんが、どうして一夏が小学生の記録なんだろうか。

あ。

（もしかして、これより前の写真には両親が写ってたのかな・・・）

一夏の両親がいつ蒸発したのか、あたしも詳しくは知らない。一夏が物心ついた頃にはもういなかったって話だけど

「まあ、昔のことはいいだろ」

そう言って一夏はアルバムを次のページにめくってしまふ。

（あ、照れてる顔だ）

やっぱり一夏も小さい頃の写真は恥ずかしいらしい。  
そんな様子はちょっと可愛くて、あたしは自然と嬉しい気持ちにな  
っていた。

(最近こつやってふたりきりになることってなかったしなあ)

あ。

(ふ、ふたりきり……？ う、ヤバ……ヤバ……  
……ドキドキしてきた……)

自覚するともうダメだ。あたしの顔はカーツと赤くなって、熱を持  
ち始める。

いきなり。

いきなり、一夏があたしの隣に座って。

心臓がどきんと跳ねた後、ベットのきしみが異様に大きく聞こえた。

(え、あ、う……？ え、えーと、汗臭くないわよね？ て  
いうか、ベットって……ベットで並んで座るっていうのはつ  
まり、えーと……えーと……)

昔の歌で『思考回路がショートする』なんてフレーズ聞いたとき、  
『はあ？ そんなことあるわけないじゃん。バツカじゃないの』と  
即座に思っていた自分が凄く懐かしい。

……なによ、思考回路ってこんな簡単にショートするわけ？  
とんだ不良品じゃない。  
作ったヤツ出てこい。

「鈴」

「ふえっ!？」

あああ、どっから出た声よ、今の。

うう、格好悪いったらないわ。最悪……。

「欲しいか？」

。

え?え?え?なに、なんなの、どうなってんの?5W1Hを求めたいんだけど。

つつか、待って。え? 一夏が

え?

(ほ、欲しいかって……なんかものすごい直球……)

ていうかあたしに答えさせるとどんなサディストなのよ、こいつ。

好きな子にイジワルしたい心理なわけ?

え、好き? 好

きな? 一夏があたしを?

「いらないのか?」

「え、あ、いや、ちょ      ちよっと待ってっ」

「おっ」

うそっ、何この展開！？ どうなってんの！？

その時だ。部屋のドアが開き

「ただいま。一夏、飲み物が……」

それは加津佐だった。非常にマズイ。鈴と目が会った加津佐は直ぐにその視線をそらす。変な所が入ってしまった。

「おかえり。助かったぜ」

「そうだ！ 織斑先生に用事思い出した。それじゃ」

「おい、加津佐……」

素早くその場を逃げた。

向かうところがないのでラウラとシャルロットの部屋に向かった。

「で、どうする？」

「欲し……い……」

「ん？」

一夏がうなずいて、あたしへと手を伸ばして、そして

「じゃあ、おかわりいれてくる」

「はい？」



なんだって？

「おか……わり……」

「だから、麦茶の」

「麦茶の……」

「鈴、欲しいって……」

数秒間オウムに返しをしていたあたしだけど、一夏の言葉で心臓が止まる思いだった。

「ん？ あ、お前もしかして何か別のことと勘違いして

「ん、な！？ 何っ、んなわけっ      こ、この、このバカあああ

ああっ！！！」

バシーン、と。

平手打ちの乾いた音が盛大に鳴り響いた。

< 加津佐視点 >

一夏と俺の部屋を出て、シャルロットとラウラの部屋に向かっていく。

あの状況はまずかったと今でも思っている加津佐。

ともかくだ。ラウラとシャルの部屋でやり過ぎさねば。

色々な事を考えていると

「……………ついた」

ドアをノックし

『あ、はい。少し待ってください』

ん？ シャルロット何かしてたのか？  
ま、いいや。

待つこと5分。ドアが開き

「すみません。シャワー浴びてて……………か、かつ、加津佐！？  
どうしてたの」

「い、いや、暇だからラウラとシャルロットと一緒に遊ぼうかなっ  
て」

「あ、そうだったんだ。入って」

「お邪魔します」

部屋にはいるといたって部屋はなんにも変わっていない。  
変わっていたのは、セシリアだけだったらしい、ベッドに屋根が付  
いてるとかおかしい。

「……………シャルロット、少しモニター借りていい？」

「うん」

そう言っつて自分のモニターディスプレイを開き、カタカタとISの調整は始める。

「加津佐つてキーボード叩くの、速いよね」

「……なれの問題だと思っぞ。俺も東さんに会うまでは、こんなふうにはできなかつたし」

加津佐つて本当に凄いな。でも、あんな戦いを一人で終わらせるんだから……無理してないかな？

考えるシャルロット。そうだ！ マッサージくらいなら僕にもできそうだ。

「加津佐、横になつて」

「……なんで？」

「いいから」

俺はシャルロットに言われるままにベットに横になる。無論つつぶせで

シャルロットは、加津佐の背中の上に乗る。

……マッサージだよな。でも、凄く気持ちがいい。

（加津佐、少しはリラックスできるかな。僕も頑張らないと）

そこでラウラが帰ってきた。

「シャルロット、飲み物を買ってきたのだが……なにをして

いる？」

「なにつて」

「マッサージ」

うなずいて、冷蔵庫に飲み物を戻すラウラ。まるでさっきの俺と一夏だな。

まあ、問題が発生だ。

「私も手伝おう」

「じゃラウラも上に乗って」

え？ シャルロットさん、何を言ってるんですか？  
確かに二人とも軽いけど、二人乗ればそれは変わるんだよ！？

「……そこまで重くない」

つい口に出してしまった。俺はバカか

「加津佐ってどうして一人で戦うの？」

急に質問をされた。その内容が一人で戦うのか……。  
お前たちを守る為って言ったら必ず私たちと一緒に戦えばって言うのがわかる。だから俺は

「自分の為。もっと強くなりたいから」

「そうなんだ」

加津佐……嘘ついてる。目を見ればわかる。だって、いつもあんな明るい顔をしている加津佐がくらい顔をしながら言うわけがない。だから、加津佐ってなんでも一人で抱え込むんだ。

「加津佐、私たちも一緒に戦う。これからは……」

「!?!」

どうして？ シャルロット……どうして？ どうしてそこまですぐに係わる？

「ああ、私も戦うぞ」

ラウラまで……。もし次生命体と融合したら、みんなとお別れだな。

「でも、前にはでるなよ。基本的俺一人で戦うから」

「ああ」

「うん。それじゃマッサージの続き。せーの」  
バキバキッ！

「つぎやあああっ!?!」

その日、俺の腰は凄い音になった。

「ウエルカム・イン・ザ・サマー」(後書き)

次回を急遽変更します。

ここからは、オリジナルでいきます。

次に小説通りに進めるのは5巻からになるかもしれませんが。

次回 再び

## 再び（前書き）

・・・オリジナルストーリーが思い付きすぎて困ってます。最後にルートを書くのでどのルートがいいか投票お願いします。

## 再び

次回 再び

朝俺は起きた。

「……………どうして俺はここで寝ている？」

隣には、我妹になったのかな？ のシャルロットとラウラが寝ていた。

「……………」

必死に思い出そうとしている加津佐。 だけど昨日の事が全く思い出せない。

一体何があったのか？ それはラウラとシャルロットしか知らない。 というわけで加津佐は、部屋をこっそり逃げた。

「何が合ったんだ？」

「どうした加津佐？」

「いえ、実はシャルロットとラウラの部屋で寝ていたので……………  
…って!?!? 織斑先生」

「ほう、お前は昨晚ボーデヴィツヒとデュノアと一緒にいたのか？」

言い訳したら……………怒られる。



「はい」

「正直だな。嘘の一つや二つ並べれないか？」

嘘ついていいなら付きますよ。

でもね。俺が束さんの所に来たとき織斑先生が俺にこう言ったんですよ？

『嘘を付いたら私の特別訓練をしてやろう』と、と言っても結構嘘ついたよな。俺。

「無理です」

「お前は……………」

頭を抱えながら横に振った。

「加津佐、昨日言っていた事だが本当に奴らはまたくるのか？」

「……………はい。必ず来ます。その時は俺一人で戦います」

「だが織斑たちもいた方が少しは大丈夫なのではないのか？」

「……………ダメです。一夏たちは戦いにもう巻き込みたくない。

だから、俺は強くなつたんです」

本気が目か……………。一度お前と戦つた方がよさそうだな。

「なら加津佐、今日の12:00アリーナに来い」

「はい」

織斑先生、本気だ。俺も全力で相手をする。

「手加減したら俺怒りますよ」

「誰に者を言っている」

「すみません。それじゃまた後で」

俺は織斑先生と別れ剣道場に向かった。今頃箒たちが練習をしているはずだからな。

少し練習に混ざりに行く。暇だしな。時間も有り余っている。

久しぶりに織斑先生と模擬戦。

あの時からもう数ヶ月がたった。俺も変わった……いや、変わりすぎたのかな。

フリーア、俺もつと強くなる。今の俺……いや、僕じゃ勝てない。

普通なら『オメガ』は織斑先生に乗ってもらいたいけど、もう俺専用になったから、織斑先生にアルファ貸す予定だ。これでお互いにフェアな戦いが出るはずなんだ。

俺の予想が正しければ、織斑先生は俺よりも何倍も強い。だから、楽しみだ。

そんなことを考えながら剣道場についた。扉を開けて中に入る。予想通り箒もいた。

「お邪魔します」

俺がこう言つと女子の皆が集まってきた。

「どうして加津佐くんがここにいるの!?!」

「……………少し練習したいなって、混ぜてもいいですか？」

「はい！もちろん」

「箒、俺の一つ頼む」

「……………なぜ私だ？」

「理由いるか？」

「い、いつ、いらん！早く構えろ」

俺が思っている中でIS学園1年で一番強いのは、多分箒だと思う。だからこそ力を見せて貰いたい。

一夏も確かに強くなった。この短期間で、一夏はこれからもっと大変な戦いに巻き込まれる。

お互いに構え距離を取った。

「俺の力は、みんなの為に」

ぶつぶつと加津佐が何かを言っているが箒は飛び出した。

「メインッ！」

「……………」

箒の攻撃を右によけた風の様によけた。

「終わり」

竹刀が箒の体直前で止まった。

「なっ……私の負けだ」

「ありがと。また手合わせしてもらおうよ」

「ああ」

「それじゃ」

一回だけ戦うと加津佐はどこかに行った。  
どうして、ここに来たのか考え始めた箒だった。

<  
>

「オメガ、お前はいつも傷ついても俺の専用機でいてくれてありがとうな。」

お前が入なかったら俺もう死んでるのか知れないな。フリーアと束さんと母さんの思いの込められた機体。

それがオメガだよな。父さんと母さんの顔は覚えてないけど、きつと優しい顔してるんだろっうな。」

「だから、いつまでも俺の専用機でいてくれな」

「……君が奇跡 加津佐くんだよな」

後ろから女性の声がしたので振り向いた。  
そこには、青い髪の女性が立っていた。

「誰だ？」

「一言で言うならこの学園の生徒会長」

「……そうか貴方が楯無会長」

加津佐はもうこの学園で知らない事はあんまりない。  
フリーアが全て調べていてくれたからな。

「私のこと知ってるんだ？」

「もちろん。それでなんの様ですか？」

「簡単に言うなら生徒会の勧誘だね」

「どうするかな？」

「……無理だつて言っても聞かないだろうし。仕方ないか。  
生命体の目標は俺になっているから、もうみんなには危害はないと  
思うし。」

よし学園生活をエンジョイしようかな。

「いいですよ。僕も生徒会には興味ありましたし」

「会長嬉しい。楯無でいいわよ」

「俺も加津佐でいいです。ところでたてな、早く生徒会しつ向かわ  
ないと怒られますよ」

「呼び捨てしてくれんだ。本当に嬉しい。加津佐ありがと」

「いえいえ」

それを言っでどこに行った。

(奇跡 加津佐くんか、彼がいたら面白くなりそう。後は……  
くんだけ)

もう一人勧誘しようとしていた生徒会長の楯無であった。

それから、俺は12:00までアリーナで一人で訓練をしていた。

時間がたち。織斑先生が現在俺の前に姿を表した。

「千冬さん、俺は生徒では無く。一人の人間として貴方と戦います」

「……そうか」

俺はポケットからISアルファを千冬さんに渡した。

「これでフェアな戦いができる」

「覚悟しろ、加津佐。これからお前には、力の差を見せてやる」

「大丈夫です。それなりに俺も強くなりましたから。始めましょうか」

「いいだろう」

俺と千冬さんは少し距離をとった。

（（IS展開、来い、オメガ）アルファ）

俺たち二人はISを展開した直後お互いに接近ブレードを出し相手に斬りかかった。

やはりと言わんばかりに千冬さんの斬撃を力がある。

だが俺も負けてはいない。

（なんだ？ あの加津佐が右手に持っているあの剣は？ ……

）

考える千冬だが、そんな時間はない。

どんだん加津佐は攻めてくる。だけど、千冬は分析をしている。

今の加津佐のISは前とは少し違う。データもなかった。

それに相手は加津佐だ。数々の戦いをこなしている。

千冬はもう加津佐のことは、弱いとは思ってはなない。けど何かおかしいということだけはわかる。

「甘いつー!!」

「くそっ」

斬り払いされ俺の右手に持っていたBMサーベルは飛ばされた。

再び（極光）を構え降りかかる。

加津佐は反射敵にもう片方にあるBMサーベルを抜きそれを受け止めた。

（あの大勢から立て直した？）

再び加津佐の連続BMサーベルでの、攻撃が始まる。  
それを普通に（極光）で受け止めながら、回避する。一つ一つの動きを見ている。

「そろそろだ。TORAIARU」

「!?!」

千冬さんがTORAIARUを使った？ あのシステムは普通の人間が使ったら、体に負担がかかる。  
だけど、なぜTORAIARUシステムを使えるんだ？ 確かに口ツクはしてなかったが、普通なら体の骨が一二本ヒビ行ってもおかしくない。  
その動きを見た俺は

「くっ、速い！ TORAIARU」

つかさずこちらもTORAIARUをするが、回避はできなかった。  
そのまま壁に激突した俺は……

「俺は……負けない」

バリントッ！ 加津佐の中で何かが破れた。

（シグマ、本気か）

「はあっつ!!」

『ブラスターレール』を構え撃った。  
それを『極光』で破壊された。



(強い。だけど楽しい)

「当たれえ!!」

ビットをオールパージし、千冬さんに突っ込ませた。

これは、筈の『紅椿』に使用されていたビットを改良した。

あえて言うなら『ソードビット』かな。まだ、名前は決まっていな  
い。

「くっ、これは、そうか……」

それを極光で連続ではじき地面に突き刺さるビット。

そこから俺は、『ブラスターのモード』を変え、『閃光ブレイクモ  
ード』変えた。

『閃光』に『ブレスターレール』を合体させ、それを構えた。

「これなら!」

「そんな動き見えないとでも思ったか？」

「いえ、俺の狙いはそれじゃありません」

「……!」

後ろからソードビットが千冬さんをめがけて飛んだ。地面に落ちた  
ビットをそのままにして置いた訳ではない。少し時間を稼いで貰う  
だけだった。

「これでっ!」

「無駄だ!!」

俺が地面に落としたBMサーベルを拾ってそれを使い受け止めた。

「そろそろお互いのシールドエネルギーもなくなりましたね」

「そうだな。そろそろ終わりにするでしょう」

加津佐は『閃光』を千冬は『極光』を構えた。  
お互いに動き

「はあっつ!!」

そして……

「負けた」

「まだまだ私に勝つのは1000年速い」

「はあ、ありがとうございます」

「ああ、私も久々にいい運動になった」

「そうですか」

千冬さんにとって今の模擬戦が運動だったとは、恐ろしい。

それじゃ俺はいつになったら勝てるのか？ とか考えていた

## 再び（後書き）

次回 欄との再開

ルートその1 生命体と戦い

ルートその2 世界整復

ルートその3 生命体と分かり合う。

まだまだありますけど、この3つにしよとおもいます。

凄く悩みました。だけどみなさんに投票して貰ったほうがいいなと思いました。

と言っわけで

「「加津佐と」のほほんのIS知ろうコーナー」

「だけど今日はお休みです。みなさん」

「「投票まっています」それではまたね。みんな」

## 欄との再開（前書き）

ストーリーは……全て詰め込む事になりました！！

というわけでISシグマは、全4部です。

第一部がインフィニット・ストラトス シグマ

第二部がインフィニット・ストラトス シグマ フューチャー

第三部がインフィニット・ストラトス シグマ ブレイク

第四部がインフィニット・ストラトス シグマ FINAL

結構長いですけど読んでください。

これからどんどん更新していきます。

全ての小説はここから見れるようにしますのでよろしくおねがいます。

## 欄との再開

いつもの朝、  
違うのは……

「……熱い……死ぬ」

俺奇跡加津佐は今街中を歩いている。

理由は簡単だ。もし生命体が人間に変身しているかもしれないからな。

だけど……夏は、きついね。  
てくてく歩いていると

「……欄？」

「加津佐さん……？」

「こんなところで何してんの？」

「え〜と、友達と待ち合わせを……」

すると欄の携帯が鳴り電話に出る。

「え!?! え! ちょっと」

電話がきれたらしい。多分俺的ドタキャンだね。  
俺も良くされてた。

「どっしたの？」

「友達が用事出来たからプール行けないと……」

それは痛いドタキャンだな。もしかしてチケット買っていたのかも知れないな。

「それじゃ俺行くから」

「……………」

(言っしかない！)

決意を決めた欄

「あの！……………」

ところ変わって……………。

どこにいるかなんて言わないよ。

「加津佐さん……………その……………お待たせしました」

加津佐の目の前に現れたのは、欄(水着)姿の欄だった。その水着の色は赤ですね。ビキニです。似合っています。

「いいと思うよ」

「……………」

顔を赤くする欄。それもまた可愛いです。

それから俺たちは泳いだりした。久々に楽しい。

現在の時刻プールで何かあるらしい。  
……なんで彼奴らいるんだ？

視線の先には鈴とセシリアがいた。  
狙いは多分『水上ペアタツグ障害物レース』だろうな。

「残念だね。欄」

「え？ なにですか？」

「いや、もし友達とこれてたら出れたのにね」

「そうですね……」

レースが始まったみたいだ。俺は椅子に座りそれを見ていた。

なんか、余りにもせこい手を使っている二人組がいるが口はださん。

「加津佐さん、お弁当を食べますか？」

欄が鞆から弁当を出した。

俺てつきり時分で買うのかと思っていた。

「いただくよ」

弁当箱を開けるとそこにはカラフルだ。さすが定食屋の娘。  
いいお嫁になるな。これは

「美味しいよ」

少し喜ぶと欄も弁当食べ始めた。

俺は再びレースに目を向けると、そこにはISを展開していたバカ



二人組の姿が

(あいつら怒ら……あ！ マズイ。)

「オメガ!！」

俺は直ぐにISを展開してビットをオールパージし、辺り一面にバリアーを貼った。  
だけど、バカ二人組はまだ戦っていた。

「欄少し待っててもらえる」

「あ、はい」

すぐさま俺は鈴とセシリアの間に割ってはいり

「お前らいい加減にしろ!！」

「加津佐!？」

「か、加津佐さん!？」

俺はBMサーベルを出し、二機のISをプール内に沈めた。  
それから数時間が経過した。今は鈴とセシリアは説教を食らっている。

俺は責任者と話合いをしていた。修理と弁償のことで、けどその店長は別にいいと言うが俺は支払った。そのかわりに旅行のチケットを貰った。妙に落ち着かない。

相手の店長は女の人だったが……俺の顔を見るなりサインく  
ださいって言われた。

まあ、サインくらいしたけど。何か意味あるのかなって思う。

「ごめん。欄待たせて」

「いえ、誘ったのは私なので」

「いや、長い時間の間待たせたから」

「じゃあ、今から家に来ませんか？ 色々と教えて欲しいことがあるので」

「うん。いいよ」

俺は欄の家に向かった。というより欄の部屋に向かった。それにしても欄ってすごいよな。生徒会長で勉強も出来てISにも乗れるんだから。

「……………来年在しみだ」

「……………何か言いましたか？」

「いや独り言だから気にしないで」

「……………はい。つきましたよ」

色々な事を考えているとついた。それにしても定食が食べたくなる。昨日来たのにまた食べたくなる。だけど今日は欄に用事だしな。家にあがり欄の部屋に向かった。

「座って待っていてください」

「うん。ありがとう」

欄は一階に降りて行った。

それにしても女の子の部屋って入るのは初めてだな。俺

・・・いや一回だけ入ったことあったな・・・美由紀の・・・部屋に

でも、もう過去は振り返らない。

俺は視線を机に向けると机の上には

「・・・本当にIS学園入るつもりなんだ」

「お待たせしました。・・・あの、何をしてるんですか？」

「いや、ちょっとね」

資料のところどころに色々な事を書いた。

例えばISの基礎で必要なこと・・・とかね。

俺は欄からお茶を受け取り飲む。

そして、勉強が始まった。

「ISを装着する時は、自分だと思って装着するといいよ」

「なぜですか？」

「ISは自分のパートナー。自分の分身みたいな感じだから、俺はISを自分だと思ってる」

「そうなんですか・・・ISって難しいですね」

「そうだね。俺も初めてISに触れたとき感動したよ。こんなのが動くんだなって」

「?????」

？マークを思い浮かべる欄だった。  
だけどそこで

「!?!? この反応……………もう来たのか？ だけど反応が問う過ぎる。」

……………ここってアメリカ!?!」

「加津佐さん、どうしたんですか?」

「ごめんね。用事ができた」

「そうですか……………」

「また食べにくるから」

「はい」

俺は外に出たと同時にISを展開しアメリカに向かった。  
後で心の中で思った事がひとつだけ合った。  
……………アメリカに入って大丈夫なのか?

欄との再開（後書き）

次回 侵略

「加津佐と」

「のほんの」

「「ISを知ろうコーナー」」

「今日のゲストはこの方だよ」

「シャルロットデユノアです」

「キター！！ 人気投票が以上に高い」

「「「と言うわけで投票お願いします」」」

人気投票のキャラはこちら

奇跡 加津佐

織斑 一夏

篠ノ之 箒

凰 鈴音

ラウラ・ボーデヴィツヒ

シャルロット・デュノア（キセキ）

のほほんさん

織斑 千冬

篠ノ之 束

山田先生

以上の方の人気投票をしたいとおもいます。  
読んだかたは、投票おねがいします。

「それではシャル一番嬉しかった事を一つ」

「え〜と……加津佐……私のお兄……ちゃんにな  
って……くれたことでしょうか」

加津佐の胸に槍が突き刺さる。

「うっ、これは来るな」

「え？」

「ともかくだ。次回予告をしよう」

「うんうん」

「そうだね」

「「「予告です」だよ」」

一人外国に飛ぶ加津佐。

だがその頃IS学園内では、何か動き出そうとしていた。

「私も家族の為に戦っているんだ!？」

「だったら、その人達も俺が助ける。助けて見せる!？」

戦う加津佐。道は開かれるのか

「今回はながかったね」

「そうだね」

「でも、そろそろ終わらないと加津佐」

「うん」

「「「それではみなさん、人気投票と」次回を」よろしく」

「「「ね」」」

侵略(前書き)

これでいいのか.....。



## 侵略

俺奇跡 加津佐は現在アメリカに向かって飛行中。  
無論、千冬さんたちには連絡はしてない。絶対についてくるから・・・。

この戦いは俺一人で

「急がないとTORAIARU」

TORAIARUを使い一気にアメリカに飛んだ。  
頼む。間に合ってくれ。

<ナターシャ視点>

「え！？ わかりました。直ぐに行きます」

空と日本からISがこちらに向かっていているという情報を手にしたナターシャ。

直ぐにISを展開して現場に向かう。

そして・・・ナターシャが向かった先は

「・・・・・・・・なんなの・・・・・・・・あれ？」

全身装甲・・・・・・・・人の体をしていない。

「そこにいるIS今すぐに武器を捨てなさい」

「・・・・・・・・」

言葉を発しない。

そのまま不明ISはナターシャに攻撃を次かけ始めた。  
敵はライフルを構え打ち出した。

「・・・・・・・・BM!? どのISなの」

回避するナターシャ・・・・・・・・だけど、それを応用にBMが動く。  
まさかのBMが曲がった。

「BMが曲がる!? そんな・・・・・・・・くっ」

ナターシャは攻撃をするが全くきいてないようだ。  
それでもナターシャは必死に抵抗した。  
それでも不明ISには勝てない。

「このままだとやられる・・・・・・・・どうすれば」

それを考えている間に動いた不明IS。  
ナターシャに攻撃をどんどん当てていき

「シールドエネルギーがゼロに・・・・・・・・」

再びライフルを構え打ち出そうとする不明IS。

<加津佐視点>

「.....」

『そこにいるISただちに止まりなさい。止まらない場合迎撃をすることになる』

「僕を行かせてくれ!!」

ISが加津佐にめがけて攻撃を仕掛けてきた。

仕方ないが加津佐は、BMサーベルを抜きそのままISに突っ込んだ。

無数に連続で斬る。

「は、速い!?!」

「じゅめんね」

僕はISのシールドエネルギーを一気にゼロにした。

「え?」

その少女は海に落ちるが俺はそれをキャッチして陸まで連れていった。

「どうして私を?」

「僕は君たちと戦いにきたわけじゃない。それじゃ急ぐから」

IS反応が二機ある方向に飛んだ。

どうして奴らは、日本以外の場所にとんだんだ。

もしかして.....目的は僕じゃないのか?

「あれは！？ 間に合え！！」

シグマを使い『BMライフル』で敵が撃ったBMにぶつける。  
バチンツ！とナターシャの目の前で爆発した。

「なに！？」

BMサーベルを二本抜きそのまま攻撃に移った。

「貴様が奇跡 加津佐だな」

「………ああ」

「加津佐！？」

「うん。ともかく後で話すから待ってて。ここじゃ被害が出る違うところに移るぞ」

僕がそう言うとそれに応えるように小島に向かった。

この戦闘は誰も知らない。衛星にハッキングしてこの映像を取らない用にした。

だけどアメリカのレーダーさすがだな。僕が来る前に来るなんて少しアメリカに興味を持っていた。

小島に着いた直後に僕たちの戦闘が始まった。

「どうして戦う？」

「貴様には関係ない。死ね」

じゃあなんでそんな悲しい目をしている。  
まるで殺したくないのに殺せと言われた目だ。一体この人に何があ  
ったんだ？

僕はそれを思うと

「……………そうだ！ シグマだ」

「なに？」

僕は一夏のISデータをもとに二重瞬時加速を使った。  
ここで一夏の百式のデータが使う時が来るなんて思ってもみなかっ  
た。

加津佐の考えは、フリーアの時と同じで頭を触ればわかるのではと思  
った。

「頼む君の本心を」

頭に触れ映像が僕の頭の中で再生される。

『これは！？』

目の前では、生命体のカオスがこの人の家族を連れ去っているのが  
見えた。

それにカオスにこう言われてる。

『助けたければ、奇跡 加津佐を殺せ』

あいつ絶対に許さない。

「分かっただろう？ 私も家族の為に戦っているんだ！？」

「だったら、その人達も僕が助ける。助けて見せる！？」

それを聞いた生命体は

「だったらその力を私にみせよ」

フルバーストの構えをし、撃った。

「貴様の事を信じよう。気をつける。侵略はもう始まっている」

「ああ」

戦闘が終わり生命体は地球に向かわせた。

あそこならきつと

……そう言えば、ナターシャにどうやって説明しようか迷ってる加津佐。

嘘はつけない。俺のことを知ってもらうチャンスかも知れないな。

<同時刻ISS学園>

「ここに奇跡 加津佐が……急げ迅速に鼓動しろ」

「了解」

「隊長！ 奇跡 加津佐は、アメリカにいるとの報告が」

「なに！？」

「確かな情報です」

「仕方ない。アメリカに行くぞ」

「了解」

結局こいつらは何をしにきたんだ？

<一夏視点>

「ん？ 加津佐遅いな」

携帯がいいタイミングでなりその相手は

「織斑です」

『あ、一夏今日俺帰らない。それじゃ』

その一言で電話はきられた。

加津佐お前今どこにいるんだ？

## 侵略（後書き）

長くなってしまった。

応募する小説を書いているところからおろそかにしてしまう。

次回 混乱？

IS 知ろうコーナーはおやすみ。

「だって、のほほんさんがいないから、それじゃ次回に」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2214s/>

---

IS <インフィニット・ストラトス> シグマ

2011年11月19日17時52分発行